

---

# Muv-Luv Initiative

Caliz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - L u v I n i t i a t i v e

### 【Nコード】

N 0 4 5 9 V

### 【作者名】

C a l l i z

### 【あらすじ】

歪みの始まりはA・D・1983 12・16。

二度目の人生を歩む”転生者”が、御伽話の主導権を賭けて動き始める。

arcadiaにて、同名で同作品を投稿しております。  
不定期更新。

## 第零話 二度目の人生

A . D . 1 9 8 4    D e c , 1 6

人として”二度目”の生を受ける、という奇跡を体験した日から1年が過ぎた。

始めは確固たる意識がある訳ではなかった。

もし魂という存在があるとして、肉体という器に馴染むための準備期間といったところなのだろうか。

ノンレム睡眠の最中に無理矢理に叩き起こされたような酷い倦怠感、そして再度の休眠。

どれほどそのサイクルを繰り返しただろう。気付けばいつの間にか自我が完全に定着していた。

五感も正常に機能している。この時、既に生後半年を迎えていた。その上、俺はここが”来世”だということを確かに認識できた。

当然、戸惑いしかなかった。

お世辞にも長く生きたとは言えない”一度目”の人生を何度も反芻する。

……断言しよう。その手の奇跡を授かるような敬虔な人間ではなか

った。

生まれ育ったお国柄のこともあってか、宗教やら神と言ったものにはてんで無頓着に育った。

拳句、クリスマスと称して飲み食いして騒ぎ、その一週間後には初詣という混同っぷりである。

そんな自分が、前世の自我やら知識をほぼ完全に引き継いだまま、誰しもが一度は夢を見る”転生”などというオカルト的な特権を受け入れていいのか？と。

俺は不慣れな赤ん坊としての生活の最中、そういったことばかり考えていた。

そしてその半年後の、今日。

死に際を改めて回想してみる。

俺はバイクで高速を走っていたと思ったら、対向車線からタイヤをバーストさせた大型トラックがすっ飛んできて即死した。

……ああ。もう自分でも何が何だか解らない。

運が悪いなんて言葉で済まされていい訳がない。

中央分離帯を乗り越えて来るとか斬新すぎる。

完全に俺に責任はない。0：10で向こうが悪い。法的にもそうだろう。

あまりにも想定外過ぎる上、相対速度とかも考慮すれば避けようがない。

理不尽だ、不条理だ。

だから俺には二度目の人生を謳歌する権利がある。

と、結論を出した。

勿論、半年悩んでこんな即物的な結論な訳がない。正直に言うと半年も悩んでない。

ぶっちゃけると一時間掛けずに答えを出した。ならばこの半年間何をしていたかと言うと、闘っていたのだ。

現実と。

初めて母親から授乳する時

「えいじちゃん？はあ〜い、おっぱいでちゅよ〜？」

なんて言われて、もう本気で泣きたくなった。

ちなみに、えいじというのは俺の新しい名前らしい。どういう漢字が宛がわれているのかはまだ解っていない。

苗字は「ふわ」のようだ。こちらはまだ確認した訳じゃないが、恐らく漢字表記は「不破」だろうか？

「ふわ えいじ」それが今の俺の名前のようだ。いい名前だと思う。生前の名前もそこそこ気に入っていたが、なんというか、そう、響きがいいと思う。

しかし、母乳プレイとかマニアックにもほどがあるので簡便してほしい。

こんな経験しなかった。

勿論、始めは拒絶しようとした。

だが母親が物凄く悲しそうな顔をして

「う、うぐ……あなた……エイジちゃんが急におっぱい飲んでくれなくなつて……まだ乳離れの時期じゃないのに……」

なんて夫に向かって涙ぐむのだ。反則である。これじゃ拒否する訳にはいかない。

一度目の人生では両親が早々に他界し、ほとんど父方の祖父母に育てて貰ったようなものだった。

その祖父母も俺が成人し、社会人になるとまるで遣り残すことはないというかのようにあっさり死んでしまった。

だから円満で暖かい家庭と言うモノには常々憧れていた。

せつかくの貴重であろう二度目の人生。こんなところで両親との遺恨を残したくは無い。

覚悟を決める俺。なあにちよっと羞恥心を押さえつけるだけだ。

確か1才前後で離乳食にシフトしていくはず。

それまでの辛抱だ。耐えるんだ。

頑張れ、俺、超頑張れ、と喝を入れ、母乳を飲む。

マズいとまではいかなかったが、味が薄かった。

辛すぎる食事を終えた後は、現状でどれほど体が動くのかテストしてみた。

はつきり言って期待はしていなかった。

生後5ヶ月だ。まだ碌に動けるものではないだろうと、半ば諦めていた。

すると驚いたことに、立って歩くことに成功した。

壁に寄り掛かってではなく、二本の足で、である。

しかも、喋ることも出来た。

どうやら、赤ちゃんという存在を見くびっていたようだ。

世間一般から見れば、月齢5ヶ月でこれは余りにも早熟だろうが。神経系の成長が早いらしい。

前世の知識と経験があるとはいえ、体が付いてこないだろうと思っていたのでこれは僥倖だ。

両親は「うちの子はもうしっかり喋るし歩くし天才だな!」などと

喜んでいた。

勿論、多少の罪悪感はあるが、演技している。わざわざ自分から転生しましたなんて広めて頭のおかしい子扱いされるのは嫌だ。

あくまで「一般常識の範疇において早熟で賢い子」だと認識される程度の行動しかしていない。

……いや、例外としてトイレだけはそういったことを考えずに自重せず、自分で行くようにした。オマルだが。

生後半年で自主的に行くというのは異例すぎるのだが、お漏らしだけは避けたかったのだ。

……精神年齢二十歳を軽く超えているのに、お漏らしは辛すぎる。オムツをしているからお漏らししてもいいなんてことは決してない。あんな不快感を味わうのはご免である。

と、避け得ない多種多様な面倒事があった訳だが、俺は今日、無事に1歳を迎えることが出来た。

先ほどまでテーブルを囲んで誕生日を祝ってもらっていたばかりだ。今は寝たふりをしながら脳内会議をしている。

今日を一つの転機としよう。

いい機会だ。意識的には丁度半年、体の起源からすれば丁度一年。定めるべきだろう。

今後の身の振り方の方針を。

半年前の覚醒の日から、俺は行動を開始していた。

この世界の情報収集である。

動き回れるならば行動しない訳にはいかない。

俺はどんな世界の、どんな星の、どんな国に生まれたのか？

両親の会話、テレビに映される世界、目に付いた様々な文字の羅列、  
e t c , e t c .

身の回りで手の届く、視線の届く全ての範囲から情報を読み取った。

……まあ、自分の名前や両親の喋る言語で九割予想は付いていたが、ここは地球の日本のようだった。

入ってくる情報の全てが日本語だったから、当たり前と言えば当たり前前なのだが。

肝心の時間だが……俺の意識が覚醒した時点での西暦は既に1984年だった。

そして俺の誕生日である今日は、1984年12月16日で間違いないようだ。

生まれ変わりの際に過去へと遡ってしまったのかと思ひ込んだ。

輪廻転生とやらは時間を超えて過去へと逆行することも出来るのかと。

だがそういった疑問も、すぐに消えていく。

安堵したのだ。まず日本語が、そして何より自分の常識が通じる、と。

そう思った。

……が、更に情報を収集していくことによつてそれは勘違いだと気づかされることになる。

所々で両親の会話に入り込む、俺の知る1984年の日本の情報とこの世界の日本の情報との齟齬。

戦争中?……どこと、どこの陣営が?湾岸戦争にはまだ早い。冷戦こそ続いていたが、1984年現在に日本から見ても戦争と呼ばれる規模の争いが起きているのはおかしい。



日本帝国?……第二次世界大戦は40年も前に終わったはずだ。時代錯誤が過ぎるんじゃないのか?

戦術機?……戦闘機の聞き間違いだ。そうに違いない。まだ子供なのに耳が遠くなっただか?俺。

B E T A ?

……腹を括るしかない。最早、疑う余地もない。全ての情報を整合するに……誠に信じがたいが、現実として受け入れるしかないだろう。

ここは間違いなく、マブラヴの B E T A と戦争している世界の日本だ。もし仮に俺を転生させた神とかいうのがいるとしよう。

チェーンソーでバラバラにしてやりたい。

創作フィクションの物語世界に転生。なるほど、そういうものもあるのか。悪くない。むしろ、いい。望むところだ。夢のようだ。歓迎しよう、盛大に。

その物語の世界観が絶望的じゃなければ、だが。

何故、何故に幾千幾万もある物語の中から、よりもよってマブラヴなのか ツ!

確かにマブラヴは好きだ。戦術機、いいね、大好きだよ。A3最高じゃないか。

だが、それとこれとは話が別だろう。転生先としては泣いて謝ってお断りしたい世界だろう。

これじゃ俺は人生を謳歌するどころか、桜花のように散ってしまう可能性のほうが高い。

誰が上手いこと言えと言ったって？別にそういう意図で言った訳じゃない。

この世界に生きている限り、死ぬ可能性からは逃れられない。

生前の平和と言える世界でさえ、俺は事故で死んだのだ。

ましてやこの世界は戦争中だ。死亡確率は極めて高い。

俺は既に一度死んでいる。そして、死ぬ時の感覚も、覚えている。

一瞬の衝撃と、一瞬の激痛の後に訪れた、無。

あの言葉では形容し難い感覚。

アレをもう一度味わう？ BETAに食われゆく中で？冗談じゃない。

死にたくない、そう易々と二度も死んで堪るか。

無い知恵絞って、考えてみよう。具体的に死なないようにするにはどうするか。

傍観する？いや、却下だ。

傍観は死を受け入れるのとはほぼ同義だろう。何故か？それは、十中八九、地球は滅亡するからだ。

オルタネイティヴ5によってBETAの魔の手から逃れることが出来るのは選ばれた約10万人のみ。

その約10万人に選ばれることが出来れば、生き残れるだろう。だが、その他大勢の人間を滅亡が確定している地球に残して、だ。

なら、逃げるか？

あらゆる手段を用いて選ばれし10万人になり、逃げるか？この星から。

それが、元一般人の俺に出来る最良の選択ではないか？  
だが選ばれる根拠なんてどこにもない。

それに今からそれを進んで選択するのは、正しいことか？間違いじゃないのか？

逃亡を選ぶのは、本当にどうしようもなくなった時でいいのではないか？

この考えも希望的観測から来る楽観なのだろうか？

だが、理性でも本能でも、逃亡という行為に対して中々納得がいかない。

……一時、保留。

ならば 立ち向かうか？

この過酷な御伽噺に、介入するか？一般人だった俺が？

覚悟もない、本格的に体を鍛えたこともない、喧嘩すら碌にした事もない、この俺が？

……極めて困難だろう。徴兵されるまでに時間的猶予があるとはいえ、到底出来るとは思えない。

確かに前の人生ではそこそこ不幸で厳しい経験をしてきたとは思いますが、この世界でこれから経験していく『闘い』と比較するには、俺の前世なんぞ対象としては温過ぎるはずだ。

戦争。それは想像も付かないほど、俺の持つ常識から懸け離れた事象。

そんなところに自分から飛び込むというのだ。

もし、もし仮に適正が合り、試験で合格して衛士になれたとしよう。そして更に『白銀武』が出来たように俺にも上手く戦術機を扱えたとしてしよう。

それでも俺がBETAとの戦闘で生き残ることが出来るビジョンが見えてこない。

また、仮に介入するとしても問題が山積みだ。

不確定要素が多すぎる。

下手な介入をして未来への希望の種を潰してしまいました、ではお話にならないのだ。

だから、慎重にならざるを得ない。

故に余計なことをせず、全てが始まる日、2001年の10月22日まで待つという選択肢すら候補に上がってくる。

アンリミテッドなのか？それともオルタネイティブなのか？

それすら未だに解っていないのだから。

解っていれば我武者羅に行動出来るというのに、それが解らないだけでここまで行動を束縛される。

一体この世界は、どちらなのか？

それは、1998年に日本をBETAに蹂躪された挙句、

1999年の明星作戦においてG弾が投下され、

2001年10月22日に現れた『白銀武』がどういった存在か見極めた時に漸く解ること。

なんとという後手。それでは遅い、遅すぎる。

そんな所から介入したって、大局に影響はない。結局、全てが『白銀武』任せ。

『二度目』の武が現れたと仮定しても、それまでに余計なことをしていれば桜花作戦が失敗してしまうリスクだつてある。

ただでさえ甚大な犠牲を出しながら綱渡りの末に成功しているのだ。妙な刺激を与えれば、綱ごと全てが墮ちるとしても不思議じゃない。だったら、やはり介入などせずに傍観したほうがいいのではないか？ 全てを運に任せ、武が世界を救ってくれることを祈り続けるべきじゃないか？

否、断じて否だ。

2001・10・22に現れたのが『一度目』の武だった場合

計画は5段階目に突入、G弾は無効化され、地球は貪り尽くされるだろう。

そして最悪なことに、『一度目』の武が来る可能性のほうが圧倒的に高い。

だから、介入しない訳にはいかない。少しでも日本を、世界を、人類を有利にするために。

だが、下手な介入をしてはいけない。少しでも日本を、世界を、人類を不利にしないために。

……余りにも厳し過ぎる現実に板ばさみされたこの状況。

どう打破すべきなのか？

まだ十年以上先のことなのに焦ってしまう。

考えが纏まらない。方針が定まらない。

どんな行動を起こせばいい？まず何をすべきだ？

最高の、最良の、最低限の未来を確立する為に、俺は一体どうすればいい？

……いや、待て。何か引つかかる。見落としていたことでもあるか？

『1998年に日本をBETAに蹂躪された拳句』

ああ、そうだ。

そっすよクソッ！

そもそも、俺に地球の未来がどうのこうのと大局のことを考えている余裕なんてないじゃないか。

何を神の視点で語っている。

己の視点で語れ。

このまま此処にいては、BETAの大軍に飲み込まれて死んでしま  
う。

俺も。まだ実質半年の付き合いだけど、俺に二度目の生を与え、愛  
を込めて育ててくれた”新しい両親”も。

死んでしまっ。皆、皆、死んでしまっ。

ここは、決して遠くはない未来、地獄になる場所。

俺は、自分が九州地方の熊本県に在住しているということを、完璧  
に失念していた。

## 第一話 平和な日常

A・D・1986 Summer, oneday

夏。

家の庭で行われているのは、セミのうぎったいほどの大合唱。

「……………せからしか……………」

あまりにも不快過ぎて思わず声に出してしまう。

五月蠅いだけではなく、暑さまで酷くなったように感じる。

それを緩和してくれる体を撫でる心地よい乾いた風と、涼しげな音を鳴らす風鈴。

カラン、と両手で持った麦茶の入ったコップから氷の音が響く。

「……………はあ……………」

平和だった。

今この瞬間も大陸のほうでは地獄のような戦闘が行われているはずだ。

だというのに俺は日常の中に居て、そこは平和で満ちていて。

10年後に西日本が壊滅するなんて、まるで嘘のよう。

眺めていた庭から背後に視線を移してみると、父と母がまったりとスイカを齧りながら和やかに会話をしている。

纏っている雰囲気からは、焦りや不安といった負の感情は一切読み取れない。

この日常が壊される事無く、いつまでも続くと思っているのだろうか。

でもそれは、絶対に叶うことのない思いだ。

1986年。

大きな世界情勢の動きとしては、欧州のほうでECTSF計画のゴタゴタがあったはずだが、これは俺には無縁だ。

米国でF-16の配備、各国への売り込み開始。これもF-15が採用される日本には関係がない。

国内の動きは本土防衛軍の設立と、異機種間戦闘訓練で巖谷中佐

いや、今は大尉だったか。が、F-4J改『瑞鶴』でF-15撃破、か。

相手はイーグルドライバー……容易い相手じゃないだろうに、性能で劣る瑞鶴でよくやる。

そして肝心の大陸のほうは、統一中華戦線の誕生と……ああ……そうか、もうそんな時期か。

H:12 リオンハイヴの建設が開始される年だ。

コイツは物語が始まる2001年時点でユーラシア大陸最西端に位置し、フェイズ5になっているであろうハイヴ。

つまり、BETAのこれ以上の西進は、ない。欧州の戦力がそれを許さない。

あそこには文字通りの”英雄”がいる。それに単純に軍全体の練度が高い。対BETA戦の経験が段違いだ。

だから次は 東進だ。

父さん、母さん……。日常はそんなに長く続きそうにないよ。



俺が2度目の生を受けてから2年と半年。

1歳の誕生日より今日に至るまでに1年と半年が経過した。

その間に新しく入ってきた情報は、今後の行動方針を決定付けるのには十分すぎるものだった。

どうやら　　俺は、権力やコネとは無縁の家に生まれたようだ。

勿論、幾つか想定した事態にこの状況はあった。

あったが……実際にその事実を突き付けられた時の落胆は凄まじいものだった。

両親の家柄、土地、職業、親族、全てに置いて権力者との繋がりが見られなかった。

これは俺がこの先、大規模な介入を行うことが出来なくなったという事に他ならない。

大きなことを成すためには、大きな力が必要だ。

その力を直接持っていなかったとしても、力を持つものと繋がりがえあれば助力を請うという方法もある。

しかし、その繋がりすらもない状態からの開始となってしまった。

勿論、極めて過酷で険しい道程になるだろうが、作ろうと思えば作れる。

ただどうしてもそれ相応の時間というものが掛かってしまう。

軍への入隊は15歳からだ。

義務教育終了後に志願して訓練をこなし、一度目の総戦技演習で合格する。

これが最速での任官への道。

ここまでやって、漸く俺はゼロからのコネ作りのスタート地点に立つ事が出来る。

だが……BETA本土上陸時、俺はまだ義務教育すら修めきっていない14歳と半年のガキでしかない。

つまり、例え天地が引つ繰り返ろうとも俺はBETA本土上陸に対して大規模なアプローチを掛けることは出来ない。

俺はその時点で、未来の情報を最大限活かすことの出来る立場にいない。

発言に力がある訳もなく、後押ししてくれる人も居らず、故に耳を傾けてくれる者などほとんど出てこないだろう。

戯言、世迷言と切り捨てられるのがオチだ。

絶望の二文字が頭を過ぎる。

ダメだ。

権力が、地位が、コネがあれば……ついそついう無い物ねだりをしてしまう。

何とも情けない、みつともない行為だ。不毛極まりない。

だから、元よりそんな都合よく権力やコネのある家庭に生まれるほうが異常なのだ、そう考える。

俺は気分を落ち着けるために結露が起きたコップを傾け、キンキンに冷えた麦茶を喉に流し込み、不安と一緒に飲み干す。

……滞ってしまった思考を前に進めるため、1998年夏の大侵攻への対策は間に合わないという事実をとりあえず受け入れよう。

その上で、何かできる事を模索しなければならない。

だが、答えなど一つしか無い。三十六計逃げるに如かず、だ。

闘えないならば、死なないためにも、何より闘う者の邪魔にならな  
いために逃げるのが賢い。

故に無力な民間人である俺に許された選択肢は、もう逃げの一手しかない。

しかし、不可解だ。なぜ3600万人もの死者が出てしまったのか。疎開令が行き届いていなかった？馬鹿な、あり得ない。

去年に帝国政府がオーストラリア、オセアニア諸国と経済協定を締結し、西日本が戦場になった場合を想定して主な生産拠点をそれぞれの国々へと移し始めたのを確認した。

これは疎開政策の一つ。つまり、疎開は1985年から既に始まっていたということになる。

それならば10数年後に、西日本の住民に対して疎開しろという政府の訴えかけが情報として渡り切っていない訳が無いのだ。

確かにそうだった問題とは別に、疎開しろと言われて、はいそうですかと応じる訳にはいかない。

生活と言うものがあるのだ。今の生活を手放せと言われているのと同義だ。だから易々と領けない。

だけど、戦場になる可能性があります、と言われて残るだろうか？生活云々の前に死ぬ可能性があるというのに。

…… BETAに蹂躪されて、死ぬかもしれないということなのに。

「……俺なら真つ平ゴメンだね」

恐怖すら覚える。

これは俺が悲惨な未来も、BETAの醜悪なフォームも知っているからこそ沸いてくる恐怖心なのだろうか。

BETAの情報は一般大衆に対して秘匿されているから、恐怖感、現実感が沸いてこないということもあるかもしれないが……。

いや、やめておこう。

何にしる、3600万人というあの死亡者数は逃げると言われて逃げなかった人間の数字だ。

つまり死んだヤツらはBETAを過小評価した、または日本帝国の力を過大評価してその場に留まったということ。

判断ミスによる自業自得だ。そんな顔も知らない何千万人がくたば

るうが、心を痛めることも無いだろう。

どうでもいい。所詮は他人だ。

俺にとつては有象無象。そう思い込んでおけばいい。

自分と両親を守る事が出来れば、それでいい。

俺の手はそんなに広くも大きくも無い。

3600万もの人達の命を救うことの出来る方法なんて無い。

だから、BETA本土上陸に対する基本方針として 自分た

ちの避難を最優先とする。

喉に酷い渴きを感じ、再びコップを傾けて残っていた麦茶を勢いよく飲み干す。

いつの間にか氷が解けて、味が薄くなっていた。

見上げた空には雲一つ無く、ギラリとその存在を主張する太陽からは夏の強い日差しが降り注いでいた。

嫌な汗が滲む。そろそろ日差しが辛くなってきた俺は、空になったコップを持って立ち上がり、逃げるように縁側から立ち去った。

台所に入り、俺用の足場に昇ってコップを流しに置く。

そして両親に昼寝をすると伝え、寝室の布団に仰向けになって腹にタオルケットを掛け、目を閉じる。

すると子供特有の睡眠欲求というものなのだろうか、徐々にだが眠気がやってくる。

昼寝はもはや習慣になっていた。

眠りに落ちるまでの間、大まかな今後の流れをまとめてみる。

まずは、避難。

避難先の確保、避難のタイミング、避難先での生活レベルの確保など、考慮すべき点が幾つかある。

最初に避難先だが、身を預けれそうな親戚が2箇所に住居を確認出来ている。

一方は沖縄。もう一方は茨城。

前者が母の、後者が父の実家とのこと。

どちらも1998年夏の大侵攻を免れる事の出来る場所なのが幸いだ。

このどちらかに両親と逃げる事が出来れば一つ目の山を越す事は出来る。

次にタイミングだが……これはある程度の時間的余裕を持てれば、ぶっちゃけると何時でもいい。

それこそ、1998年に入ってからでも十二分に合う。

故に特別急ぐような事ではない。早いに越した事もないだろうが。

問題が、避難先での生活レベル確保だ。

こればかりは低下を避けられないだろう。だが可能な限り低下を和らげたいところだ。

国土の半分以上を失う事になる故に贅沢なんて言ってられないのだが、両親に辛い生活を強いりたくは無い。

だとすれば、やはり兵役に就き、危険な任務を遂行することによって発生する特別手当も考慮すべきか。

しかし父、不破 俊哉は既に徴兵期間を終えている。

衛士適正が無く戦車兵は嫌だとのことで整備兵として2年間訓練したらしい。

再度徴兵される時期には40近くで適正年齢ギリギリ、仮にされたとしても過去に経験のある整備兵だ。

最前線に出されることはないだろう。

母、不破 涼子は既婚女性なので初めから徴兵対象外だ。

つまり、危険な箇所に配置される可能性が高いのは俺だけになる。

両親からすれば我が子だけが徴兵されるのは辛いだろうが、そこは我慢してもらい、比較的安全な所で暮らしてもらおう。

その後は、どんな形でもいいから徴兵の際に横浜基地に所属できるように動き、2001年10月22日まで生き延び、白銀武と接触してその存在を見極める。

雌伏の時と言うヤツだ。この間に出来うる限りの”仕込み”をする。二度目の武の邪魔にならないようにしつつも、一度目の武のフォロ―にも回らなければならぬ。

これについてはまだ詳細の構築に至っていない。時間を掛けてじっくり練っていきたいモノだ。時間はまだまだある。持っている情報を可能な限り出し切って有効活用し、予備案も可能な限り細かく何重にも張り巡らせたい。

最低限の未来　　オリジナルハイヴ攻略へと続く流れを確保する為に。

ここまでは、俺にとっての義務だと思っていだろう。やらないとなんて冗談のような現実が待ち受けているのだから。また、流れの確保が出来た上でそれを維持しながら要所要所で状況の改善を望めそうならば……更なる最善の未来を可能な限り開拓していく。

それは誰かが死ぬ運命を押し曲げることだったり、そしてオリジナルハイヴを攻略してしまえば、それで終わりだ。日本からはBETAは駆逐された。

人類側は有利になった。

白銀武と鑑純夏は結ばれ、ループの束縛は解かれる。

そこまで来てしまえば、俺はお役ご免だろう。

これが、俺にとっての終着点。ゴールだ。

後は……香月博士に丸投げしていいと思う。

きっと残りのハイヴも何とかしてくれるだろう。

「…………ふぁ…………」

そこまで考えていよいよ眠気が臨界点を越えたのか、思考が鈍り、意識がゆっくりと闇に沈み始める。

ふと、そういえば、この眠りにつく感覚は死ぬ時の落ちて行く感覚

と似ているんだな、と思った。

あの深くて冷たい暗い闇に沈んで、全てが無に返っていく感覚。けれど、あの時とは違って闇は暗くて深いけど、暖かい。

そしてまたちゃんどこっちに戻ってこれるっていうのが、理屈じゃなくて理解できる。

きつと何時もの様に一、二時間で母が起こしに来てくれるのだろう。あの時、この世界に生れた時と同じように、俺を深い闇から掬い上げてくれる。

敬愛してやまない父と母。

感謝を。

新たな人生を、健やかな毎日の生活を与えてくれていることに、感謝を。

目が覚めたら夕飯になるだろう。

確か母さんが今日は素麺だと言っていた。楽しみだ。

暑い日が続くから、きつと美味しいはずだ。

3人で食卓を囲もう。

その後は父さんと風呂に入る。

毎回嬉しそうに水鉄砲を撃ってくるのはそろそろ簡便してほしいが。そうやって日々を刻んでいこう。

いいと思う。今は、まだ。

まだBETAは来ない。

まだ日常は終わらない。

だから今は、この一時の平和を噛み締めていこう。

## 第二話 未知との遭遇

1987・March・Oneday

名前というものがある。

生まれたときに付けられるもので、変更も効くが一生付き合っていくというのが一般的だろう。

それはとても大切なもので、色んな思いや願いを込められて命名されるもの。

だというのに前世では通称DQNネームと呼ばれる、名前の変更を家庭裁判所に届け出るべきだ！と迷わず断言出来るような酷い名前を付けられる子供もいた。

光宙と書いてピカチユウと読むのは泣いていいと思う。実物を見たわけではなかったから、フィクションだと思いたい。

その日、両親は二人で買い物のために外出した。

俺も連れていかれる予定だったが、一人で留守番を試してみたいと試しに言ってみると二つ返事でOKを貰えた。

普段から年不相応に落ち着いているのを見せられているせいか、両親の判断基準がブレているような気がするが結果はオーライだ。

だが特に理由があって居残った訳ではない。一人になれる時間が欲しいと漠然と思って行動しただけだった。

その後案の定手持ち無沙汰になった時、ふと俺は未だに自分の名に宛がわれた漢字を知らなかったな、と思に至る。

思い立ったが吉日という言葉もある。俺はすぐに家宅捜査を行った。



そして今。

俺は両親の寝室にあるタンスの前で打ちひしがれている

手に握るは母子健康手帳。

開かれたページには俺の名前。

そこには四文字でこう書かれている。

【 不破 衛士 】

「Oh……」

英語で呻いて手帳を閉じた。

ゴッド、嫌な汗が止まりません。

しかし……だがしかし、一度だけなら誤射もとい、目の錯覚かもしれない。

よおし！勇気を振り絞ってもう一度確認してみよう！

俺はバツ！と勢いよく手帳を開いた。

【 不破 衛士 】

「Oh……Jesus……」

なんという……。

なんという……。

これが俺の名前に当てられた字だというのか。  
神は死んだ。

なんて酷い漢字構成だ……。  
ある意味DQNネームより困ったモノだろこれ。

こいつは俺、間違いなく学校とかで馬鹿にされそうじゃないか？ガキって思慮足りないし容赦もないし。

いや、変ではないよ、うん。常用漢字だし、響きもいいし、何よりエイジと読める。

前の世界でなら衛士という漢字でエイジと呼んでも特に問題はなかつただろう。

というか実際に存在もしていた。そういう名前の人が何人かいたのを覚えている。

けれども、だ。この世界でこの二文字が意味するものは一つに他ならない。

人類の盾にして剣たる、誉れ高き選ばれし兵士達の呼び名だ。

そういえば父は徴兵時に衛士適正ナシと判断されており、泣く泣く戦術機と携わることが出来る整備兵になったと耳にした。

この名前を付けた理由としては、息子に夢を継いで欲しいと言った所だろうか。

新生児に付けられる名前というのは世界情勢や国家情勢、それに流りモノ等に左右されるといふ話を聞いたことがあるが……。

俺はその一環を身を持って体験させられてしまったとも言っのか。それにしても職業の名前をそのままつけるのは流石にどうなんだよこれ。

せめて少し捻るべきだろ。

「……………あがー……………」

将来ウサミミESP娘が呟くであろう呻き声を発しながら頭を抱える。

何と言うか……このネーミング、両親が狙ったのだろうか？

不破 衛士。

似たような漢字構成で不殺と書いて殺さずとか読むのをどこの剣客漫画で見かけた。

ならば不破と書いて破れずとでも読んでみようか。

破れずの衛士。

なるほど、涙が出るほど完璧である。

死の八分を名前のご利益だけで突破できるのではないか、というアホな錯覚を覚えそうなほどに素敵な名前だ。

ああ、衛士になればの話だけだな。

まだなれるかどうか一切解らない段階だろうって話だ。

というかこの名前でも衛士適正検査弾かれてみる。赤っ恥なんてもんじゃないぞ。それこそ改名ものだ。

そもそも、あの検査は努力とかそいつたものを超越したところで適正が決定されていたような気がする。

一体何が要因となって適正があると判断されるのか謎だ。異常に優秀な三半規管？ 尋常じゃなく突出した空間認識能力？ さっぱり解らん。

どうせ後々徴兵される時に衛士適正検査は避けられない。だから適正があれば儲けもの程度に思うのが賢明か。

その結果次第では、衛士になるという選択肢が俺の前に広がる一つの可能性としてあるだろう。そのぐらいの認識でいい。

忘れられがちだが衛士というのはエリートコースの一つ。歩めるならば歩いてみるのもいいだろう。

俺の目的達成のためにも、階級が上がりやすいのに越したことはない。

だが、その道は極めて法外なチップを要求されるのを決して忘れてはいけない。

掛け金は俺の命。そしてオツズは大穴もいいところ。なんてデンジヤラスなコースだろう。

BETAに貪られて二階級特進なんぞ御免被る。

お父様、お母様。そんな茨の道を積極的に歩めと仰いますか？

二人が帰ってきたら必ずどういった経緯でこんな名前をつけたのか  
問い質してやる　ッ！

俺は決意を胸に居間にて両親を待つことにした。

「ま、夕方まで帰ってこないんですがね……」

息巻いて握った手帳を持ったまま居間に来たのがいいが、手持ち無沙汰になってしまった訳だ。

……スーパー詰問タイムまでまだまだ暇がある。

さて、どうするか。特別することもない。

この年だと本格的な体のトレーニングはまだまだ早すぎる。

こんな時期から無茶をやって体を壊すのも莫迦らしい。

故に、本気で取り組めるのは柔軟ぐらいしかない。ただ、それだっ  
てもう十二分に柔らかい訳だが。

だったら脳のトレーニングでもするか。最寄の図書館なら集中して

勉強が出来る。

しかし、留守番を仰せ付かった身としては外に足を運ぶ訳にも行かないか。

なら家の中で……無理か。今この家に存在するその手の類の書物など既に手垢がつくほどやり尽くした。

時間は成るべく有益に使いたところだが、時には怠惰に過ごしてみるのもいいだろうか。

と言っても時代や世界情勢のこともあり、中流家庭の我が家にある娯楽なんぞTVやラジオがいいところである。

80年代ということもあってネットのような上等なものは当然ない。将来的に普及する可能性についても、一切期待しないほうがよいだろう。

この世界では当分の間、TVとラジオが大衆にとって最も馴染み深くなる娯楽家電となる。

まあ俺はその二つに新聞を加え、情報収集としての意味合いで使うことの方が圧倒的に多いが。

政治、軍事、世界情勢……調べなければいけないことは数多い。

歴史の流れはある程度把握してる。だが逆に言えばある程度でしかない。

圧倒的に空白の時間が多いのだ。それを埋めるためには多種多様な情報を集めざるを得ない。

ただ最近始まった国営放送のラジオドラマ「いつか君と……」。

これだけは毎週欠かさず、純粹に楽しむために聴いている。

このラジオドラマは衛士と整備士の恋物語だ。こいつが中々面白いのである。

まあ父曰く、整備というのは激務であって衛士と恋愛する暇があるならその時間で体を休めて作業効率を上げた方がいい、とか夢もへツクレもないことを懇切丁寧に教えてくれた。

その直後、希望を打ち砕くような教育に悪い情報を与えるなど母からキツくお灸を据えられていたのにはちょっと同情した。

けど残念だ。今日は「いつか君と……」の放送日じゃない。  
この時間だと他に何かやってるだろう。チャンネルを回し、周波  
数を弄る。

『それでは明日の天気図です……』

「……まだニュースがやってるだけマシだと思っておくか」

情報を集める作業の始まりだ。

さて、何か目新しいことはないものか。

今年に入ってから政治関連でのニュースはいくつかあったが、肝心  
の軍事関連はさっぱりである。

F-15が技術検証という名目で今年中に試験導入されるはずなの  
だが、機密やら何やらに引っかかっているのか動きが全く見えない。  
まだ4月と今年の半ばすら過ぎていないが、それを考慮しても何ら  
かの情報は既に流れていておかしくない。

大して有益な情報でないと判断されたのか？ 確かに放送で国民に  
伝えてどうなるといった類の情報ではないが……。

何はともあれ早く耳に入りたいのである。そうなる、と解っていて  
も確認しないと気になってしまうのだ。

出来るだけ早急に続報が欲しい。

しかし軍事関連と言えれば去年の日米合同演習は存外に驚いた。生中  
継とかしてくれるもんなんだな。

そのおかげで巖谷おじ様無双がリアルタイムで見ることができた。  
やはり性能で劣る機体で格上の機体相手に腕の差で勝つというのは  
胸に込み上げてくるものがある。

それにあそこで負けていれば純国産機開発の道が絶たれていた可能  
性は極めて高い。

あの一勝は日本帝国にとって、とても価値のある一勝だった。

『続いている……去年……れた……期力戦術選……国防省は……』

……噂をすれば何とやら。TVに感あり。

ニユースキャスターが興味深い言葉を放ってくれた。タイミングが完璧である。

これで漸く技術蓄積が足りずに停滞していた不知火の開発が進み始める訳か。

でも、そこまでやっても結局は拡張性の確保までには至らなかったんだよな……。

こればかりは日本の技術力が純粋に足りなかったからで、俺にどうこう出来ることもない。

俺一人がどうこうしたところで、技術力の底上げなんて出来るわけがない。

それは、ただ只管にトライアル&amp;エラーの繰り返しをすることでは解決出来ない、とても尊いものだ。

これから富嶽、光菱、河崎の三社はF-15のライセンス生産で技術力を蓄積させ、そして見事に不知火を作り上げる。

だから結果が解っていたとしても、今は純国産機開発への第一歩が始まったことに喜んで……

『本日付けでF-15とF-16を試験導入が開始されることが判明しました。尚』

「は？」

……何だった今。

ちよつと待て。

F - 15と

F - 16？

何故、F - 16まで！？

待ってくれ、意味が解らない。知らない、俺はそんなの知らない！

試験導入？何故だ、そもそも最終選考に残っていたのはF - 15とF - 14だろ。

なのに何故ここでF - 16の名前が出てくる！？

どういうことなんだ、何でこんなことになってる！？

『比較検証トライアルの後、勝ち残ったどちらかが実戦部隊に引渡しされる模様です』

待てよ、待ってくれ！ 有り得ない、もうこの段階で既に実戦部隊引渡しが確定しているだと！？

初めは技術検証目的だったはずだろ

ッ！

ギシりと、TVに押し当てた両手が軋む。

動揺のあまり、興奮して無意識にTVに掴みかかっていたようだ。

「畜生ッ！何なんだよ、これは……」



頭がおかしくなりそうだな。夢であって欲しい……。けれど、想像以上に力を入れてしまっていたのか、両手が痛い。これは、紛れもない現実。認めたくない、これを認めたら、俺はこれからどうすればいいのか解らない。

「　　ツ……莫迦、何取り乱してんだ……」

頭を冷やせ。まずは一度落ち着いて自分の知っている　　いや、  
”知っていた”情報をまとめるんだ。

日本は停滞した国産機開発のために技術検証の名目でF-14とF-15から後者を選抜し、12機を試験導入。後に技術格差を目の当たりにして188機を追加受注、最終的には予定調達機数を絞って120機のF-15を配備することになる。

はずだった……蓋を開けてみればどうだ。

実戦部隊引渡し前提でのF-15とF-16の比較検証トライアルがこれから始まる？

俺の知っているオルタネイティブ、アンリミテッドの歴史にはこんなことはなかった。

本編にだってF-15Jしか出ておらず、F-16なんて影も形もなかった。

第一、F-16は次期主力戦術機としてエントリーすらしていなかったはずだろう。

確かに、時系列的には矛盾はない。F-16は去年に米国で実戦配備され、それと同時に他国への輸出を精力的に行った。

今この段階では特に居座古座も起きておらず、イデオロギー関連で両国の関係は良好だ。優先して回してもらえても別に不思議ではない。

しかしまだ1年しか経っていないだぞ？ 余りにもトントン拍子に事が進み過ぎている。頭が突撃級の前面並に硬いエセ国粹主義の老害だって相当いるはずなんだ。

いやもつと根本的な問題がある。

そもそもこの歴史じゃ、オルタネイティヴ、アンリミテッドが始まる未来へと繋がらない。

「……待てよ、まさか……」

そう。オルタネイティヴでもアンリミテッドでもない。

似て非なる未来、全く異なる未来へ繋がる歴史を辿るといふのな。

「……そんな、嘘だろ……ッ！」

怖い。震えが止まらない。

未知が、忍び寄ってくる。

「……だとすれば、この世界は」

どうしてこうなるのだろう。俺のような異分子が紛れ込んだせいなのだろうか。

今回のことは単なる予兆に過ぎないとも言っのか。

そして、これから更なる未知の深淵へと突き進んで行くのか。

この世界は……オルタネイティブやアンリミテッドの過去を基にし  
ながらも、今日この日から道を違えてしまった。

「 Ifの世界だとも言っのかよ ツ！！！」

俺の切り札であるはずの「未来情報」が、単なる「正史の歴史」に  
変わった瞬間だった。

### 第三話 熟考する転生者

A . D . 1988 . June . One day

「三十七度六分……」

脇から抜き出した体温計が、無情にも自分が微熱を発していることを示す。

朝、目覚めた時に頭痛と倦怠感を覚え、もしやと思つて計つてみれば案の定。

紛う方無く風邪による発熱の症状である。

健康には気を使つていたつもりだが、まさかこんな初夏に拗らせてしまうとは……何たる不覚。

「……完全に風邪だね、これは」

そう言つて父 不破 俊哉が困つたように眉をひそめた。

格別、風邪の症状が酷いということはない。常備してある薬を飲んで寝ていれば治る、医者に見せる必要性もない程度のモノだ。

困っている要因は別にある。今日はどうしても、外せない仕事がある。親共にあるとの事。

いくら息子が年齢不相応に落ち着いている事を理解していても、風邪で寝込んでいるのを放置して仕事に出かけるのは心苦しいようだ。

「パパ？エイジの調子はどう？」

「七度六分。微熱だね……過剰な心配は必要なさそうだけど……」

母　　不破　涼子が俺の部屋にヒョコツと、これまた父と同じく困ったような顔をして現れた。

「……エイジ、本当に看病しなくていいの？お仕事は休むことだつてできるんだよ？」

看病をしてくれる、という提案は既に何度か断っている。  
気持ちは涙が出そうなくらいに有り難いのだ。

だが俺とて社会に出て荒波に飲まれたことのある人間。

大事な仕事をキャンセル、または急遽他人に押し付けるということのマズさは理解できているつもりだ。

ここで甘えてなどいられない。

余り使いたくはなかったのだが　　。

「大丈夫だよ、今日は薬飲んで大人しくしてるから。父さんも母さんも、お仕事頑張ってるね！」

必殺。天使の微笑。親は悶え死んだ。

「~~~~~ツ！よし！パパお仕事ガンバッテ早く終わらせちゃうぞー！..!」

「~~~~~ツ！マ、ママも頑張るからね！ちゃっっちゃと終わらせてすぐに返ってくるから！..!」

とても愉快的な保護者だった。

「……クソ、ダルい」

益々熱が上がってきたような気がする。

あの後、両親が出勤したのを確認し、母が作り置きしてくれた粥を啜り、風邪薬を飲んで寢床に戻ってきた。

後は布団に潜って惰眠を貪り、回復に専念すればいいだけ。だけ、  
なのだが。

「……いいかげん、向き合わないとな……」

発熱で茹でつた脳みそで思考する。

ここ一年での状況の変化。

「少しずつ広がりを見せる、”本来あるべき姿”と”現実”との乖離。俺はダルい身体に鞭打って、部屋の隅に束ねて置いてある新聞を引っ張り出してそれぞれの一面を再確認していく。」

『F - 15、F - 16 制式採用の座を賭け、比較検証トライアルへ』

忘れもしない一年程前。

本来なら有り得るはずもない闖入者が出現し、既知の未来へと続く歴史を粉々に砕いた。

コイツはその時の記事だ。

この出来事から数カ月間は特に何事もなく過ぎ去っていった。

トライアルの結末までは。

『比較検証トライアル終結。制式採用はF - 16』

手に取った別の新聞の一面にはデカデカとそう書かれている。

そう……トライアルにて制式採用を勝ち取ったのはF - 16ファイ

ディングファルコンだったのだ。

本来ハイ・ロウミックスのハイを担うF-15に対し、ロウを担うF-16では性能面で劣るのは必然。

だが兵器において重要なのは単純な性能だけではない。

コストパフォーマンス。所謂、費用対効果。ぶっちゃけると金だ。

F-16はその観点から見るとF-15を圧倒していた。

そして代替対象であるF-4ファントムと比較した場合の性能差も十全に確保されている。

最新技術の塊は伊達ではなかった、ということだ。

紙面に載せられた情報を読み取る限り、そこらへんが明暗を分けた

……らしい。

何はともあれ、トライアルは正史に反してF-16の勝利で幕を閉じた。

「……って訳にはいかなかったんだよな……」

次の新聞を手取る。

日付は一週間前。

『国防省、F-15小規模導入』

コイツだ。

結局、国防省はどちらも採用するという暴挙に出やがったのだ。

「……一体、何が、どうなって、こうなったんだか……」

軍の上層は、此度の件についてどういった目論見があったのだろうか。

一連の行動の方針は、一体何だ。

「……………撃震　　第一世代機の第一線からの早急な排除……………か？」

撃震は悪い機体ではない。十数年に渡り、最前線で戦い続けた紛れも無い名機だ。

とは言ったものの、第二世代戦術機の台頭によって既に旧式。

設計思想から時代遅れとなっているのは明確な事実だ。

それに加え、耐久年数の問題も浮上してくる。

安価、信頼性が高いなどという長所に目を向けず、短所を上げてみると中々に問題が積もっている。

そんな機体に近代改修を加えつつ使い続けたとしても、やはり限度がある。

これに関しては正史にて開発された概念実証機「F-4JX」が全てを物語っているだろう。

X M 3 の搭載、O B L の実装、アビオニクスの刷新……………。

もはや撃震と呼称することすら違和感を覚えるほどの大改修を経て、それでも2,5世代機相当の性能しか発揮出来なかったのだ。

それがこの機体、撃震の限界。だが、第二世代であるF-15やF-16をベースにそういった近代改修を行えばどうか。

特にF-15は現存する戦術機でも群を抜いて拡張性に優れる機体。その上限は計り知れない。

こうやって考えてみると、撃震に見切りをつけた、というのはあながち外れてもいないか？

その結果として、F-15JとF-16Jは共に採用された。

……………駄目だな。今ひとつ、自分で納得しきれていない。

これを主軸とするなら、F-16Jだけで事足りる。

第一線にいる撃震はとんでもない数だ。

F-16Jより値が張るF-15Jの採用は軍費を圧迫し、撃震の代替機としてF-16を大量投入するためにはネックとなってしまう。

となると、やはりF-15JとF-16Jを共に採用した理由は



「 双方からベクトルの異なる最新技術を抽出・蓄積し、不知火へと注ぎ込む……か? 」

そいつを主軸に据えた上で、不知火の開発・配備までの繋ぎとして F - 15 J と F - 16 J を第一線に配備し、撃震を可能な限り後方に退かせる。

筋としては、こちらのほうが通っているか。

だが、それはそれで新しい将来的な問題が大量に出てくる。

財源、戦術機メーカーとの関係、それによる X F J 計画への影響。

これらによって生じるであろう今後の歴史改変……ダメだ、もうさっぱりだ。全く予測がつかない。

余りにも複雑に絡まりすぎている。俺には到底、想像すら出来ない。

「 ああ……頭が頭痛で痛い…… 」

日本語が明らかにおかしいが、気にする余力もない。

胡座を崩してフラフラと立ち上がり、布団にダイブ。

このまま瞼を閉じて睡魔に身を委ねたい。

そして目が覚めた時には全てが正史通りになっていればいいのに。

「 ……駄目だ、俺……頭を切り替える 」

それじゃ目が覚めた時に更に鬱になるだけじゃないか。

とりあえず T S F - T Y P E 9 4 不知火 のみに対する影響だけ考えるか。

ご都合主義的に考えてみると。

正史に置ける技術蓄積は第二世代機一機分だけだった。

だが、この世界ではそれがもう一機増えた。  
故に、二機分の技術蓄積のあるこの世界の不知火は、一機分の技術蓄積しかない正史の不知火よりも優れている。

……そんな単純計算もいいところの三段論法が通じる問題か？ 否、だ。

丸々一機分が増えたのだ。技術蓄積に掛かる労力も時間も増えるだろう。

そして蓄積した技術とて、全てを不知火に反映出来るかどうか不明瞭だ。

コンセプトがブレて正史より劣る機体になる可能性だって無いとはいい切れない。

いや、それ以前に。

元より『この世界』における不知火の開発期間、制式採用の凡その時期すら知り得ていないのが今の俺、だったな。

それが解っていないのに、今回のことをあれこれ考えるのは無茶もいいところか。

ただ確実なのは、『この世界』の不知火のロールアウトは正史より遅れるだろうということだけか。

『この世界』の不知火はあらゆる点に置いて未知数すぎるが、こいつは間違いないはずだ。

本来よりもあれこれを学び、選抜した技術を注ぎ込むというのだから、時間はそれ相応に掛かる。

だから必然的に、不知火の完成が正史より遅れてしまうのも……ちよつと待て。

不知火           ？

「あー……阿呆か俺は……本格的に熱で脳みそが馬鹿になってるみ

「たいだな……」

「そうだ、そうだったな。」

「当たり前のように名前を出したのは不味かった。完全に頭の隅に追いやっていた。」

「これも現実逃避の一種なのだろうか。」

「俺は『帝国の新型純国産機』の名前はまだはつきりと知らないのだ。そうなるであろう、という予想しか出来ていないのだ。」

「耀光計画自体は発動しているんだろうが、名前はまだだろう。つまり予定なのだ。」

「そして、予定は未定、か。……言い得て妙だな」

「予め定まっていたはずの歴史の流れは既に絶たれた。」

「今はその延長上。ならば、これから刻まれる歴史が未だ定まっていないのは道理だろう。」

「俺はそいつを、この一年間で嫌というほど思い知らされている。」

「ふう……で、最後の一枚が、昨日付けのコレか」

『F - 16 J 和名：彩雲 1988年末、配備開始』

『F - 15 J 和名：陽炎 1989年 配備開始予定』

「見出しには機体の和名と配備開始年数。」

「F - 15は正史通りに陽炎の名を賜り、89年に配備されるようだ。問題はイレギュラーである、F - 16 J。」

「T S F - T Y P E 8 8 彩雲、ね……」

日本帝国軍の戦術機呼称は気象現象に因んでつけられる。

正史の陽炎然り、不知火然り。F-15SEJの和名、月虹だってそうだ。

彩雲　古くより吉兆とされる気象現象の名称だったか。

何とも、質の悪い冗談である。

「……………凶兆の間違いだろ」

彩雲の登場により狂い始めた歴史の流れ。

この機体の存在は俺にとつて紛れも無い凶兆だった。

しかも、これら全てが俺の転生なんて馬鹿げた事象によるバタフライ効果かもしれないという。

まだ俺は何一つ行動しちやいないというのに、だ。

だとすると、カオス理論というのは……………トンでもなく厄介なモノだったということになる。

「甘かった、ってことか」

……………ああ、白状しよう。

俺はきつと、心のどこかで歴史の修正力とやらに期待していたのだろつ。

F-16とF-15のトライアル。まず間違いなく後者が勝ち、前者は採用されず、歴史は再び元のレールの上に戻るのだと。

正史との乖離なぞ一時的なモノで、所詮はすぐに修正されるだろうと。

しかし俺の願望虚しく状況は一変し、そして　。

「そしてまた……………正史から遠ざかった」

今、それだけは確かな事実。  
歪みは留まるどころか加速した。

この世界は既に本来とは異なるレールの上を走り始めている。

白銀 武が一度目だの二度目だのと言ってる状況にはない。そんな段階は過ぎ去った。

もはや今後何が起こきようともおかしくはない。この一年で起きたことは、つまりそういう事を意味する。

例えば1998年の大侵攻。

BETAは人類の調査のために停滞などせず、一気に日本全土が蹂躪されるかもしれない。

例えばAL4の要である00ユニットの開発経路の断絶。

鑑 純夏がBETAに普通に殺されてしまつかもされない。

それは向こうの白銀 武の来訪が頓挫することにも繋がる。

更に……俺が最も危惧し、また自己嫌悪に苛まれてしまう状況が、在る。

F-16J 彩雲、F-15J 陽炎。それに加え、この二機種から生み出されるであろう『新型純国産機』。

その三種の機体を組み込んだ帝国軍の戦力を持つてすれば、或いは。

「白銀 武と、鑑 純夏が 夏の大侵攻を生き延びてしまうかもしれない」

……なんという醜い性根。なんという浅ましい精神。俺は畜生にも劣る屑だ。

オルタネイティヴ4完遂のためとは言え俺は何の罪もない『この世界の白銀 武』に……死んで欲しいと思っている。

そして、同じく何の罪もない少女『鑑 純夏』に、BETAに壊さ

れて欲しいと……そう、思っている。

人類の未来の為にという、最もらしい大義を振りかざして  
これが屑じゃなくて何だというんだ。

「……クソつたれ……」

だが、そうしないと理論完成の為の数式が入らない。  
00ユニットの最有力候補である鑑 純夏も、当然いない。  
それはオルタネイティヴ4の頓挫とイコールで繋がる。

「だから、何としても譲れない」

白銀 武には無慈悲な死を。

鑑 純夏には絶望と希望を。

これは、絶対不可避の……人類存続の為の大前提である。

それでも、それを覆したくば。

「……オルタネイティヴ4以上に有用な代替案を確立しないと  
いけない……」

自分で言うておいて、思わず苦笑してしまう。

つまりそれは『不可能』だということだ。

そんな都合のいい機械仕掛けの神めいた切り札は存在しない。  
故に、俺は恐れる。この一年で起きてしまった状況の変化を。  
そしてそれが引き起こすであろう、オルタネイティヴ4への影響を。  
狂った流れの修正はもはや不可能であり、後は流れに身をまかせ  
ることしかできない。

何故なら、俺に切れるカードがなくなってしまったからだ。

己が持ち得るアドバンテージの大部分を占めていた未来情報。

それが消失とまではいかずとも、絶対の信頼が置けるモノとは既に呼べなくなっている。

残ったのは前世で培った経験と知識、そしてこの身体。

「……何とも心許ない」

未来を知っていれば何とかなるのではないか？

そうやって我知らず心の底で甘えていた自分に対する罰か。

悔しいが、効果覲面だ。今の俺の様態がそれを証明している。

腑抜けた心構えで日々を無為に費やし、未知を突き付けられて動揺して……拳句の果てに体調を崩した今に至るのだから。

病は気から、とはよく言ったものだ。

こんな様でBETAに抗おうとしていたのだから滑稽だ。

でも、収穫はあった。このままじゃ駄目だという事を、漸く身を持って痛感した。

強くならないといけない。鍛えなければならない。身体だけではなく、心も。

未知にブチ当たる度にこんな無様を晒しては先が思い遣られる。

「解ってはいるんだけど……」

だがそれでも、現実的な問題として俺の身体は未だ幼く、密度の高い鍛錬には時期尚早。

心も、今回と同じような状況に直面して場数を踏んでいくしかないだろう。

結局、時が経つのを待つしか無い……今は、そういう生殺しの状態なのだ。

「歯痒い……」

ゆつたりと流れる時間が、途轍もなく歯痒い。  
俺が生まれて五年。まだ、五年しか経っていない。  
歴史に変化が起き始めてから数えれば、たったの一年だけだ。  
だが、そんな短い期間で既にこれほどの異変が起きてしまった。

「……………BETAの日本上陸まで……………あと、十年」

今、自分の口から出た十年という単位すら、もはや完全に信用出来るものではなく、自覚出来ている。

それも踏まえた上で、これより先、一体この世界にどれだけの変化が訪れるのだろうか。

それすら読み切れずにいる。

もう俺は、変化の波に置き去りにされてしまっているのだ。

そんな自分に打てる手はあるのだろうか……………。

「いや、そもそも」

俺の行動関係なく変化を示しだしたこの世界に……………俺の力は必要なのだろうか。

状況の好転は十分に有り得るのでは……………？

今回の戦術機が状況の好転か悪転かはまだ解らないが、可能性としてはある。

このまま大団円のハッピーエンドに向かって突き進む可能性だってあるのではないか？

そこまで考えて、俺はまたしても自己嫌悪に陥る。

「……………あ……………」

思考が二転三転し、結局ネガティブに偏る。

何が可能性だ。そんなもの、何の宛にもならない。



ハッピーエンドに突き進む可能性があるなら、バッドエンドに

敗北一直線に突き進むことだってあるだろう。

基本的に性根から腐り気味な俺は、弱気だとしても他力本願を望んでしまつらしい。

「寝るか……寝て、とつとと風邪を治そう……」

そして健康な身体になってから、健全な精神の元でもう一度答えを出そう。

今の俺の身体は子供だ。本来なら、腐ってウジウジするには向かない年齢だ。

再来年には小学一年生……その年齢層のガキと言えば馬鹿をやって馬鹿笑いするものだろう。

俺もガキを見習ってそうやって馬鹿を……。

「……うわぁ、今メチャクチャ嫌なこと思い出したぞ……」

そうか……再来年から俺、小学生なのか。

今までと違って、色んな意味で忙しくなりそうだな。

目先に迫ってきた小学校入学という、また違う意味で俺の心の平穏を乱すだろう状況に思いを馳せながら、俺は眠りについた。

## 第四話 動き始める世界 (前書き)

この回から新たな要素が追加されます。  
キーワードの方に オリキャラ を追記しました。

## 第四話 動き始める世界

春。出会いと別れの季節と世間一般では云われている。

この時期、日本において個人を取り巻く環境ガラツと変わるこ  
とが多い。

故に、いつのまにかそう呼ばれるようになったらしい。

俺もまたそのご多分に洩れず、取り巻かれる環境が一変した。

遂にというか、漸くというか……小学生になった訳だ。

A・D・1990・spring・oneday

先日、入学式に保護者同伴で出席した。特に感慨深いものはなく、  
ただひたすらに眠いだけだったが。

俗に言う有り難いお言葉ラッシュである。前世にて何度かお世話  
になったが、この世界でもやはり存在した。

全く、いつの時代だろうが偉い人の有り難いお話というものには  
ピンからキリまであるものらしい。

聞かせるのではなく、つい聞き入ってしまうように話をするのが  
腕の……もとい、口の見せどころではないのかと。

校長先生、その他ゲストの方々。少しはラダビノット司令を見習

うべきです。

そんなこんなで睡眠導入剤のような入学式は幕を下ろした。

そして今日、クラス発表を終えてそれぞれのクラスに移動し、顔合わせと自己紹介に入っているのだが。

「ここ、一応……地球の日本……だよな？」

宛てがわれた教室、名前順の関係で中央列の最後尾の席に座った俺は小声で呟いた。

この場所からならほんの少しの動作と視線移動だけで教室全体を見渡せる。

俺は目の前に広がる光景に対して驚きを隠せずにした。

「……茶色なんて序の口、紫や藍なんてまだ真つ当。青、緑、赤って何だあれ……黄土色？ うへ、あれなんてもう桃色通り越してビットピンクの領域に両足突っ込んでるんじゃないか……？」

俺が口走っている色の名前は他でもない、そう。

彼ら新入生の髪の色である。

「……染めてるわけじゃないんだよな……あの色の毛が頭から生えてんのか……」

前々から外出した際に時折見かけたし、先日入学式でだってチラホラと視界に入ってきていた。

だがこうやって目の前にブラツと並んでいるのを見ると、やはり文字通りの異彩を放っている。

当然だが、一般的な黒髪の子もいる。

俺の両親も黒髪だし、俺の髪だって天使の輪完備の艶のある黒だ。しかし、どう見ても茶色がかっている子のほうが多い。黒が少数派ってどういうことだ。世も末だな。そして文句なく圧倒的に目を惹くのが、点在する極彩色。

「……彩度と明度が半端じゃないんですけど……」

常識の範疇を超えない赤毛や茶髪なんて可愛いものだ。

スカレット、スカイブルー、エメラルドグリーン……余りにも色鮮やかなその毛髪。

本来、人の身体から自然に生えてくる体毛の色としてはあり得ない、のだが。

「前世の経験が邪魔するけど、”当たり前の色”だって解るんだよなあ……」

……いや、語弊があったか。

解るといふよりは、まず当たり前だという”感覚”があり、それに対して”理性”が否と訴えかけてくる感じ。

結局、俺が異質な存在だということなのだろう。

今では結構慣れてきているというのもあるが、昔はかなり違和感が酷かった。

それにしても、いくら見渡しても奇抜な色は見当たるのに金髪や銀髪を確認出来ないのはどういうことだろうか。

TVで外国の報道とか見た時は普通にいたんだが。

「一応、人種の線引きはされてる……ってことか？」

金髪と銀髪は日本人には自然発生しないと思っていいかもしれない。

基本である黒に、金と銀以外の多種多様な色が追加されたと言ったところだろうか。

とりあえず髪の色については現実を受け入れて、ここらへんで納得しよう。

そもそも別に難しく考える必要もない。

ただ色のバリエーションが増えて、個性を発揮する場所が増えただけだ。

そんな程度の問題でしかない。

今はそれより……目前に迫った自己紹介か。

「じゃあ、次の後ろの子！お名前は？」

「ふじき げんのすけです！」

クラス担任らしい妙齡の女教師にたずねられ、目の前の席に着く少年が勢い良く立ち上がって元気に答えた。

……いやあ、しかし俺が言うのもアレだが、凄い名前だな。この駿河城御前試合だ。

何はともあれ目の前のヤツに順番が回ってきてしまった。

当然、次は俺な訳だが……さて。

「すきなものはちゃんばらです！」

うわあい、前の席の子、将来とんでもない怪物になりそうだNE。

「ハイ、ありがとう！もう座っていいですよ。それじゃ次、その後ろの子！お名前聞かせて貰えますか？」

「はい」

俺は教師に指名され、静かに立ち上がる。視線が集中する。……凄いい見られてるな。

周りの子供達が無垢な瞳で、穴が空きそうなほど俺を凝視している。

……ここが戦場で、子供達が光線級なら俺は蒸発してるだろうな。既に起立している俺はそんな馬鹿なことを脳裏で考えながら自己紹介を始める。

ま、無難に行っておくか。

「不破 衛士です。苦手な教科は特にありません。趣味は読書と運動です。これから一年、ご指導宜しくお願いします先生」

「え？……あ、ハイ、こちらこそ……」

立て板に水の如く喋り一礼すると、先生は呆けた顔で俺を見ながら返答した。

まあ小学一年からスラスラと淀みもなく、今の口上が飛びでてきたのだから仕方もないが。

俺は着席して目を瞑りこれ以上喋ることはないと言回しにアピールする。

「あー……それじゃ次の列、一番前の君！お名前は？」

意図を組んでくれたのかそのまま続行。順応が早くて助かる。

ムスツとした顔で「まだ何か？」とか生意気言う状況には成らずに済んだようだ。

待機時間が出来た俺は後に続く連中の元気澆刺とした自己紹介をBGMに、今この瞬間より六年間に及ぶ小学校生活について思案を巡らせた。

放課後、俺は何故かこんなところに居た。

「それじゃ不破君、その願書受け取って下さい」

そして、訳も分からず、担任にいきなりそんなことを言い付けられている。

「い、いや、ちょっと待て。いえ、待つて下さいお願いします」

失敗した。驚きのあまりタメ口で突っ込んでしまった。  
てか、受け取って下さいって何だ。

そもそも何時の間に職員室に連れてこられた。  
新入生は午前で学校終わるんじゃないのかよ。  
駄目だ、今この状況に至るまでの過程が綺麗さっぱり消し飛んでる。

スタンド攻撃でも食らったのか？

「もー、今説明したでしょう？聞いてなかったんですか？」

ハイ、スミマセン。聞いてませんでした。

「検定の願書ですよ」



「……け、検定ですか？」

視線を担任の女教師から机上の願書に移す。

普通、こんなもん入学初日の小一にやらせるか？

「……で、何の検定のヤツなんです？ これ」

思い浮かぶのは漢検とか英検とかそれぐらいしかないんだが。

「高認です」

「ぱーどうん？」

ナニ、イッテンノ、コイツ。

「ですから、高認ですよ。正式名称『高等学校卒業程度認定試験

』」

「はあああああああああ！？」

さっぱり意味が解らない。

高認って、確か大検から名称が変わったアレのことであってるよな……？

こっちの世界じゃこんなに改正が早いのかよ！？ 生前じゃ21世紀入ってからだったと思うんだが！？

てかちょっと待て、何でそれを俺に勧めてくるんだよ！？

俺はまだ満六歳だぞ！

受験条件満たしてねえから！そんなもん小学校一年生に勧めるんじゃないよ！

何考えてんだこの先生……。

と、とりあえず。

「あ、あのですね先生。俺の年齢じゃこんな資格受けられないでしょ？ 六歳ですよ？」

「……？いえ、受けられますけど」

「いやいや……空覚えですけど確か大検、じゃなかった、高認って十六歳からじゃないと受けられないでしょう。中学校も卒業していない六歳のガキじゃどう考えたって無理ですよ」

「フフ、自己紹介の時に驚かされましたけど……語彙も知識量も小学一年生とは思えないですね。ええ、そうですよ。大検の時では無理でしたね」

……大検の時では？

言い回しに違和感を覚える。

妙に引っ掛かる言い方をしてくれるじゃないか。

「一昨年のことです。教育基本法の全面改正があったのですがご存知ですか？」

頷く。

1988年の教育基本法、全面改正。

既に確認できている。

「先生の仰る教育基本法の全面改正とやらが、義務教育科目の切り捨てや大学の学部統廃合のことを指しているなら」

「……本当にお利口ですね。でもそれだけではなく、他にも連動して改正されていた法や資格も存在するんですよ」

……参った。

そんなところまで変わってしまったのか。

広く浅く情報収集していたのが災いした。

つまり……俺の調べが足りなかっただけで

「今から俺が受けさせられようとしてる『高認』も、その内の一つだったって訳ですか」

「ええ、そうです。名称が『大検』から『高認』へと変更された際、内容も同じく全面改正されています」

絶句する。

それは、俺のようなガキでも……小学校一年生でも高認が受けられるような、途轍もなくブツ飛んだ改正が行われたということか。

極めてナンセンスだ。

もはやそれは改正ではなく、改悪だ。断言してもいい。

……だが、俺にとっては紛れもない改良だ。

そんな案件を通しやがった大馬鹿野郎に、最大限の敬意を込めて感謝の言葉を贈ってやりたい。

この状況は間違いなく利用出来る。

そう、これは 千載一遇の好機だ。

「先生。お手数掛けますが改正内容の説明をしていただいて

も宜しいですか」

「あら、興味が湧きました？それでは、喜んで説明させていただきますね」

数分に及ぶ説明を無言で聞き入っていた俺は、説明が終わると同時に口を開き始める。

「その……何とも……入り口の広い資格ですね」

要約すると、試験は年に二回で8月と11月、年齢条件は数え年七回目から。

そして 義務教育終了後、即大学入試を受けることが出来るという、破格の価値を持つ資格。

……つまりは事実上の飛び級の許容に等しい。

五分ほど改正前と改正後の説明を受けたが、大雑把にまとめるとそういうことになる。

「しかしまあ……よくそんな改正内容が通りましたね。下限が六歳からって……正気の沙汰じゃないでしょう？」

「そうですね……実際、去年は六歳で受けた人、0人でしたし。それどころか12歳以下で受けた人が全国から両手で数えるぐらい

「しかいませんでしたし」

元よりそこそこ難関なんで勿論その子達も全員落ちましたけど、と先生は付け加えた。

……おい、全然駄目じゃないか。

「……で、そんな難関資格に挑戦する役として、俺に白羽の矢が立つたのは何故ですかね？」

「自己紹介でビビッ！と来たから……では納得出来ませんか？」

今一、説得力に欠ける。

アレぐらいの台詞、子供に目立たせようと画策した両親が吹き込めば成立してもおかしくない。

「アハハ、納得してないって顔ですねー」

「ええ、まあ……」

「フフ、理由はもっと単純ですよ。不破君ってここらへんだと凄く有名な天才少年なんですよ？」

は？ 有名？

天才少年！？

ハハ、ないない。

「初耳ですよ。そんなことはないでしょう」

「またまた、謙遜しないでいいんですよ？」

謙遜とかではなく、純粹に理解できないんですけど。

おかしいな、別に周りにアピールなんてしてなかったんだが。

……知らず知らずに何かやらかしたか？

「え……本当に自覚なかったんですか」

先生が呆れたように言った。

「青年や大人に混じって参考書やら読みふけってる幼児が、町の公共図書館や近辺の本屋さんで頻繁に目撃されてるんですよ。目立たない訳ないじゃないですか」

あー、あー……。

そういえば、暇さえあれば居座ってたな。

自由な時間は身体動かすか勉強するかの二択しかしてこなかったし。

おまけに小遣いなんて貰ってないから、必然的にそういうところで立ち読みだの閲覧だのするしかなかったんだが。

そうか、妙にチクチクすると思ったら注目されて視線が刺さってたのか。通りで居辛かった訳だ。

たまに声とかも掛けられたっけか。こんなに難しい本読んで偉いね、なんて誉められてたが完全に社交辞令だと思ってた。

……確かに噂が流れて有名になってしまってもおかしくはないか……？

「まあそういう訳で、君は入学前から教師達にとって注目的だったんですよ。私を受け持つことになるとは思いませんでしたけどね」

「……それで、自己紹介の時に、ビビッ！と来たってところですか」

「ええ、ビビッ！と来たんですよ。この子ならもしかしたら受かるんじゃないかなーって」

この人、行動力あるな。

それで俺を職員室まで引っ張ってきてわざわざ願書手渡ししてくれたのか。

……そう言えば。

「あの……先生、願書も既にあるなんて用意周到すぎませんか」

「あー、それはですねー……」

先生が言うには、何でも文部省の方から各学校に「可能な限り六歳の新入生の受験者引っ張ってこい」とのお達しを受けたとのこと。そこから更に周りの教師からお役目を押し付けられたらしい。

おまけに給料の査定に響くのだとか。これは酷い。

……普通は無理だろ。幾ら条件緩和したからって、六才児に高認なんざ受けさせるかよ。

俺は規格外だけどさ。

「それで、不破君……願書のほうなんだけど、受け取ってもらえるかな？」

哀願するように訪ねてくる先生。

ちょっと腰が低すぎるような気もするが、それも愛嬌か。

「先生、おめでとついでいます」

「え？」

「どうやら給料の査定は大丈夫みたいですよ。俺みたいな変り種のがキがいてよかったですね」

「……そ、それじゃ、受けてもらえる!? 本つつっ当にありがとう!」

何か今にも小躍りしだしそんなほどテンション上がってるな。ま、こちららも気分は高揚してるが。

「いえ。むしろ、俺が感謝したいぐらいです。先生に高認のこと教えてもらえなかったら……前に進むのが遅れるところだったんで」

これで、大きいか小さいかはともかく、前には進めたような気がする。

高認が施行されてから今に至るまで、未だ下限の六歳でこの資格に通った者はいない。

……つまり仮に今回で通れば、全国で始めて六歳で通過した天才児としてある程度注目されるのは間違いない。

これを足掛かりにすれば……逸早く、何かを成すことが出来る人間になれるかもしれない。

「それじゃ先生。俺は早速試験の対策したいんで、帰らせてもらいます」

「はい、気をつけて帰ってねー!」

先生はそう言うつと、校長室に向かって、校長おおお!噂の子が高認受けてくれましたー!と叫びながら全力疾走していった。

……本当に元気な人だな。



「負けてられないな、俺も」

俺は渡された受験案内を鞆に放り込み、職員室を退出した。

「あ、母さん、父さん。俺、高認受けるから」

夕食時。俺は早速両親に報告してみる。

「……コウニン？」

「エイジ、何だいそれは」

ま、普通は知らないよなあ。

あまり世間に露出してないみたいだし。

「大検って聞いた事ない？」

「ああ、それならあるよ。僕の友人も受験していたな、そう言えば」

「……でも、大検と何か関係あるの？ その……「ウニン」？っていうのは」

「うん。何でも一昨年の教育基本法が改正されたときに、連動して改正されたらしくて」

二人に大雑把に説明する。

名称が大検から高認に変わった事。

年に二回施工されるようになったこと。

受ければ義務教育終了後、すぐに大学入試を受験出来る権利を与えられること。

大検の時より受験条件が大幅に緩和されて、年度末までに満七歳になる者から受けられるようになったこと。

改正されてから二年、未だ六歳での合格者が出ていないこと。

そして、俺がそれに挑戦してみたいということ。

二人ともポカンとした表情で固まっている。

やはり、いきなりこんなこと言われても困るか。

「な、なんというか……小学校入学初日から凄いことになってるな」

「パパ……私、愛息子が眩し過ぎて直視出来ないわ……」

「ハッ!? ママーッ! しっかりするんだ!」

いやあ、本当に見ていて楽しいな俺の父と母は。

「でさ、そういうことだから、その……悪いけど、受験料とか払ってもらいたいんだ。あと、出来れば何冊か過去問題集も……?」

真剣な目で俺を凝視してくる両親。

何だ。そんな金、家にはねーよ！とかそういうオチか。

流石にそこまで貧乏ではないと思ってるんだが。

「ねえ、ママ。エイジが僕達に何かをおねだりするなんて、初めてだよな？」

「ええ、パパ。こんなこと今まで一度もなかったわ……それだけ真剣なのね」

俺は二人の目を見返し、静かに頷く。

ああ、真剣だ。真剣だとも。

俺はここに来て漸く、何かに挑むということが出来るのだから。

この六年……俺は何もしていないんだ。

確かに勉強や運動は暇さえあればした。

だが、積み重ねたそれを試す機会は一度足りともなかった。

それどころか、そういつたことはまだまだ先になるだろうと思っ  
ていたんだ。

でもそこに転がり込んできたのが今回の高認だ。

おまけにここで受かってしまえば漏れ無く国公認の天才児だ。

この好機は、絶対に逃せない。

「エイジ、お前の気持ちは解った。お金の事なら全然心配いら  
ないさ。むしろ家はお前が全く我俚言わないから他所と比べてもお金  
が余ってるぐらいだよ」

「そうねえ、他所様を見るとこんなご時世なのに、お子さんがア  
レが欲しいコレも欲しいと大変そうだわ……」

「あはは、俺はあまりそういうの興味なかったからね」

……違つよ母さん。大変じゃないんだ。

まだ、大変なんかじゃないんだよ。

大人が子供の我俣を許せる程度には、まだ日本は平和なんだ。

歴史に狂いが出るかもしれないけど……後八年前後でBETAが来るんだ。

そうなつたらもう子供の我俣を聞いてやる余裕なんて大人たちにはない。

「ありがとう。俺さ、絶対受かるから。父さんも母さんも、応援してくれると嬉しい」

だから、備えなくちゃいけない。

平和が欲しいなら……迫り来る戦に備えて、打ち勝つて、掴み取らないといけない。

今回の高認の受験は、備えの第一歩に過ぎないんだ。

だから俺は、こんなところで躓いてられない。

明日からは運動量も抑えて、試験対策に時間を割り振ろう。

小学校でも授業中の行動にある程度自由を貰えるように交渉してみてもいいかもしれない。

あの先生なら当たり前のように承諾してくれそうな気がする。

とにかく全部の労力を勉強に注ぎ込んで

「エイジ。お前が初めて自分の意思で挑戦することだ。頑張れよ」

「エイジ、私も応援するから。でも頑張れとは言わないわ。今までだって、お勉強は頑張ってたもんねー？」

「……ママ、僕もう頑張れって言っちゃったよ……今からでも取り消していいかなあ……」

「と、父さん、別に気にしてないから。うん、頑張るよ。無理しない程度に」

前言撤回。頑張りすぎる必要もなさそうだ。

ああ、今まで通り……適度に頑張ろう。

親に無用な心配をさせるのは、子供としても気分がいいものじゃないよな。

大分、気が楽になった。

さて。じゃあ明日からまた

いつも通りに頑張っていくか。

広めの和室の中、『青』を纏う幼い少年が膝を立てて座り込んでいる。

少年は真剣な眼差しで一枚の書類を見つめていた。

「失礼します」

突如、静謐な空間に凜とした声が響く。

「……月詠か。入れ」

少年は声の主を招く。

障子を開けて入ってきたのは月詠と呼ばれた『紅』を纏う少女。

月詠は少年の前まで音もなく歩き、姿勢良く畳に正座した。

「悪いな、わざわざ呼び出して」

「いえ、丁度剣の稽古も終わって身支度も終えたところでしたので、お気遣いなく」

少年はそいつはいいタイミングだった、と言つと手にしていた書類を月詠に差し出す。

「……これは？」

「鎧衣さんから。例の試験の報告書だ」

月詠は素直に書類を受け取り、文面に目を通したところで眉を顰めた。

「……二十に届くかどうか、というところですか。貴方の想定よりは多かったですね」

「何、嬉しい誤算って奴さ。折角用意した餌なんだ。より多く食いついてくれたほうが嬉しいってモノだろ」

少年は心底嬉しそうに破顔した。

そんな少年に呆れたのか月詠は溜息を付き、未だ眉を顰めたままでいる。

「ま、住所も割れてるし、追々近場から接触してみようや。つっても、俺らも諸つ中暇って訳じゃないんで総当たりには時間は掛かるだろうがな」

「それが妥当でしょう。その為にわざわざ餌まで用意して釣りをしたんですから」

月詠はそう言って再び書類に目を落とす。  
暫くの間、静寂が訪れた。

「この少年」

声を尖らせる。

その双眸は驚愕の色に満ちていた。

険しい表情で書類を見つめる月詠にさも愉快そうに声が掛けられる。

「ああ、そいつな。随分とまあ面白い名前だとは思わないか？」

「い、いえ、それには同意しますが名前に驚いたわけではありません。この点数は」

「解ってるっつーに、全科目満点通過だって言いたいだろ。今回の試験じゃ10万人中、そいつ唯一人だけだな」

「そうです。此度の試験、調査の篩に掛けるために総じてかなりの難問になってるとお聞きしました。それを全科目満点通過というのは……」

「そうだな。それこそ朝から晩まで勉強漬けで、徹底的に詰め込んできた秀才か。或いは」

少年は一拍置き、声を弾ませて言い切る。

「恐ろしく勘が鋭くて、寄り良い選択肢を選ぶことが出来たのか」

「ッ！」

息を飲む。



つまり 大物が釣れたということだ。

「今すぐにこの少年と接触を。早いに越したことはないでしょう」

「まあ待てって。まずは近場からだ。第一そいつがいるの熊本県だぞ？ 遠すぎだって。それに メインディッシュは最後まで取つといたほうがいいだろ？」

飄々とした少年に痺れが切れたのか、月詠が声を荒らげる。

「貴方は直ぐにそうやって ツ！」

「冗談だ。そんなカツかすんな。……月詠、BETAの東進がもう始まつてる。来年には大陸派兵だ」

少年は少女を宥めると、縁側の障子を開けて外の空気を取り入れる。

9月の風はまだ少し湿っていた。

「で、九 六作戦と光州作戦の仕込みのこともある ぶっちゃけ手が廻らないんだ。あんまり遠出は出来ないんだよ」

少年は少女のほうを振り返り、解ってくれるか？と付け足した。

「すみません。取り乱しました」

「んにゃ、気にしてないさ。……さーってと、そろそろ時間だ。とつとと行くか。悠陽と彩峰のおっさん待たせると後が怖いんだよ」

「フフ……ええ、諒解です。時間には厳格な方達だ。遅れて拳骨を

食らうのは御免です」

二人は揃って和室を退出し、書斎のほうへと脚を向ける。

「……それに、さ」

「はい？」

「心配なんざしなくても、どうせ逢うことになる。破れずの衛士なんてメアリー・スーも裸足で逃げ出しそうな巫山戯た名前が付いてんだ……何をやっても巡り逢うだろ」

「ええ、そうですね。本当に、巫山戯た名前だ。願わくば、名前負けしないで欲しいものですね」

「ハハツ、コイツは手厳しいヤツに目を付けられたな。可哀想に、ご愁傷様だな不破 衛士」

書斎までの道程は、終始穏やかな空気に包まれていた。



第五話 それぞれの誕生日 前編（前書き）

今回から更に要素がプラスされます。  
キーワードに TS を追加しました。

第五話　それぞれの誕生日　前編

12月も半ば。

窓の外は未だ暗い。

流石の太陽も、師走の朝は苦手のようにだ。

俺、不破　衛士は早朝特有の寒気に耐えようと温もりを求め、布団にくるまっていた。

「……………はあ……………」

気怠げに壁に掛けられた額縁に収められている一枚の紙に視線をやる。

高認の合格通知書。

正直、未だに実感が湧かない。

試験結果の詳細がそれに拍車を掛けている。

今回の受験者で、唯一、俺一人が解答率100%だということらしい。

何かの間違いでは？　と思った。

確かに手応えはあった。だが、思った以上に凝った内容で、幾つかの問題は理解の範疇を超えていた。

……………が、どうやらマークシート方式に救われたようで、適当に直感任せに塗りつぶした部分も全て正解していたという、稀な現象が起きたらしい。

何はともあれ、俺は運を味方につけてこの難関をまさかのトップで通過した訳だ。

しかし　俺は未だに足踏していた。

「こんなんじゃないや駄目なのは解ってるんだけど……これが燃え尽き症候群ってやつか?……違うか……」

あの夏の日、確かに俺は一つ目の山を超えた。

だが、その時の安堵感、達成感、虚脱感が入り交じってしまい、二の足を踏んだのだ。

それが今も尾を引いてしまっている。

「これを切っ掛けに、自分の有用性を周りにアピールしていかないと、いけないんだけどな……」

合格通知書の授与から三ヶ月。

その間、俺は一切の能動的行動を起こすことなく過ごした。

そして今日、遂に七年目の誕生日を迎える。

……捻じ曲った世界を整え直す糸口すら見つけられぬまま。

俺は、猶予期間の折り返し地点を迎えてしまった。

「よお、悠陽。おはよう。そして誕生日おめでとう」

「……そなたは、なにをしているのですか」

悠陽と呼ばれた少女は、寝床で横になつて己を見下ろす青を纏う少年に、懽然とした態度で問いただした。

ここは少女の個室。煌武院の屋敷の一室だ。

何故、光も差し込まないこんな早朝に、ここに存在しているのかと。それは当然の疑問だった。

「……いったいどうやって」

「どうやっても何も、普通に」

少年は有り得ないことを、いとも簡単に答える。  
他に方法なんてないだろう、と。

「……またですか？ いつもいつも、そんな無茶ばかり。見つかつて出入りきんしになつても知りませんよ」

悠陽は呆れたように溜息を吐いた。

この少年は何時もうさうなのだ。

嚴重なはずの警備を掻い潜り、音も建てずに部屋に侵入し、何時の間にか悠陽の隣で立っている。

「……お説教ならまた今度、な。時間が押してる……で、お届け物はどこだ？」

「あ、はい。コチラをおねがいしたいのです」

悠陽は寢床から起き上がり、自分の机の上に丁寧に裝飾された手紙と  
これまた丁寧に包装された見事な花を少年に手渡した。

「悠陽さん。まさか、この花束持って屋敷から警備掻い潜って脱出しろなんて  
」

「おねがいしますね？」

有無を言わさぬ威圧感を、少年は感じた。

流石、未来の征夷大將軍だ、と内心で感嘆する。

「……アイアイマム。承った。精々、急いで届けるとしましょうかね」

苦笑しながらそう言つと、音もなく襖を開けて寢室から退出しようとする少年。

悠陽は呼び止めるように、その背中に声を掛けた。

「妹に……冥夜に、よろしく伝えてください。お誕生日おめでとう、と」

「承知した。ああ、そうそう。どうせついでだ、花の名前と花言葉も教えておいてやろうか？ん？」

少年が振り返りからかうように言つと、悠陽は羞恥の赤で顔を染める。

「~~~~~ッ！　そ、そなた、男児だといふのになぜそんな知識までっ」



「ハツハツハツ、それじゃ」

再び退出しようとして背を向けた少年の袖を、悠陽が掴んだ。青を纏う少年は、二度引き止められたことで訝しげに自分を引き止めた少女に視線だけを向ける。

「もう、そなたがからかうから言いそびれてしまつところでした」

「ん？まだ何か……」

「齊御司 <sup>アキラ</sup> 暁様。そなたに感謝を。そして お誕生日、おめでとつございます」

「……ありがとう。おかげで今日は善い一日になりそうだ。いや、しっかしまあ、牡丹とはな……」

直球すぎるだろ、と暁が笑う。

「そ、その話をまだ引つ張りますか……さあ、そろそろ去りなさい。真耶さんはしんしゅつきぼつですよ」

花の話を蒸し返された悠陽は顔を赤らめながら、月詠 真耶を引き合いに出して暁を追い出そうと試みる。

暁は彼女がまだ来ないことを知っていたが、時間が押しているのは事実なので話に乗じて撤退を決める。

「あいよ、仰せのとおりに じゃあ、またな」

そう言い残し、身に纏った青を翻しながら、暁は今度こそ部屋から

去った。

部屋に一人残り佇む少女は、不思議な少年のことを思う。自分と同じ日に生まれた、斉御司家の跡取りとなる嫡男。

以後、教育係である彩峰 萩閣の元で共に学び……天才と称される能力を見せつける。

その影響は悠陽にも現れ、少年に引つ張られるように、急激にその自我と知識を育てていくことになった。

だが、天才児というのは得てして破天荒なものなのか。

暁は禁忌や掟に触れたがった。

そしてどこで知ったのか、生き別れの妹のことを調べ上げ、その橋渡しをしてやる、等と宣ったのが昨年のこと。

他所の家の、ましてや将軍家……煌武院家の内情に触れたがるなどはっきり言って正気の沙汰ではない。

だというのに、自分と、忌児として引き離された妹との橋渡しを、一切の見返りなしに承ってくれる少年。

……噂では、既に政治的な発言力すら持っていると言われるほどの才を持つ少年が、何故そんなことをするのか。

悠陽の疑問は尽きない。

だが 感謝はしているのだ。

誰も、妹について触れることはなかった。

妹なんていなかったように、誰しもが振舞う。

月詠 真那や月詠 真那は例外だが、それでも暁のように橋渡しをするなどと馬鹿げたことは決してしなかった。

身分、位の高さ故の危険もあるだろう。だというのに、事実として少年は壁を乗り越えて、隔たれた二人を繋いだ。

その無償の挺身は、悠陽が彼に気心を許すのに十分な理由だった。

「そなたに、感謝を」

帝国の未来を担う少女は、明るみ始めた空を見上げながら、型破りな少年の息災を願う。

「来ましたか」

赤を纏った少女……月詠は暁と合流するため指定されたポイントで待機していた。

大きめの花束を携えてこちらに駆け寄ってくる暁を釣り上がった目で一瞥し、呟いた。

「待たせ　　ふむ。何故そんなに疲労困憊なのだ」

「いえ、お構いなく。どうぞお構いなく」

月詠は怒りを隠すこと無く、口だけでそう言う。

彼女は誰が見ても解るほど疲労困憊で、足が震えている。

「……迂闊でした。まさか真耶姉様の足止めのためとは言え、早朝稽古だと称した地獄を見る羽目になるとは」

「どうだった？ お誕生日プレゼントは」

暁はいかにも面白可笑しそうに、プレゼント、と言い切った。月詠は笑顔だが、口元がヒクヒクと痙攣しっぱなしである。

「どうもごうもない。死に際を思い出してしまいました。しかも聞けば私が自ら希望したような言い回しでしたよ、真耶姉様は」  
「事前にそう伝えてあったからな」

「ええ……ええ、そうでしょうとも。屋敷に侵入しても真耶姉様から逃げ切れると自信満々に言い切ったのは、この根回しがあつたらなのですね」

然り然り、と腹を抱えて爆笑する暁に、堪忍袋の尾が薄皮一枚で繋がっている状態となった月詠が脇差の柄に手を伸ばす。

「そういえば、暁様。腹筋早く割れねーかなーと仰っていましたがね。この場で、私が、今すぐに……割って差し上げましょうか……？」

「あー、悪かった。この通りだ、許せ。それにそいつは腹筋が割れるんじゃないくて切腹だろう。死にとうない、死にとうない」

……この光景を、斯衛縁の者が見れば絶句するであろう。  
刀に手を伸ばし、警護すべき対象を威嚇する赤を纏った少女。  
その少女に頭を垂れながら、軽口を叩く青を纏った少年。

尋常ではない。常人には計り知れない関係。

「はあ……もういいです。それでは参りましょうか。一文字少佐を

待たせております故……」

「ああ、そうしよう。さっさと乗り込もうか……あの、60mリムジンにな」

二人は視線の先にある車両へと歩き出す。

ここ帝都から東京までを、この無駄に長いリムジンで走り抜けるのだ。

「いやはや。まさか、こちらの世界にもあるとは思ってなかったよ俺は」

「私もです。エクストラではお馴染みでしたが……やはりこちらで見ると違和感が凄まじいですね……曲がれるのでしょうか？」

不安そうに呟きながら、車の先頭……運転席へと向かう二人。

「すまないな、一文字少佐。厄介な役を頼んで」

「とんでもございません、暁様。こちらこそ、久しぶりにコイツを転がすための理由を頂き、誠に有難うございます」

暁が申し訳なさそうに言うと、一文字と呼ばれた男は爽やかに謝礼を返した。

休暇中に呼び出される形になったのだが、どうやら一文字も乗り気だったようだ。

「そう言ってくれると助かる。そなたに感謝を。……ああ、そういえば、今度中佐に昇進するらしいな。配属先は駆逐艦、夕凧の艦長だと聞いている」

「有り難き幸せ。この一字鷹嘴。その名に恥じぬよう、ソラを舞ってみせましょう」

「期待している。……さて、本題に戻るが、行き先は聞いているか？」

「ハツ。東京、御剣家の屋敷と伺っております」

「宜しい。では、優雅に且つ速やかに到達し給え。それと、俺と月詠は二部屋目を借りる。用があればこちらから通信しよう。それでは、よいドライブを」

「了解しました！」

暁は月詠を連れ立ち、宣言したとおりに60ミリムの別け隔たれた二部屋目のドアを開け乗り込んだ。それを確認し、一字鷹嘴をゆっくりと車を出す。

「あの方が風の噂に聞く、斉御司家の嫡男……」

曰く、神童。曰く、麒麟児。曰く……似たような天才を表す言葉。鷹嘴は相対したことによって、それらがただの妄言でないことを認識する。

立ち振る舞いが、子供が大人を真似てやるソレではない。

「いや、考えても詮ないことだったか。今はただ目的の場所へと送り届けるのみ。この車両は、ただその為に」

鷹嘴は思考を中断してそう呟き、アクセルを踏み込んだ。

そして　　車が……60mリムジンが、一つ目の角をさも当然の  
ように、曲がっていった。

「……なあ、今普通に曲がったよな」

「……ええ、普通に曲がりましたね」

リムジンの中で寛いでいる二人の表情は正に理解できない、といっ  
た様子だった。

暁が、こういうことなの……と、真剣な表情で悩んでいる。

当たり前のように曲がったのだ。60mのリムジンが、だ。有り得  
ない現象である。

「……ふむ。つまり、こういうことじゃないか？　リムジンが曲が  
ったという結果を創りあげてから、ハンドル切って曲がっていると  
か」

「暁様。他社ネタはやめてください。因果の逆転じゃないですかそ  
れ。どこの刺　穿　死棘　槍ですか」

「……じゃあ、トト　に出てきた猫　スミたいに周りの物質が避け  
て　　」

「曉様。大手ばかりはどうか自重して頂きたい。ジリは時空を超えて検閲削除してきますよ」

……沈黙が室内に広がる。

「会話が緩いな。ついでに頭も」

「ええ、緩々ですね。そういう状況ではないのですが……」

空気が、緩んでいる。

このような隔絶された世界で二人つきりという状況は、久方ぶりだったからか。

ピンと張った糸が、解されていく感覚を二人は覚えてしまった。

「最近はずり詰めっぱなしだったしな……たまにはいいんじゃないか」

「たまには……確かに久しぶりですね、こういふ……その、はっちゃけた会話は」

「生まれて初めて会って、一晩中語り明かしたとき以来だったか」

二人は通り過ぎた七年間に想いを馳せる。

死と再生。

異世界との遭遇。

互いの存在の認識。

そして、世界改変のための活動。



「月詠。お前がいてよかった。あの邂逅がなければ、俺は状況を正しく理解できなかっただろう」

「同感です、暁様。貴方がいてよかった。おかげで、私という存在が唯一無二でないことを知った」

転生。

二人は当初、自分達が特別な、唯一無二の存在だと自認していた。この世界に影響を与えることが出来るのは、自分のみだと。

しかし必然か偶然か、二人は極めて近い場所に生まれ落ち、巡り逢う。

そして、二人は多くを語り合い……一つの突飛な発想に至る。

「……なんてことはない、俺もお前も、特別ではあったようだが唯一無二ではなかった……俺達みたいなのは他にも存在したわけだ」

「この狭い国内、しかも確認出来た者だけで18人……日本に分布が集中している訳ではない場合、全世界で100人を余裕で越すでしょう」

古人曰く、一匹見かけたら百匹いると思え、とのことですし。と月詠が付け加える。

「ハッ、まるでゴキブリだな。仮に海外にも俺達みたいなのがいたとすると……ユーラシアの方に生まれたのは大変だろう。何せ、あそこは地獄だ」

「……既に脱落者があるやもしれません。状況を把握できぬまま、BETAに貪り食われた者がいないとは言いきれませんが。実在したなら、ご愁傷様です」

「全くだ……さて、それじゃ運良く安全な後方国に生まれ、何れは決戦の舞台に立たされる俺達は好き勝手やらせていただきますか」

暁がそう言つと、月詠は携えていた小さめのアタツシユケースを開き、18枚の書類を暁に突き出す。

「これを。あの釣り餌……高認の試験に掛かるだけの運と行動力を示してきた者達の詳細です」

暁は無言でそれを受け取り、それぞれに目を通す。

その表情は真剣そのものだった。数分後、吟味するように書類を見つめていた顔をあげた。

「……生まれた場所が見事にバラけているな。これじゃ彼らには、俺とお前のような他の転生者との巡り逢いはこない、か」

「原典の知識を所持しているという仮定になりますが……彼等は変わり始めた歴史に対して、真実に到達する糸口を見つけられない……精々がIfの世界だと思ひ至る程度でしょうか」

「クツ……それこそまさか、だろ？ まさか自分と同じようなのが他にいて、しかもこんなにも早く歴史に干渉してくるなんて思ひわけがない」

心底愉快そうに破顔した暁に、月詠が嗜めるように口を開く。

「暁様、間違っています。そもそも彼等は自分達のスタート地点が同じだという情報すら持ち得ていない。故に、他者の行動が早い、遅いという発想がまず有り得ないのです」

「ああ……そうだったな、いかんいかん。情報量という点に置いても、俺達のアドバンテージは大きい訳、か」

暁は再度、18枚の書類に目を通す。

18人の個人情報バラバラだ。

苗字も、名前も、家柄も、生まれた場所も、家族構成も、非常にバリエーションに富んでいる。

しかし何度見返しても、気味が悪くなるほどの一致を見せる項目があった。

「……生年月日、一九八三年」

「……十二月、十六日」

二人は神妙に口を揃える。

1983 12 / 16

「俺の誕生日だな」

「私の誕生日でもあります」

暁は愉快そうに、月詠は不快そうに顔を歪ませた。

「……この不気味な一致は、一体何なのでしょうか」

「それについてだが、月詠。今日は他に誰かの誕生日だったか覚え

てるか？」

暁はなぞなぞでもやるようなノリで、月詠に問う。

「……悠陽様のお誕生日でしょう」

「ああ、そうだな。ということとは？」

「双子の冥夜様のお誕生日でもあられます」

「……もう一人いるだろうに。わざと言ってるのか？」

「む、まだ誰か？ 申し訳ないです。私は原典の知識については虫食いが多い。細かいところまでは覚えておりません」

「あー………そういやそんなこと言ってたな。つっても細かくないぞ、これ。結構重要な情報のはずなのだが………」

心底申し訳なさそうな顔で謝罪する月詠に、暁が虫食いなら仕方ないね………と納得する。

「ま、引つ張るもんでもない。とつととネタばらしするか」

暁があっさりと言った。

白銀 武だ、と。

「なるほど、なるほど。失念していました。今日は彼の誕

生日なのですね。そして貴方は白銀 武という存在が、私達のような異邦人がこの世界に多数存在する原因かもしれない、と？」

「確証はない。しかし、もし何かを疑うとしたら、コイツ以外に誰を疑うというんだ」

「……気持ちわかりますが、因果導体の白銀 武は未だ不在です。今この世界にいる白銀 武は、ただの少年に過ぎない。それに、仮に彼が原因だとして、私達がそれに便乗したところで2001年の10月22日がスタート地点になるはずでしょう」

「だから、確証はないと言った。これは俺の妄想だ。考証じゃない。これだけ大勢の人数の誕生日が一致したという理由だけでこじつけた、ただそれっぽい妄想に過ぎない」

月詠は呆然とした。

暁はこういった真面目な場面で妄想を口走るような人間ではない。

その意図が読めない。

「……つまりどういうことだってばよ、とお聞きしていいですか」

「いってばよ。お前には、俺の妄想を全否定するために、白銀 武を偵察してきて貰いたい」

「何……だと……？」

今度こそ驚愕の表情を浮かべる月詠。

「そもそも今日はお前にそれやって欲しくて連れてきた。悠陽から託された届け物の方は俺だけで事足りる」

「……それは、その、今日じゃないといけないことなのですか」

その表情からは、出来れば勘弁してほしいという感情が滲みでている。

「そう言うな。ついで、というヤツだ。柊町は目的地に比較的近いからな」

「ハア……諒解しました。偵察任務、承ります。ですが一素人の私に何を偵察しろというのです」

渋々といった表情で月詠は問いかける。その疑問は当然だった。彼女が直接偵察するメリツトがないのである。

そういうのを専門に活動している人間に委託することも可能なのだ。

その疑問に、暁は微妙な表情を浮かべながら答える。

「何と言っていいものやら……ああ、そうだな。普通の少年であるかどうかを確認して欲しい」

「普通の……？ それはどついう」

「怪しいところがなければ問題ないってことだ。適当でいい。それと、この車両の三部屋目にお前の丈にあった厚手の服が何着かある。降りるときに選んで着替えていけ。で、これは軍資金だ。好きに使え」

「あ、あの、これは一体……？」

状況を飲み込めずに、思わずそう聞き返す。怒涛の勢いで説明し、この年齢の子供が持ち歩くには明らかに多すぎる金の入った革財布を手渡してくる暁に、月詠は動揺を隠せない。わたわたと慌てている姿は、どこからどう見ても、そこら辺にいる年相応の少女に見えた。

「……町中ぶらついて好きに買い物して来いってことだ。言わせんな恥ずかしい」

それを聞いて、漸く彼女は理解した。

これは、彼からの誕生日プレゼントなのだ。

しかし、何も用意していない、それどころかそういう発想すら持っていなかった月詠は、自分自信に対して酷い自己嫌悪を覚えた。

「……わ、私は暁様にプレゼントを用意できておりません。ですから、これを受け取ることは」

「お前の挺身のおかげで、俺は十分楽しさせてもらってる。その日頃から積もり積もったお前への恩を、今回の一回で済ませてくれと言ってるんだ。酷いやツだろう俺は」

いいから黙って受け取れ、と遠まわしに告げた暁の顔はやや羞恥で赤みがかった。

キャラじゃないのを理解しているのだろう。なんか暖房効きすぎじやね？ と態とらしく愚痴っている。

……これがツンデレというヤツか、と月詠は笑みを浮かべながら内心で思う。

いつのまにか彼女の心を覆っていた自己嫌悪は霧散していた。

「貴方に、心からの感謝を。正直、ギャップのせいでちょっ

と子宮がキュンとしましたよ」

「女兒が子宮とか言うな。フーか嘘つくな、初潮もまだの癖に……解ってるだろうけど、白銀 武の偵察もすっかりやってこいよ？」

「ええ、諒解です。前金は頂きました。勤めは果たします……」

「……どうした？」

下品な冗談を言い合っていると、突如、月詠の反応が鈍り、目も虚ろになり始める。

そのまま体をゆっくりとソファーに倒し、完全に眠る体勢に入った。

「申し訳ありません……地獄の早朝稽古で、想像以上に消耗したみたいですよ……」

「……よい。それについても申し訳なく思ってる。その分も今日は楽しんできてくれ。柘町に着けば起こす。寝てる」

「……変なこと、しないでくださいね……」

「せんわ！ ケダモノか俺は……そもそも精通まだだし、って何言わせてんだ！？……あ？……もう寝てやがる。のび太君かコイツは」

暁はヤレヤレだぜ、と口にして立ち上がると、月詠の隣に腰を下ろし毛布を掛けてやる。

「……黙って眠ってれば、美少女なんだよな……」

呟き、規則正しく寢息をたてる少女の髪を壊れ物でも扱っように掬



い上げる。

黒髪で前髪パツツンの肩にかからない程度のボブカット……正しく、日本人形のような美少女、と言っていていいだろう。

「でもな……信じられるか……？これで、中身は前世の歳も合わせると四十路超えたおっさんなんだぜ……全く、世の中解らないことだらけだよ」

そう。

おっさんなのである。

おっさんのような、ではない。

おっさんなのである。元、がつくが。

暁が今ほつぺをぶにぶにしながら遊んでいる少女は、おっさんだったのである。

悪夢でも見ているのか、真耶姉様の笑顔超怖い、と呻き声を上げている目の前の美少女が、だ。

彼女は転生者。

そして転生というからには前世があるのだ。

例えば今は美少女だとしても、前世ではおっさんだったのだ。

「……あの人格矯正は、ほんと、大変だったろうな」

暁は思い返す。

担当はハトコ関係の月詠 真耶と、月詠 真那が受け持った。

それはもう見事に……口調から一人称までガツツリ変わったのだ。

前世の一人称だった僕は私になり、喋り方も丁寧なものに矯正された。

一部始終を見ていた暁は、その余りのスパルタっぷりに同情を禁じ得無かった。

そしてその結果出来上がったのは何処に出しても恥ずかしくない、下ネタもどんとこいなユーティリティ性を持つ日本の精神が凝縮されたような美少女である。

ここだけの話、暁は、君が望む永遠の結末の……平行世界の一つ、緑の悪魔に完膚なきまでに人格を破壊された鳴海 孝之を連想した。

「人格の矯正つつーか……全部壊してゼロにして、そこからまた築き上げたような……そんなノリだったからな……」

あの時、暁は心の底から同情した。そして、理解したのだ。

初めて邂逅したとき、マブラヴの好きなキャラや戦術機について熱く語り合った、あの時の中身おっさんの幼女は……もういないのだ、と。

「トランスセクシャルは……マジで、簡便だわ。ほんと……異性に転生しなくてよかった……」

暁はほっぺをぶにるのに飽きたのか腰を上げ、車に乗り込んだときに座っていた場所へ戻る。

そして通信回線を開き、運転席の一文字 鷹嘴に連絡を繋いだ。

「少佐。斉御司だ。予定が変わった。先に月詠 真央を柊町で降ろす」

『ハッ、了解しました』

「目的地までのルート選びは一任する。頼んだ」

必要な事だけを伝え、通信を終える。

暁は深い溜息を吐き、如何にも高級そうな備え付けのソファに体を沈めながら、双眸を閉ざして思考に没頭する。

複数の転生者。

不自然な一致を見せる生年月日。

物語の核となる少年。

ゆっくりと目を開き、暁は静かに眠る月詠 真央に視線を向け、間違っても起こさぬよう、優しく語りかける。

「……なあ、月詠。俺達はとんでもなく非常識な存在だ。オマケに他にも似たようなのが大勢いるわ、伏兵までいるかもしれないときてる……これ以上イレギュラーが増えるのは頭痛の種だ」

そのための白銀 武の偵察だ、と付け加える。

暁が思い浮かべるのは荒唐無稽な二つの単語。

逆行。

世界を救った英雄の少年が、過去へと舞い戻り、新たなお伽話の幕が上がる。

「……転生なんて馬鹿げた前例がここに居る。全面的に否定が出来る立場じゃない」

憑依。

世界を救う英雄となる少年の同位体に、違う何かか憑き、異なるお伽話の幕が上がる。

「……同じく、全面的に否定出来ない。誰か違うヤツが武の身体を乗っ取っている……有り得ないことじゃない。俺もお前も、似たような者だしな……」

暁はこの二つの不確定要素を、完全に排除したい。

その為に、白銀 武との接触は遅かれ早かれ必要だったのだ。

「とは言っただものの、十中八九ないだろうが……そのためにも確認が必要というのが七面倒だな」

月詠 真央を、白銀 武の偵察に向かわせるのもその為だ。

「まあ、俺が行ったほうが確実なのだが 俺は俺で、用事があるからなあ」

暁は丁寧に固定されて安置された花束と手紙に視線をやる。

こればかりは他人任せには出来ないよなと、苦笑する。

「気晴らしのシヨッピングもいいが、この世界の白銀 武がどういった存在か見極めてもらうのがメインイベントだ。月詠、お前なら事足りるだろう」

最も個人としてはこれ以上の厄介事はお引き取り願いたいものだ、と心の中で切実に思う暁だった。

「 ああ、言い忘れてた。寝てる時で悪いが、ハッピーバース

デーだ相棒。ちつとばかり厄介で長つたらしいプロローグだが、もうちよつと付き合ってもらつぞ」

暁はやがて来る、そう遠くはない将来を思う。

序章が終わり、物語が真の意味で始まるとき、どれだけの転生者が立っていられるのか、と。

既に行動を起こし、その存在を一部の人間に知らしめた18名の転生者。

未だ把握しきれしていない、海外にもいるかもしれない伏兵的な未確認転生者。

「……どこにいようと、そろそろ各々の分岐点に差し掛かるだろう……精々、くたばらないことを祈る」

暁は日本に存在する、そして世界中に存在しているかもしれない転生者達に語りかけるように。

「誕生日おめでとう、兄弟。さあ……悔いの無いよう行動してくれよ。希望が未来を焼き尽くす前に、な」

同じ日に生まれ落ちた、全世界の”兄弟”達に向かって、そう告げた。

ここに一つの戦場があった。

人類の剣を収める場所であり、その刀身を研ぎ澄ます場所。

戦術機ハンガー。

整備士という名の戦士達は、この戦場を縦横無尽に駆けずり回る。

彼らの熱気はこの極寒の地に位置する基地にあって尚、フル稼働している暖房設備のソレに劣らない。

しかしそんな中、周囲から異常なほど浮いている存在があった。

戦術機の前に幼い少女が一人、後膝部まで届く長い銀髪を揺らし、佇んでいる。

余りにもこの場にそぐわないその妖精のような少女を、通りすがの整備兵達が訝しげに一瞥していく。

整備パレットに備え付けられている柵にもたれかけ、眼前に聳え立つ無骨な鉄の巨人と相対する少女。

彼女は何を思うのか。その表情は無造作に伸ばされた前髪で完全に隠れ、周囲の人間には何うことが出来ない。

「F-14 AN3 ロークサヴァー……」

可憐な、それでいて冷たい声でボソリと、型式番号と名称らしきものを呟く。

それが目の前の戦術機に与えられた名前だった。

「実物大を生で見ると、センサーのゴテゴテ具合が最悪だな。これじゃ空力特性もクソもないだろ」

その見た目からは想像もできないよう口調の悪さで目の前の機体を酷評する。

揺らめいた前髪から覗く青い瞳が映すのは、戦術機の頭部、肩部、腕部に搭載された複合センサーポッド。

だが、この元来の機体コンセプトを無視した装備が、己の能力のサポートをする為の物だと、少女は理解できていた。

「……最悪の誕生日だ、ド畜生。ああ、嫌な予感はしたさ。ハンガーに”製造日”プレゼントが届いてるなんて素っ頓狂な事伝えられた時からな……ッ！」

忌々しげにそう言うと自らの肩を抱き、目の前の戦術機から目を背け、俯く。

……やがて来る現実からの逃避の許しを、頭を垂れて乞うように。

「スワラージ作戦まで後二年。後二年で、オレはこいつに乗

せられて……軌道降下でボパールハイヴに飛び込む……」

自分のことをオレと呼称した少女は、その未来を思い浮かべたのか、恐怖に震える。

必死で肩を掻き抱き、抑えこもうとするが、一向に止まらない。

「生還率、6%」

あまりにも絶望的な数字を、か細い声で搾り出すように口にする。

「……トリースタが参加しないから、自分も参加させられるはずがないって油断した結果がこれか」

少女は思う。

こんなはずではなかったと。

自分はスワラージ作戦になど参加せず、トリースタと一緒に第四計画へと接收されるために動く手筈だった。

だがその希望した展開は、一手目から粉微塵にされたのだ。

「例えそれが、十にも満たない少女でも……使えるものは使ったことかよ……ッ！」

吐き捨てた言葉が、整備の音に掻き消されて宙に消えていった。

少女は後悔する。

優れた知性と落ち着きを、幼児の頃から周囲の人間に見せつけた事を。

少女は憤慨する。

既に積み上がっていた人生経験とESP能力が結びつき、凄まじい



潜在性能が何故か発揮されてしまった事に。

少女は懺悔する。

調子に乗って、寄り善い未来をその手に掴めるかもしれない等と夢想していたことを。

全てが完全に裏目に出た。

戦争をナメてかかった代償が、払わされる時が来たのだ。

「……悪い、トリースタ。オレ……お前と一緒に日本にいけないかもしれない……」

少女は自分に懐いてくれている、未だ幼くも聡明な三〇〇番目の番号を割り振られた妹のことを思う。

彼女は姉として、暇があればトリースタに未来のお伽話を断片的に語り聞かせた。

日本のことや、不器用ながらも養母になってくれるであろう天才博士のこと。

世界を救う、一人の少年のことを。

その少年を導く、一人の少女のことを。

すると、トリースタは答えてくれたのだ。

「っぽんに、いつてみたいです、と。」

舌っ足らずに。

「ねえさんといっしょに、と。」

少女は顔を上げる。

その瞳には、絶望に抗い、希望を求める光が宿っている。

「……嫌だ。そんなのは嫌だ。死ねない。オレは嘘つきになりたくない。だってもう、オレは答えを返してるんだよ」

いっしょに、日本に行こうって

人工ESP能力者として二度目の人生を歩む転生者の、生きるための戦いが　　今、始まった。

第六話 それぞれの誕生日 中編

誕生日だからといって休校になるわけではない。

俺は普段通り、小学校に通っていた。

特殊な出で立ちである俺にはもう学ぶことは一切ない。

だが、かといってサボっていいというものでもない。義務教育の短所である。

無駄な時間を過ごしている、という感覚が一層増しているのは、今日は教職員方のネットワークを頼りに来たということもあるからだ。高認の資格所持を盾に、何とか早期に軍系列の学校に……出来れば関東の方へと、家族と一緒に進学を兼ねて移住出来ないものかと相談を持ちかける為に。

しかし。。。

どうやらそれは放課後の事になりそうだ。

「なあなあ、エイジー、そとでドッチボールやるーぜー！」

「ふわ、シヨウギやらない？わたし、けっこーつよいんだよ？」

朝っぱらから……。

「エイジ、しゅくだい見せてくれー」

「ふわくん、しゅくだいのさん数がわからなくて……おしえてくれないかな？」

こ、こつも纏わり付かれては……。

「おい、エイジはおれらとあそぶんだぞ！女子はあっちいけ！」

「ふわくんはあんたらテノノとはちがって、ゆるしゅーなの！サ  
ルはあっちいきなさい！」

いかん……男女間で抗争が勃発しようとしている……ッ！？

「わ、解ったから喧嘩すんな！宿題教えて欲しい奴はこっちにこい、  
見るだけは却下だ、纏めて教えてやる！次の休み時間は将棋だ！二  
時間目は体育だからそのまんま休憩時間にもつれ込んでドツヂすん  
ぞこんちくしょおおおおお！」

無理矢理にテンションを最高潮に押し上げて言い切る。

最近学んだ処世法だ。子供には子供のテンションで対応するのがい  
いという。

羞恥を覚えたら、それは失敗している。

羞恥を捨て、コチラも子供の対応をすれば、ガキ供もテンション上  
げて乗ってきてくれるのだ。

「イエエエエエエイ！ エ・イ・ジ！ エ・イ・ジ！」

何だこのノリ。

結局、誕生日らしいイベントは一切起こらず、子供のパワーに振り  
回されて午前を過ぎす事になってしまった。

A・D・1990・Winter・12/16

60ミリジンの三部屋目で、可憐にドレスアップされた少女が一人。

「どうでしょう？おかしな所はありませんか？」

真央は自分の格好がおかしくないか、男性二人に意見を求める。

私服と言えるものを実質的に持つていない真央には、自分で少女服をコーディネートするなど、初めての体験だった。

「見目麗しい。大変似合っておりますよ、真央様」

「ありがとうございます、一文字少佐　それで、どうでしょう、  
暁様」

「白黒のツートンとか無難すぎるだろ。人おちよくってんのか？」

「  
」  
真央は物凄く爽やかな笑顔で竹刀袋から脇差を取り出し、シャランと刀身を露出させる。

「すげー！すげーよ月詠！やっべー、超似合ってるんですけどー！  
かわいー！」

「宜しい」

寝めるの強制するんなら初めから言っただけじゃねーよ……と暁が冷や汗を滲ませながら、刀を収めた月詠に聞こえないように小声で呟く。鷹嘴は、驚いたような表情で二人のやりとりを見ていた。  
と、同時に吹き出す。

「ん？どうした、少佐」

「一文字少佐？何かおかしな　　ハッ！？」

全く気付いていない暁に、やってしまったと後悔する真央。

「い、いえ、余りにもお二方が楽しそうに市井の民のようにじゃれ合うものですから……」

ビシリ、と空気が凍った。

暁も漸く、やっちまったと思に至る。

この七年間、人前でこんなやりとりをしてしまったのは此度が初めてだった。

「あー……悪い、少佐。黙っていてくれると助かる」

「わ、私からもお願いします。出来れば今のことは忘れて下さい。警護対象者である暁様相手に抜刀など、冗談でもすべきことではありませんでした」

「……お前、周りに人居ない時はかなりの頻度で抜刀してるよな……?」

「暁様が抜刀させてるんです」

「俺が悪いみたいに言うな!?!」

「暁様が妙な煽り方するからでしょう!?!」

再びじゃれ合いだした二人を見て、その無防備さと第一印象との凄まじいまでのギャップに、遂に腹を抱えて声を出して笑い始める鷹嘴。

たつぷり30秒ほど笑っていた鷹嘴だが、私は口が固いので大丈夫ですよ、と告げられ、胸をなで下ろす二人だった。

「全く、いかなな、今日はどうにも緩みっぱなしだ」

「ええ、気を引き締めなければ。本当に……一文字少佐が人格者でよかった。もし、告げ口をするような卑劣漢なら……私は後で……真那姉様と真耶姉様に……ああ……そ、そこだけは……ご勘弁を……」

突然、ブツブツと独り言を呟きながらガクガクと震えだす月詠 真央。

その様子を、またかよ厄介なトラウマだな……と呟きながら億劫そうに暁が眺めている。

「暁様、放っておいて大丈夫なのですか？」

「構わん、ただの発作だ。すぐに治まる。と、いつか、今のうちに外に放り出そう。うん。迎えの時の合流場所も時間も教えてある。忘れ物もない。問題ないぞ」

「……本当に宜しいので？」

「私是一向にかまわんツ！……と、すまない少佐、そろそろまたハンドルを握ってくれまいか。次は、俺の用事の方へ頼む」

「ハッ、了解しました」

鷹嘴はそう返し、運転席へと向かう。

暁はヤレヤレだぜ……と言いながら、肩に手を回し、外に月詠を運びだす。

「ま、真那姉様……解りました……解りましたから……そ、そんな恥垢の洗い落とし方なんて……や……らめえ……」

「……お前は何を言ってるんだ……」

余りにもお馬鹿な独り言に、思わず突っ込みを入れる。  
俺と絡まなければ真面目一辺倒なのだがな、と暁が思う。

「ハッ……わ、私は一体」



ビクンと一度大きく震えると、漸く正気に戻ったのか、自我を取り返す真央。

「チツ……今日は早かったな。悪いが、勝手に外に運び出したぞ」

「も、申し訳ありません。お手数掛けます……それと、舌打ちは余計です」

スルーし、もう自分で立てるだろ、と手を離す暁。

フラつくこともなく、地面に立ち、背筋を伸ばして暁と相對する真央。

パンツ！と暁が両手をたたき合わせ、大きな音を鳴らす。

「……さて、お互い、頭を切り替えるぞ。真面目な話だ」

「ハッ！」

瞬間、今までの巫山戯た雰囲気、どこへともなく霧散した。

既に二人が纏う空気は、宛ら真剣のように研ぎ澄まされたものに変化していた。

「月詠、これからお前には白銀 武と、鑑 純夏に逢ってきてもらう」

「……鑑、純夏」

感慨深く、真央がその名を口にする。

鑑 純夏。

愛と勇気のお伽話の起点。

「ああ、そうだ……常々二人は伴って行動しているようだからな。片方に合えば、もう片方と出会う」

「道理ですね……場所は、例の公園ですか」

「その通りだ 去年と、同じ場所に居るだろう」

去年……1989年12月16日。二人と邂逅したのは暁だった。悠陽と冥夜の橋渡しを承った暁。

狙ったものではなく、本当に偶然だった。

去年にドライバーを担当した者が、何の偶然か、この町に縁がある者で、立ち寄ることを暁が許可した。

そして手持ち無沙汰になった暁が町を散策し、遭遇した。

「お前も、直で見てこい。そして、選べ」

暁は真つ直ぐ真央の瞳を見つめ、真摯に語りかける。

「暁様、私は既に答えを」

「違う。お前は、まだ本当の意味で選んでいない。あの時は建前だ」

あの時。

暁と真央が出会い、何日も、何週間も語り明かし、この世界でどう生きていくかという答えを出した。

共闘の儀を結んだ瞬間。

「ああ　　思えばあの時の俺の答えも、建前だった。二人の存在をその目で見て、理解して、漸く選択する権利を得る。それからじやないと選べるはずもないんだ」

「ですが……私は、既に貴方と共に行くとした。こんな今更、選択肢を増やされても　　」

「増えてなんていないさ。元から在ったんだ。お前が俺に合わせてくれていただけだ。安心しろ、仮に違う選択肢を選んだとしても、お前と俺は既に運命共同体だろ」

「……そう、ですね。私達は既に、明確な意志を以て、世界に干渉し、歴史を捻じ曲げた。それに対して責任を負わなければいけません」

F - 16 J / T S F - T Y P E 88 彩雲。

吉兆とされる気象現象の名を賜り、日本帝国に降臨した　　存在  
しないはずの異物。

これだけは、最早何をしても消えることはない。  
世界に刻みつけた、自分達の存在の証。

「　　では、行って参ります。暁様」

「　　ああ、行って来い。真央」

月詠　真央は暁に背を向け、歩き出す。答えを得る為に。

齊御司　暁もまた真央に背を向け、歩き出す。約束を果たす為に。

広く薄暗い研究室の中、ただ一人、茶色がかった髪を無造作に後ろで束ねた幼い少年が、黙々とコンソールに何かを打ち込んでいる。ダボダボの白衣を羽織ったその姿は、中々に様になっていた。タン、と最後に Enter key を押しこむと、少年は姿勢を正し、モニターを凝視する。

その瞳に映り込むアルファベットの羅列  
F i f t h - D i m  
e n s i o n a l E f f e c t B o m b。  
これが意味するモノ、それは 。

「 五次元効果爆弾。通称、G弾」

少年は畏怖を込めてその名を呼ぶ。

「サンタフェ計画のモーフイアス実験から三年……コツコツ積み上げて、やっとこさ論文の骨子が完成とか……自分の無能さが嫌になる……」

最も他に平行して色々やってたのもあるけど、と言いつのようには

くと、掛けていた眼鏡を外し、髪を掻き上げる。

「本格的に着手するのは、91年のG弾実用化の情報が入ってからになるかな……で、明星作戦の 横浜ハイヴへの投下で最終調整……まだまだ、か」

首からコキコキと音をならしながら周囲を見回してみると、自分以外誰一人として居ないことを漸く気付く。

「ん……みんな気晴らしに外出、かな」

本来のこの部屋の主達が、どこにも見当たらなかった。この広い部屋に、少年だけが一人残っている。

「って、室長の爺ちゃんまで居ないのはどういうことだよ……でも、仕方ないか。嫌な感じに滞り始めたからな 次期オルタネイティブ計画の基礎研究も」

本来は手を貸さねばいけないのだが、少年は高い知能と知識を持っていたが、天才ではなかった。 が、少年は高い知能と知識今必要なのは大きすぎる壁を打ち壊す……ブレイクスルーを可能とする天才の力だ。

「歯痒いけど、手出し出来る領域じゃないからな……僕は僕に出来ることをやらせて貰おう……」

故に、少年はリソースをG弾否定の論文と、整備兵、戦術電子整備兵の知識の吸収と訓練に割いていた。

「それにどうせ、この状況も来年になれば……将来、横浜の雌狐に

なる天才がぶち壊してくれるよな、きつと……」

やや自信が無さそうにそう口にした少年は、突き付けられた世界の歪みを思い出す。

F - 16 J / T S F - T Y P E 88 彩雲。

吉兆とされる気象現象の名を賜った、帝国の新たな剣。

本来在り得るはずもない、未知なる剣。

「転生…… I f …… 平行世界…… 多世界解釈…… 頭がどうにかなりそうだな。あー…… ポルナレフさん来てくれー……」

少年は怠そうに、グシャグシャと無造作ながら毛並みのいい髪を掻き毟りながら自分の境遇を嘆く。

「否定はしないけどさ…… いざ自分が巻き込まれると、参るなほんとは……」

どうやらこの世界は、自分の知るモノとは異なる未来へと突き進みたがってるらしい、と。

「歴史の修正力だの、カオス理論だの、存在理由レゾンデールだの…… そんな厨二病めいたこと、真面目に考えるときがくるなんてね……」

愚痴を吐くと、もう F - 16 が採用されてしまってる時点で歴史の修正力なんてないようなものですよねー、と溜息を付いた。

そして今後、カオス理論の…… バタフライ効果がどれだけ大きくなるのか、と有り得そうな分岐を考えて憂鬱になる。

「でもな、バビロンだけは阻止させてもらっぞ。僕は…… T

he Day Afterの荒廃した地球を、絶対に認めない」

気持ちを奮い立たせるため、自分に言い聞かせるようにその決意を口にする。

「……凡人は、凡人なりに……頑張つて遣り遂げてみせるさ……」

自嘲し、フラフラと立ち上がると、少年はモニターの電源を落とすのも忘れ、寝袋に倒れこむように沈み込んだ。

「あ、れ……？コーヒー入れようと……思ったのに……」

意志とは裏腹に、少年の体は動いてくれない。

「くっそ……丸一日寝ないだけで、この様なんて……無理か……眠……」

薄れゆく意識の中、体も鍛えないとな、と思う。中身が大人であるのが、宿った器は子供の体。体力の限界は、想定したよりも早く訪れる。

そしてそのまま、意識のブレーカーが、落ちた。

月詠 真央は、斉御司 暁と別れた後、件の公園へと直行していた。本来なら適当にぶらつき、好きなものを飲み食いすることを許された立場だったが、そういう心境ではなかった。

確信したのだ。

心の準備をしてからではないと……白銀 武と鑑 純夏に 会  
い見えることなど出来ない。

既に公園に来てから一時間が経過していた。  
隅の方に設置された時計が示す時刻は、一時。  
今日は小学校が土曜日故に、半ドンだった。  
既に下校する少年少女を多数見かけている。

真央は思った。出来れば、今日は来ないで欲しいと。  
そうすれば、現実など見ること無く、建前で行動できるから。  
だが、その願いは世界に拒絶される。

「タケルちゃん！きょうもこうえんなのー？」

「なにいつてんだスミカ！ほかにねーだろー！」

ついに 悲しい運命を背負った少年少女と、出会う。



「ッ」

瞬間、心臓が跳ね上がった。

一時間も早く来て、冷たい風に身を晒し、心を落ち着けていたのに、真央の心はどうしようもなく、乱されていた。

「えー！？さーむーいーよー！はやく、おうちにいこうよー！」

「ばっか！うちに帰ったらしゅくだいさせられるだろーが！」

二人は公園に駆けこみ、そのままブランコの方へ向かおうと駆ける。走り回っている。

躍動している。

その生命力溢れた動きは、離れたベンチに座っている真央にも伝わってくる。

「タケルちゃん！なんでブランコなのー！？さむいよー、すべりだいの下にいこうよー！」

「すべりだいの下の何がおもしろいんだよー！？」

「かぜよけ」

「このなんじゃくものおおおおー！」

白銀 武も鑑 純夏も、純粹そのものだった。

怪しことなど、何一つ感じ取ることは出来ない。

普通だ、と思った。

普通の少年と、少女だ。

そう　　普通に、懸命に生きている、ただの人間だった。

「　あ　　ッ　　」

涙が零れた。

普段は強い理性に押さえつけられている子供特有の本能が、感情が、激しく揺り動かされた。

この時になって、漸く真央は暁の言っていたことを理解した。

そうだ。二人は、生きている人間だ。

目の前で、足でしっかりと立ち、笑い、泣き、喜び、怒る事の出来る人間なのだ。

決して、世界を救うための舞台装置等ではない

軽んじていたのだ。そこに在る生命を。

確かに鼓動を刻む、その存在を。

死ぬのを知っているから、死んでも構わないなどという理屈は、有り得ないのだ。

例えそれが　　吹けば飛ぶような儂い命だったとしても。

自分たちは、今この瞬間を生きているのだから。

真央はベンチに座ったまま、涙も拭かず、輝く二つの生命を見つめ続けていた。

「？」

鑑 純夏が、まるで吸い寄せられるように月詠 真央の方へと振り向く。

視線が、交差する。

「ッ！？」

狼狽える真央を尻目に、鑑 純夏が足早に距離を詰めてきた。

「ねえねえ！なんで泣いてるの？」

「あ……いえ、これは、目にゴミが入って……」

取り繕うように嘘を付き、急いで涙を拭う。

「うわあ……いたそうだねえ……あ、わたしはスミカっていうの！お名前は？」

「……真央と、います」

「マオちゃんかあ！ね、ね、一緒にあそぼ？」

「 申し訳ありません。私はこれから私用で待ち合わせ場所にまで行かなければなりません」

「えー……そつかり、残念。それじゃ マオちゃん！またね！」

「ッ はい。何れ、また何処かで」

鑑 純夏が真央に背を向け、全力でブランコを漕いでいる武の元へと戻っていく。

刹那、真央の脳内に凄惨なビジョンが映り込む。

BETAに身体を引き裂かれる武。

BETAに心を引き裂かれる純夏。

堕ちる双子の黒い星。

そして、繋がる世界。

愛と勇気の御伽話……その起点。

目を瞑り、強く頭を振って、その一瞬の残像を払い落とす。

「……会い見えて、初めて解ることもある、か……」

呟きゆっくりと瞼を上げ、ベンチから立ち上がる。

そして、少年と少女に背を向け、立ち去る。

もうここには用はないと。

その存在を理解した。そして権利を得た。

だから後はもう、答えを出すだけだ。本当の答えを。

月詠 真央は、斉御司 暁と落ち合う場所へ足を向ける。

相棒に、答えを聞かせるために。

「……………」

誰かが灯りを点けたのか、薄暗かった研究室が電灯に照らされていた。

寝袋にくるまった少年は、有り得ない来訪者に気付いていない。

「起きなさい、坊や」

コツコツと頭を蹴られ、少年は不完全に覚醒する。

「う”う……………僕の眠りを妨げるのは……………誰、だ」

まだ眠たげに目を擦りつつ、頭を小突いてきた声の発生源を見上げる。

霞みがかった視界が、美女と美少女の境目のような、不思議な女性を捉えた。

「 何で、貴女が」

その姿を確認した瞬間、少年は完全に覚醒した。  
慄き急いでカレンダーを確認する。

何度見返しても、1990年、12月16日だった。

早い。この人が、ここに来るには早過ぎる。

「ん？……どこかで逢った？まあ、あたしの事は置いときましょうか……そんなことよりもこれ、まさかとは思うけど坊やが書いたのかしら？」

そう言うと女性が点けっ放しで放置していたモニターを心底面白そうに見ていた。

少年の額に油汗が滲む。

後悔する 何で寝る直前、電源を落とさなかった、と。

「……プツ、アハハハハ！坊や、貴方、その年で反米思想にでもかぶれてんの？ステイツが国を上げて税金を湯水のように注ぎ込んでいる新型爆弾全否定じゃないこの内容！」

暫し画面を操作し、内容を吟味した女性が唐突に腹を抱えて爆笑しだす。

やばいやばいやばい。

とんでもない人に、とんでもないモノを見られた。

少年がそう思った時には、もう全てが遅かった。

無意味に終わるだろうとは思うが、少年が弁解を試みる。

「ア」……イエ、それ未完成で……てか、ちょっとしたジャパニーズジョークでデスネ……」

「プツ、ククク……しかも何、この、集中運用すると重力異常で海水の一極集中が起こる？規模はユーラシアが完全水没？しかもその地点の地球の裏側が完全に干上がるですって？馬鹿鹿じゃないの

いい感じにぶっ飛んだ発想してんじゃない。見込みがあるわ」

全く、一切、これっぽちも話を聞いてくれない。

少年は絶望した。

そこに追い打ちをかけるように、キラリと、女性の目が光る。まるで獲物を目の前にした豹か何かだった。

「あたしは香月 夕呼。今日からこの帝国大学量子物理学研究室に世話になりに来てやったわ さあ、名乗ったわよ、名前。あんたも教えなさい坊や」

「 ボク、霧山 霧斗キリトデス。コンゴトモヨロシク」

ここにまた、出会いが一つ。

転生者は誕生日に、聖母と出会う。

「ツ！ ツ！」

道場に、木刀が空気を裂く音が響き渡る。

一心不乱に素振りを続けている少女      御剣 冥夜は気づかない。

背後から静かに這い寄る変態に。

「ン冥夜たあああああああん！！！」

「ツツツツツ！？！！？？」

反転、踏み込み、打ち下ろし。

咄嗟の反応だが、一息でその三工程を踏んだ一撃は、背後からの襲撃者を完璧に袈裟懸けに捉えたはずだった。

が、木刀は空を切る。

「お美事に御座います      ったく、七歳児の打ち込みの速度じやないぞ……冷や汗かいた」



頭を垂れる用に地面に這い蹲っている少年が、その言葉を紡ぐ。  
凄まじい速度で振り下ろされた袈裟懸けを回避するために、全力で  
しゃがんだのだ。

「あ………暁様？」

「おう、暁だぞ。冥夜、誕生日おめでとう」

「そなた、何故わざわざはいごからちかよってきたのだ………」

「いや、驚くかと思って」

身支度を整えた冥夜は、突然の来訪者を自室へと案内した。  
今は出されたお茶を飲んでまったりとしている。

「　　去年の今日いらいだ、こんなにもおどろいたのは………」

「そいつはよかった。木刀で殴りつけられる覚悟をしてまで忍び寄  
った甲斐がある」

そなたは去年も同じことをしただろう………と冥夜が溜め息を吐く。  
まさか同じ手で来るとは思っておらず、完全に油断していた。

「そ、それで、暁様……姉上からの……」

「暁」

「……む」

「あ・き・ら」

「あ、アキラ……むう……なぜそこまで様付けを嫌うのだ。そなたは本来……」

「……斯衛の青が、私用でこんなところに居るわけ無いだろ。ただの暁だよ、俺は」

そう小声で言うと、暁は丁寧に、華麗に包装された花束と手紙を、ホレ、受け取れと言いながら手渡す。

「おお、これが姉上からの……！……姉、上から……の……？」

一瞬、キラキラと目を輝かせて喜んでいた冥夜が、何故か一気に消沈する。

その視線は花に釘付けだ。

もう、滅茶苦茶ブルーである。

「……何だ？ 去年のお揃いの人形は喜んでたじゃないか。何か気に入らないことでもあったか」

「い、いや……姉上からのおくりものに不満などないのだ……わ、私が用意したものに……もんだいが……」

冥夜は机の上に置いてある、自分からの贈り物に視線をやった。  
暁の視線もそれを追い、そして　とんでもなく面白いモノを見つけた。

「ブハツ！お、お前、マジかよ……これ、クツククク……」

耐えきれず、抱腹絶倒する暁。

「そ、そなた！笑うでない！私もひつしに考えてこれに決めたのだ！えーい、わ、笑うなー！」

「ハ、ハハハ！お、おいおいおい、あんまり笑わせるな！こんなの持っていたら俺がお前の姉上に怒られちまう！」

「だから困っていたのだッ！そ、そなたのほうから、何とか説明してくれ！」

「プツククク……聞いてくれるかねえ……なんせ、送ったはずのものと同じものが返ってきたんだから……俺が約束を反故にしたと思われるのがオチだと思っが？」

悠陽、どうやら花の名前も花言葉も教える必要なんぞ無かったようだ。

この妹も、お前と同じこと考えてたみたいだからな

「あー、もう。お前らほんと、おませさんだな。花言葉とかどこで調べたんだよ？」

「なあ　　！？そ、そなた、男児のくせに知っておるのか……」  
「……この花の言葉を」

「なに、素晴らしい教養の賜だよ。高貴な位つてのは面倒で必要無  
さそうな知識も取り入れないといけないから困る」

顔を真赤にして狼狽える冥夜と対照的に、サラッと流す暁。

朝に見た悠陽も顔が赤かったなーと思い出すと、またしても笑いが  
込み上げてくる。

どれだけ似たもの姉妹なのかと。

「ま、ソイツは頂いていく。説明は任せろ、上手いこと丸め込んで  
おくぞ」

「頼む……そなたに感謝を」

「冥夜、贈り物が被っちまったことを恥じる必要なんてないぞ。む  
しろ誇りに思えよ。お前と悠陽は、根っこの部分で繋がって……  
…同じこと考えてるんだ、ってな」

「　　アキラ……」

「で、この花の名前と花言葉なんだっけ？ド忘れしちゃった。  
どうかお前の口から聞かせて欲しい」

「　　そ、そなたは……ッ！良い事言っただと思っただらそれだ！  
どうにかならぬのか、その性格は！」

「悪いな、生前からこんな感じだね」

冥夜が俯き、ゴニョゴニョと口をまごつかせる。

「ぼ……し……あい……」

「どうも聞こえんな〜〜〜、何ですって？」

「ッ！花の名前は牡丹！花言葉は姉妹愛だ！」

バツと顔を上げた冥夜は蛸のように真っ赤な表情で、はつきりと告げた。

これで満足か、とでも言いたそうに暁を睨みつける。

「ああ　満足だ。姉妹愛……その言葉が聞きたかった。素晴らしいな姉妹愛は。いいね姉妹愛。お前らの姉妹愛に報いるためにも、とつとこの姉妹愛の意味を冠する花を送り届けねばな」

「連呼するでない!？」

からかうように何度も姉妹愛と口ずさみながら立ち上がる暁を、冥夜が威嚇するように涙目で睨んでくる。

やり過ぎたか、と思う暁だったが、冥夜の表情を見て面白いし可愛いから別にいいか、と思い直す。

「さて、それじゃそろそろお暇させてもらうか……贈り物は牡丹と……机の上の手紙でいいんだな？」

「……そうだ。それだけだ。早く去るがよい」

暁が再確認すると、頬を膨らませて不機嫌そうに外方を向く冥夜。やだ、何この可愛い生き物。

「……済まない、からかい過ぎたな。ま、犬に噛まれたと思って耐えてくれ。俺も友達は少ないのでな……お前に合うと羽目を外したくなるのだ」

「そなたの立場はわかっているつもりだ。今、私が姉上とながっているのも、そなたのおかげであるということも」

「そう言ってくれると助かる。じゃ、またな。今度、紅蓮に連れられて一緒に剣でも振りに来るさ」

告げて、退出しようとする暁。

冥夜は背を向けた暁に声を掛け、引き止める。

「……待つがよい」

「ん……？」

「言いそびれていた。誕生日おめでとう。また来年も、その……頼む」

「ああ、承った。それじゃあな」

笑みを浮かべながら今度こそ、暁は部屋から出て行った。

姉から届けられた手紙と花束を見つめながら、冥夜は暁のことを考える

忌児として引き離された自分と、煌武院の当主となる悠陽の関係を繋ぐ少年。

自らも齊御司の嫡男でありながら、暇を見ては自分に会いに来てく

れる、型破りな少年。

「……まったく、アキラのような人を、は、破天荒……？というの  
であろうか……」

あの性格とだけは相容れないと思いつつも、悪い気はしていない  
のだ。

「私も、友と呼べるものは少ない……友とよんでくれる、そなたに  
感謝を」

似たもの姉妹なのか……姉と同じく、本人の居ないところで感謝の  
句を詠む冥夜だった。

「待たせたな少佐……只今戻った」

「お帰りなさいませ　　む。無礼を承知でお尋ねします、暁様。  
先方は、プレゼントをお受取り下さらなかったのですか？」

屋敷に入っていく時と全く同じモノを持って出てきた暁に、不思議  
に思い尋ねる。

本来、そういう事に口を出すのは有り得ないのだが、道中のあれこ  
れで暁の気心がある程度知れた鷹嘴は、緊張もなく自然に聞いた。

「ん？あー……違う違う。クッククク、何てことはない。お返しに、同じものが返って来ただけだ」

「……何ともそれは、珍しい偶然ですね」

「偶然だとは思えないがな……相思相愛故の必然だと思っぞ」

「は？」

「いや、こつちの話だ……少佐、体調が万全ならそろそろ柊町に向かおう。真央を回収する」

「ハッ！問題有りません、万全です　それでは参りましょうか」

「頼む」

暁は鷹嘴に背を向け、二部屋目のドアを開けると一人きりの静謐な空間に潜り込む。

そしてソファーに身体を沈めると、目を細め、掲げた牡丹の花を眺めた。

「……悠陽はどんな反応返してくれるのか、今から楽しみだ」

同じものが帰ってくるって発想は流石にないだろう、と笑を浮かべた。

「さて、真央は答えを見出せたか」

和やかな表情が一転し、暁はあの二人と出会ったであろう真央を思



う。

「逆行だの、憑依だの、そっち方面は別に気にしてない。まず、無  
いだろう」

一応の確認でしかない、と付け加える。

そう　　此度の偵察は、二人の異常性を探つて欲しかった訳では  
ない。

知って欲しかったのだ。

二人が普通である、ということ。

「どうする、真央……？生きてるだろ、どうしようもなく……その  
二人は　　まだ、生きてるんだ」

去年、自分も偶然に出会ってしまった、物語の起点を創る者。

「……これで、確りと解つただろ。オルタネイティヴ4を完遂する  
ということが、どういうことか」

瞳を閉じ、あの時あの公園で視界に入ってしまった眩しく輝く命を、  
思い返す。

「　　その上で、どうか再び答えを聞かせて欲しい」

未来を想う。

自分達が目指す未来を。

「選んでくれ」

それを手に入れるために、何を切り捨てるのかと。

暁は相棒に、問う。

第七話 それぞれの誕生日 後編

「ごめんねえ……不破くん……力になれなくて……」

「いえ、お手数お掛けして申し訳ないです。それでは、失礼しました」

俺は謝礼と退室の挨拶を済ませて職員室から退出すると、そのまま壁に背をべたりと貼りつけズルズルと地面に崩れるように座りこんだ。

放課後、級友共から開放されてすぐに職員室に顔を出し、先生方に進学先の融通をしてもらいに来たのだが。

「……案の定、高認の資格持ちだからって義務教育期間すっ飛ばしは無理だったか……」

結局はそういう結論に落ち着くことになった。

自分はどう足掻こうとも貴重な時間を小学校で過ごすことになる。モラトリアムはあと半分しかない。

焦燥感ばかりが募る。

「ま、収穫もあった……それで納得しておくか」

全国でも数えきれないほどしか存在しないが、カリキュラムに軍事的要素を多分に取り入れた中学校が幾つかあるという。

先生方は、その中から最も俺に相応しい学校を選別し、推薦してく

れるよう取り計らってくれるらしい。

個人的な希望としては帝都より東、または北東に位置する学校ならばどこでもいい。

万事滞り無くいけば、避難先の確保と、襲い来る困難に打ち勝つ為に必要となる心・技・体を一手にできる。

しかしその入学時点で、既に俺は十二歳。

もしBETAの侵攻に遅延がなければ、そこから猶予は……二年。

その二年間でどれだけ動けるか。お世辞にも多いとは言えないその時間で、俺は”なんとか”しなくてはならない

それ以前に困っているのが……両親の説得も必要だということだ。

BETAに蹂躪される場所に置いて行く訳にはいかない。

だが大の大人である両親が、世間的に見ればまだまだ子供な俺の意見にホイホイ従って家族総出の引越しを肯定してくれる訳が無い。

一番の厄介がコレだ。

必要になるのだ、説得するに足る交渉材料が。

一時期は両親の説得なんて簡単だと思った。

父さんも母さんも、俺には甘い。

息子の進学が切っ掛けとなり、家族仲良く東の方へと避難してくれるのだろうか、と。

だが、もしかすると手の掛かる話になる可能性が高い。

両親の仕事　　公務員、ということになるのだろうか。

難民対策局。

大陸から流入してくる難民の対応を担う為の組織。

最近は何々に増えつつある難民の対応に日々追われているという話だ。

俺の両親は、その組織の九州地方担当の構成員だ。

難民はまだまだ増える。数年もすれば、猫の手も借りたい状況になるだろう。

そんな状況下で、局員が保護する対象である難民よりも先に避難するというのは。

「やっぱ、マズいよな」

だが、どうにかしたい。

俺にとつては、数千数万の難民よりも両親の命の方が重いのは明確。顔も知らないその他大勢よりも、血の繋がった二人の方に天秤が傾くのは当たり前だ。

そんな比べるべくもない難民達と一緒に、父さんと母さんが踏み荒らされる……冗談じゃない。

逃がしてやりたい……何としてでも。

「……もうケツに火が点いてるっていうのに……ッ」

だというのに、妙手どころか小さな案すら出てこない。思考が行き止まりにぶち当たり逸れる。

ふと、白銀 武と香月 夕呼の関係が脳裏に浮かんだ。

あれこそ理想のギブアンドテイク。

盤上を引っ繰り返すジョーカーは持ち主を求め、手札を欠く魔女は切り札を欲した。

そして互いは導かれるように出会う。

自分には降り掛かることのないであろう、運命的と言っていていい巡り逢いを妬む。

「……また無い物ねだりだよ。成長しないヤツ……」

自嘲し、みっともない思考を振り払うように立ち上がる。

……頭も身体も重い。鉛でも詰まっているかのようだ。

すっかり慣れたつもりだったランドセルまで、いつもより重く感じる。

帰宅しようと下駄箱へ向かう途中、ガラス越しの空を見上げる。

思ったより長く職員室に居座っていたようだ。

太陽は頭上を通り越し、傾きつつあった。

ポケットから取り出した懐中時計で時間を確認すると、既に三時を超えている。

「はぁ……帰って身体でも動かすか……」

考え事に詰まった時はコイツに限る。

我ながら何と言うか、脳筋というか……。

少なくとも運動の最中は思考にリソースなんて割かなくていい、ということのでついやってしまう。

逃避だということは理解出来ているが、閃きとやらは来ないときには来ない、というのもまた事実。

そういう時はスパッと頭を切り替えて、運動に力を注ぐ。

……そうと決まれば後は行動あるのみ。

俺は軽く準備運動をすると、全力疾走で帰路へと着いた。

「……………」

月詠 真央は目を閉ざし、無言を貫いている。

「……………」

同じく、斉御司 暁も目を閉じて足を組み、備え付けのソファアに身を委ねている。

リムジンの中を沈黙が満たしていた。

二人に会話は無い。

勿論、視線を合わせることもない。

真央は合流地点で回収された時から、何かを深く思案し、自分の世界に潜っていた。

二人を乗せた車がそろそろ京都に差し掛かるだろう、という時。

真央が思考の没頭から現実へと舞い戻った。

閉ざされていた瞳が開き、少女が幼い眼差しを少年に向ける。

暁はそれに視線を返して口を開く。

「別に答えは今直ぐに出す必要もないぞ？ 猶予はまだ」

「……ご冗談を。もはや猶予など無いに等しい状況でしょう」

暁の言葉を遮った真央が、揺れる瞳で見つめ返す。

真央の言った通り、彼と彼女には既に猶予期間など無いも同然だった。

正確には、猶予期間は存在した。だが、二人はそれを自ら放棄したのだ。

二人が重要視し求めたモノは、時間ではなく”先手”だった。

他の誰よりも迅速に行動することによって手に入れることが出来た貴重なイニシアチブ。

同時に、自分達の異常性と有用性……そして危険性を周囲の権力者に伝えてしまう手段であり、他の転生者達への牽制でもあり。今後、起こりうる全ての事柄に対する第一歩。

それが『TSF-TYPE88 彩雲』というイレギュラーの投入による歴史改変。

国産派、輸入派、そしてその枠組を超えて純粹に国益の事を考えることの出来る議員達への根回し。

そこから生じる議会での利害関係の調節、将来的に得られる利益と被る不利益の説明……。

周囲の人間、両親までもが化物を見るかのような注目を浴びるといふリスクを承知の上で、介入を敢行した。

その末に、何とか間一髪で擦り込むことの出来たのが彩雲という名を賜った戦術機。

国産派には次期主力国産機の礎、基礎技術向上の踏み台となる為の



『吉兆』として。

輸入派には米国に対するパイプを広げる為の『吉兆』として。国益を重要視出来る議員達には上記の二つに加え、既に見え隠れしていた大陸派兵……また、最悪を想定した本土防衛の為の戦備増強、その『吉兆』として。

そして、二人には道を切り開く為の『吉兆』として、『彩雲』が歴史の一ページに降臨した。

賽を既に投げている。もはや突き進むしかない。猶予期間を甘受する暇など無いのだ。

「……そいつはご尤もで。んじゃ、早速答えを聞かせてくれ」

「その前に、一つ宜しいでしょうか」

何だ？と視線で先を促す暁。

「貴方は”選べ”、と仰いました……全てを手取ることは、どうしても出来ないのですか？」

縋るように、真央が問う。

どちらも救う道はないのかと。だが。

「無理だろうな……オルタネイティヴ。二者択一、だ。何もかもが手に入る都合のイイ未来があればよかったが……」

暁が苦虫を噛み潰したような表情で、告げる。

慈悲はないと。

無限を超えた先に在る、終幕の御伽話……その題名。  
それが意味する言葉。

二者択一。

世界の根底に蔓延る絶対のルール。  
そういう因果に囚われているのが、BETAに採掘場として選ばれてしまったこの惑星、この世界。

「そう、ですか……そうですね。ええ、解っていました。前世ですら、大なり小なり連続した二者択一を迫られるのが世の常でしたから」

達観、或いは諦観したように眉をひそめて少女が呟いた。  
たっぷり10秒程の沈黙を挟むと再び口を開く。

「……答えを、お伝えします」

「聞こう」

少女はスツと姿勢を正し、少年は自然体のまま互いに向かい合う。  
そして、凜とした声で少女が宣言する。

「私は 抗います」

此処に誓いが一つ。

赤を纏う転生者が、抵抗の意志を翳す。

「エイジ、お誕生日おめでとう！」

満面の笑みでこちらを眺めてくる父と母。

俺は今、両親の祝福を受けながら七歳の誕生日を迎えている。

学校から帰宅し、身体を動かしたまではよかったのだが……。

どうやら張り切りすぎてしまったようで疲弊し尽くし、そのまま布団に潜って爆睡。

起き出す頃には既にささやかな誕生日会の用意が終わっていた。

「ありがとう、父さん、母さん」

微笑を自然に浮かべて感謝の言葉を返すと、テーブルに所狭しと並べられご馳走を眺める。

俺の好物　　所謂、子供っぽい料理ばかりである。

もう少し成長すれば、味覚も変わってくると思うのだが……。  
今はこれが美味しく感じてしまう。

「いただきます」

三人で食事前の挨拶を済ませると、それぞれ料理に箸を伸ばし始める。

団欒が始まる。

やれ学校で何があったとか、やれ近所さんがどうのこうのだからとか、やれ職場の上司が部下が云々だとか。

職場の事なんて子供の前で言うことじゃないと母が嗜めると、エイジは賢いから解ってくれるよな？と俺に振ってくる父。

や、解りますけれども。大変ですよ、役所勤めとか上下関係って何か、すっかり馴染んだなあ……こういう全く子供らしくない会話

「そつえば……本当のほんつとーに、プレゼントはいらなかったのかい？」

「去年は受け取ってくれたけど、引きつった笑顔で来年は本当にいないからって念まで押して」

「あー、うん。ほら、夏の時に我俣言ってお金使わせちゃったし……」

高認の受験料やらその為の資料やら教材やら。

アレは自分にとって凄く有意義な買い物だった。

「それに、自分だけ楽しめる物贈られるのってあんまり好きじゃないんだ。料理とか旅行とかならさ、父さんと母さんも一緒に楽しめるでしょ？」

やっぱり皆で楽しめるモノがあるなら、それが一番いいよな。

俺は美味しい飯が食えて、二人に祝って貰えるならそれでいい。これだけでもう贅沢なんだ。贈る方も贈られる方も楽しむる団欒が出来るのなら、例え特別な贈り物がなくてもそれで充分だ。

「ああ、もう、この子は……今度、職場に連れてって性根の腐り気味な同僚に自慢しようかな……」

「パパ……私、鼻からアガペーが零れ落ちてきたわ……」

「ハッ!? ママ、それは無償の愛じゃなくて鼻血だよ! ティツシュ ティツシュ!」

毎度のことながら、夫婦漫才が冴えてるなあ。母さんが身体張りすぎなような気もするけど。仲睦まじく母の鼻にティツシュを詰める父。シユールな光景だ。

「旅行……旅行、か。エイジ。旅行、行きたいかい?」

「え?」

母の鼻血が止まり、食事が再開されてしばらくすると、父がそう聞いてきた。

先程、例の一つに挙げた旅行。行けるものなら行きたい。出来るのならば、三人で色々な場所を回りたい。

だが両親は多忙の身。

それに、どうしても行きたいという、というほど行きたい訳でもない。

「ん……三人でどこか行けたら嬉しいけど、無理はしなくても」

「それがね、早めに行かないと駄目なの……私達、もう来年の今頃は連休なんて取れそうにないのよ。春から徐々に忙しくなるらしくて……」

母が気味味そうにそう言う。

春、というと……。

「軍人さん達が、行くんだよね」

「そう。よくニュースを見てるね」

父に頭を撫でられる。

くすぐつたい、恥ずかしい……子供扱いはやめてほしいんだけど、無理な相談か……。

諦め、無抵抗でグシャグシャと髪を掻き交ぜられながら思考する。

### 大陸派兵。

陸軍から再編された大陸派遣軍は、各地から最寄の軍港に集結し、そこからユーラシアへと向かう手筈になってる。

「それで、今もよく連絡を取り合う軍人やってる昔の友人達がね……揃いも揃って舞鶴の方から出るらしいんだ」

舞鶴……舞鶴港か。首都京都に存在する、帝国が誇る五大軍港の一つ。

「……京都まで、見送りに行くの？」

「正解。ちよつと遠いから迷ってたんだけどね。エイジの一言で踏ん切りがついたよ。ついでになつちゃけど、皆で二泊三日ぐらい旅行しようか」

「あれ、でも春から忙しくなるんじゃない？」

「それは、見送りが終わって暫く経ってからだね。忙しくなる前に取っておけて事らしいよ」

「……そういうことか。」

ああ……そりゃ、忙しくなるのも無理はない。

兵隊を送ったその足で、難民を担いで帰ってくる訳だ。

帝国から大陸派兵せざるを得ない状況に陥ってる今の大陸に、大量の難民を抱えながらの戦線維持など不可能だろう。

だから派兵した直後から難民を連れて戻り、戦争物資を送るというピストン輸送を繰り返すことになる。

勿論、大陸から最寄の佐世保軍港はそのピストン輸送の重要拠点だ。湾を挟んで隣り合わせな熊本の難民対策局も、働かないといけな  
いって流れか。

難民、ね。

大侵攻で一体どれだけの難民が、九州のキャンプ地から逃げ切れる  
と言つのだろうか。

父さんと母さんがやっていることは……全部無駄になってしまふの  
か……？

「エイジ？どうしたの急に」

「えっ！？あ、ああ、ごめん。ちよつとボーっとしてたみたい」

母に声をかけられて思考の没頭から浮上する。  
いかんいかん、食事中に何をやってるんだ、俺は。

「それでどうする？僕も母さんも今から申請しておけば、その次期に連休は間違いなく取れるけど」

「うん、それは」

どちらでも、いいと思う。

その旅行が大局に影響を与えることなど有り得ない。

俺はただの一国民として、出兵する兵隊達を見送るだけ。

そもそも余計なこと等する気もない。

既に変更ってしまった部分がある。

これ以上俺がおかしなことをすれば 因果導体がこの世界に  
なくなってしまうかもしれない。

オルタネイティヴ？……その足音がこれ以上近づいてくるのは阻止すべきことだ。

俺は、この星から逃げたくない。

故に俺から世界に害を為すことはない。無害でありたいと願う。

だから、どちらでもいい……はずだ。

だけど。

「……ねえ、戦術機って、生で見れたりするかな」

「戦術機かい？そうだね……見れると思うよ。確か、陽炎と彩雲だったかな。あそこから出るのは精鋭揃いで、新型機の割合が多いっ



てあいつらも言っていたなあ」

そうか。

逢えるのか。

F・16J/TSF TYPE-88

彩雲。

生で拝めるのか、あの糞忌々しい凶兆を。

だったら俺の答えは決まってる。

「京都に……行きたい」

ただ一目、歴史を大きく狂わせたその存在を

見てみたい。

それは、義務でも何でも無く、ただそうしたいという欲求だった。

煌武院 悠陽は自室で一人、ただ穏やかに牡丹の花を眺めていた。その表情は慈愛に満ちている。

「まさか、冥夜も同じことを想ってくれていたなんて」

そう呟くと、先程まで行われていた自分の誕生日会を思い起す。幾つもの贈り物が少女の元に舞い込んできた。

ご時世にそぐわない高価なものまで。だが、悠陽が本当に欲しかったものは、豪華な宝物ではなく、今眼の前にある花だった。

悠陽は瞳を閉じる。

そして、この花を己の元へと届けてくれた者の事が脳裏に思い浮かべた。

自分が出席すると空気が悪くなるから、と誕生日会に姿を表さなかった少年。

そういう彼自身が誕生日のはずなのに誰からも祝って貰えていない

のが不思議だ。

齊御司 暁。

誕生日会が終わり、悠陽が自室に戻るのを見計らって侵入してきた神出鬼没な暁。

その手にあったのは丁寧に包装された牡丹と手紙。

初めは約束を反故にされたと思ったが、それは手紙の中身と暁の説明で誤解だと気づいた。

冥夜もお前と同じ事を考えていたようだぞ

からかうような少年の声が、少女の中で再生される。

離れ離れの妹が自分と同じことを考えてくれていた。

悠陽は一瞬、目の前に暁がいるのを忘れて舞い上がってしまった。

ふむ。俺は邪魔者みたいだな。用事は済んだし、お暇させて  
いただくか

そこで漸く、自分が相手に失礼な態度を取ったと気づいた悠陽は、  
退出しようと歩みを進めた暁を引き止めようとした。

その時だった。

暁の纏う空気が豹変した。

あくまで回想にすぎないというのに、今それを思い出している悠陽  
の身体に悪寒が走る。

なあ、悠陽。お前さ

引き止められた暁が、そう言いながら振り向く。

悠陽には向かい合う暁の目が、酷く濁っているように見えた。  
そして。

逃げていって言われたら逃げるか？

そう、悠陽に問い掛けた。

その雰囲気に飲まれ、何一つ言葉を紡げない少女を見ると、暁は破顔してみせる。

聞くまでもないか。お前は逃げないんだろうな。俺がどれだけ逃げると諭しても

まるで諦めたように呟きながら、おやすみ、と一言告げると……襖を閉じて去っていった。

眼を開き、意識を現実に戻させた悠陽は牡丹の花を眺める。

「……冥夜。暁は一体、私に何から逃げて欲しいのでしょうか」

最愛の妹から贈られた牡丹は、何も答えない。

そんなことは理解できている。

だがそれでも、悠陽は吐露したくて堪らなかった。

途轍もなく大きな運命が自分達に迫っていることを、本能で感じ取ってしまったから。

七度目の誕生日が、終幕を迎える。

各々の分岐点となったこの日。

まだ、未来は定まらない。

霧山 霧斗はげんなりしていた。

「そこ行く少年、少し時間を取らせてもらっていいかな？」

研究所から帰宅している途中、唐突に声を掛けてきた露骨に怪しい人物。

怪しそうな帽子を被り、怪しそうなコートを羽織っている。  
もはや存在そのものが怪しかった。

「すみません、見知らぬ怪しい人には付いて行かないようにと厳しく両親に言われているので」

霧斗は怪しい人をバツサリと切り捨て、この場から立ち去ろうとしました。

「……いやはや、話には聞いていたが。子供らしからぬ切り返し。まるで大人と喋っているようだ」

だが、その言葉が霧斗を引き止めた。

話には聞いていたが？目の前の人物は自分について誰から、何かを知らされているということか？

霧斗の中で、彼への警戒レベルが引き上げられていく。

「それと、私は怪しい者ではない　　”微妙”に怪しい者だ」

その言葉を聞いた瞬間、霧斗の脳裏で何かが結びついた。いつかどこかで、この名乗りを聞いたことがあったような気がしたのだ。

「　　貴方は」

「名乗る必要はないよ。私はただのメッセンジャーだからね……仕事についてこれを、とある人物から渡すように頼まれたのだよ」

言葉を遮られ、一つの封筒を手渡される。

真剣味を帯びたその表情と言葉に圧され、なすがままに受け取らされたそれを訝しげに睨む。

そして詳細な説明を要求しようと視線を自称：微妙に怪しい者に向けたとき……既にその姿は消えていた。

「……今の、もしかして　　」

その後、霧斗は急いで帰宅し、自室にて険しい表情でモニターを眺めながらキーボードを叩いていた。

「ふう。お約束に違わず、鍵がかかっている訳だ」

外付けのスピーカーから流れ響くのは、霧斗にとって前世で馴染み深かった拒絶音。

画面にはエラーの文字。古式ゆかしいパスワードロックが、霧斗の前に立ちはだかった。

溜息を吐き、ラップトップPCからデータディスクを取り出すと目の前に掲げる。

「あのコート着た人……鎧衣左近さん、だったよな」

帰宅直前に接触してきた一人の自称：微妙に怪しいメッセージャー。

今頃正体に気づいたのには理由がある。驚愕が大きすぎたというのもあるが、何よりも容姿や声の若々しさが認識を妨げた。

彼の知る鎧衣左近は今から10年も未来の姿、声だ。驚きに飲まれていた思考で即座にその差異を感じ取り、特定の個人へと結びつけるには無理があった。

研究所室長である祖父でもなく、極秘計画の核となる香月夕呼でもなく、世間的にはなんら特筆すべき役職に就いていない、ただ無駄に聡いだけの子供に過ぎない己に接触してくるといふ完全な不意打ちだったということもある。

霧斗には、切り札である『G弾否定論』が未完成であるが故に出回ってすらいなないこの状況で、自分に接触してくるといふ発想すらなかったのだから。

霧斗は考える。



一体誰が、何の目的で、帝国情報省所属の人間まで動かしてこのディスクを譲渡してきたのかと。

「……きな臭いんだよな……直接手渡しにきた癖に、ロックが掛かっ  
つてるときてる……」

呟くと、ディスクが入っていた封筒にヒントになりそうなものが入っていないかと考え、中身をひっくり返し始める。

彼は内心、気が気ではなかった。知的好奇心がどうしようもなく疼いてしまう。

ディスクの中には魑魅魍魎が跋扈しているのではないかと空想してしまうほどに。

一体何が記されているのか。それを突き止めるためにも、切欠を見つけてパスしなくてはならない。

「わざわざ使いまで寄越してきたんだ。流石にノーヒントなんてことは……？」

封筒から小さく折りたたまれた紙切れが零れ落ちる。

ビンゴか？

そう思った霧斗は手を伸ばし拾い上げ、ソレを開いた。

それは、語られなかった他なる結末。

な、

とてもちいさな、とてもおおきな、とてもたいせつ

ぎばなし

あいとゆづきのおと

「

ッ！？」

ガタン、と膝からずり落ちたラップトップPCが音を立てて床へ激突した。

だがそんな些細な事は、自分が勢い良く立ち上がったことにすら気づいてない霧斗には認識の外の出来事でしかなかった。

彼はただひたすらに、三行に渡る文字の羅列を睨みつけている。

額には汗が滲み、目を大きく見開き瞬きすらせず、視線は縫い付けられたかのように微動だにしない。

驚愕は当然だった。

彼はこの瞬間、この世界で自分しか知らないはずのフレーズを、目の前に叩き付けられたのだから。

数秒の後、理性を取り戻した霧斗の行動は迅速だった。

深呼吸すると頬を両手で強く叩き、ずり落ちたラップトップPCを再び膝に乗せ、データディスクをインサートする。

そして一つの物語、その題名を叩き込んだ。

『 m u v - l u v 』

エラーは吐き出されない。画面が切り替わる。

霧斗はデータディスクの閲覧権を、意図も簡単に手に入れていた。

「……茶番だ　　ッ！」

フレーズが書き綴られた紙を裂き、握り潰し、無茶苦茶に丸め、

ゴミ箱へかなぐり捨てる。

それは紛う事無き茶番だった。底の浅い芝居に付き合わされた、霧斗は憤慨する。

パスワードも、それを連想させるヒントも……彼、霧山 霧斗という極めて異常なその存在を理解出来ていないと意味を成さないモノだった。

つまり、これの差出人はこう言いたかったのだ。

『私は君と同類であり、また君の全てを知り、そして 君よりも上の立場である』と。

「……歴史は勝手に捻じ曲がったんじゃない。明確な意志によって捻じ曲げられたんだ……」

霧斗の中で今まで『If』だと思っていた……『If』だと思い込んでいた事象群が頭の中で繋がり、結合していく。

そして彼は確信した。

到底信じられることではないが、いる。

信じる信じないではなく、現実に『在る』。

『自分』以外に、『自分と同じようなヤツ』が。

目下最大の『不安要素』が、帝国の上の方に食い込むように存在している。

そして それに気付くのが遅すぎたのだ、と。

余裕綽々と向こうから接触し、そして塩を送ってくる程にはインシアチブを握られていた。

疑いようなない事実として、変化を望み、そして実行に移した人

間がいるのだ。

それも相当手強い地位に。

「……ッ……けど、一先ずそれは置いておこう……先ずはディスクの中身からだ」

霧斗は思考を切り替え、送られてきた情報に目を通すことにした。一体どのような情報が綴られているのか。『主犯』について考えるのは、それからでも遅くはないと霧斗は考えた。

しかし。

「……これは」

データディスクの中に詰まっていたのは18人の個人情報と、とある港の地図。それだけだった。

だが、その情報量は膨大だ。

個人情報の方はもはや報告書と読んで差し支えないレベルで所々に注釈がなされている。

「僕の名前もあるな。画像まで完備か……全く、何時の間に……ッ？載ってるのは子供ばかり？」

そこには、あどけない少年少女の画像が連なっていた。

個人差はあれど全員が小学校上がりたてとしか思えない程幼い。

しかしどこか知性的な印象を孕んだ写真が大半だった。子供特有の無邪気で天真爛漫な様子が見えない。

違和感を覚えながらも、霧斗はリストアップされた18人の個人情報を読み取っていく。

「……なっ」

何かに気づくと、机の引き出しから一枚の紙を取り出す。

そこには、霧斗が研究室への出入りを何とか認めてもらう代わりに、室長である祖父から要求された資格があった。

本来ならばその資格を所持していたところで到底足りるものではない。

親の七光りを頼った。誠意を見せる為に他の研究者達への無償奉仕すら約束した。

そこまでやって漸く、非公式の入室を許可されたのだ。

……その始まりの証が彼の持つ、高等学校卒業程度認定試験の合格通知書。

リストに載っている人物全員が、これに受かっていた。

「……在り得るのか、こんなことが……」

高認自体の合格率というのは、そこまで現実離れして低い数値ではない。

受験者全体から見れば、合格者もそこそこにいる。

だが、リストに掲載されている18人　その全てが、受験年齢の下限ギリギリの6歳というのはどういうことか。

霧斗は戦慄しながらも18人の生年月日を間違えることのないよう、しっかりと再確認していく。

「……僕の誕生日は、1983年12月16日」

そしてそれは、18人全員に共通する点だった。

リストに載っている人物全員が霧斗と同じ日に生まれ落ち、最低年齢で高認を受験し、これを突破していた。

「……なるほど。二人目がいるなら、それ以上増えてもおかしくない、か……」

霧斗は、この期に及んで自分を除く彼ら17人が、ただの『偶然同じ日に生まれ落ちた常軌を逸している天才達』であるという考えは醜いと判断し、破棄した。

偶然は重複しすぎると必然となる。彼らは全員、自分と同じ存在だと考えるほうが自然なことだった。

何とも不自然極まりないことだが、と思わず霧斗は苦笑してしまふ。

「18人＋……少なくとも、後一人は間違いなくいる。リストアップされた面子は平凡な家庭の生まればかりだ……鎧衣さんのような人を動かせるような影響力は持ち得ない」

家柄や家族構成等の情報から全員が白と判断すると、今後どれだけ増えるかな、と参ったように呟く。

国内だけでこれなのだ。調査漏れもあるかもしれない。海外については……もはや考えたくもない、といった表情を霧斗は浮かべた。少なくともこの18人は自分が申し上がる為、高認資格の存在を逸早く察知し、行動し、掴み取った。この世界で言うところの『より良い未来の選択』とやらを出来た人間ということになるのだろうか。

「……全く、誕生日も意味深じゃないか。全員が白銀。武と同じ日に生まれたなんて……」

霧斗は自分の生まれた立場、そして己の誕生日が『白銀。武』の誕生日と一致していると気付いた時。ある種の覚悟をした。

知らぬ間にお伽噺の舞台に放り込まれ、否が応でも行動を起こさ

なければいけないという状況に陥っていた。

そして、それに追い打ちをかけるような運命的すぎる生い立ち。

物語の中心人物と全く同じ瞬間に生まれ落ちたこの身、この存在。

ただ時が経っただけで、魔女　香月夕呼と何の障害もなく接触が可能であるという都合のいい『霧山 霧斗』という器。

そう……個人の意志を超越した次元で、戦う条件も、戦う理由も、初めから整えられていた。

だから、きつとこれから自分一人で……たった一人で、何とか大団円を迎えるために戦わなければいけないのだろう。

そう思った。

だがまさに今この瞬間、想定以上に荒唐無稽な難事に巻き込まれていることに気づいてしまった。

霧斗はリストアップされている面子の全員が思い思い好き勝手に動き回る状況を想像し、頭を抱えこんだ。

彼ら全員に自分と同じく未来知識があると仮定すると、個々で勝手に動き出すのでは、という想定は強ち外れてはいなかった。

だが。

「リストに載っている彼らも、そして僕も……早々に封殺される形になった」

霧斗は自分が嫌な汗をかいているのを初めて自覚した。

……とんでもない人物が一人、存在していた。

共通点から考えれば、御多分に漏れず同い年だろう、と霧斗は想定する。

そう、今の時点で”まだ”7歳なのだ。

「どんな魔法を使った？何をしたんだ？一体、何をどうすれば



「

T S F - T Y P E 8 8 / F - 1 6 J 彩雲なんてイレギュ

ラーを帝国に導くことが出来るのか。

何時から行動に出ていたのか。

どうやって周りの権力を持つ者達に、短期間で幼い己を認めさせたのか。

そして今現在、どれほどの力を持ち、どのような立場に在るのか。悪い方にはかり思考が傾いていく。

「……最悪の状況も考慮すべきか」

霧斗の言う最悪。

それは即ち、件の人物が目指す未来と、正史である未来との絶望的なまでの乖離。

既に敷かれているレールを壊すことを前提とし、歴史の針を進めようとしている可能性。

未来を変えろということに何ら恐れを抱かない強者か、或いは…狂者か。

そんな得体の知れない人物に、霧斗は目をつけられている。

思考の傍ら個人情報とは別のもう一つのデータに、霧斗は目を奪われていた。

港の地図。それは首都に置かれる舞鶴港のものだった。

軍港区画の、それも一般人は立ち入りを禁止されている場所まで詳細に描かれ、先程の個人情報と同等の詳細さで注釈がなされている。

警備員の配置や、監視カメラの位置と範囲、そしてそれらを掻い

潜るように指定された進行ルート。

そのルートの終点に示されていたのは。

「僕との接触を、望んでいる？」

”大陸派兵の日、一〇〇〇、集合”

それは、余りにも一方的な『密会』の命令だった。

1991, spring, oneday

「……すげえ人集りだ」

港。

様々な人が集う、陸と海の玄関口。

ここ舞鶴港もまた、多くの群衆により賑わいを見せていた。

いや、賑わっているというのは語弊があったか。

確かに人が集ってはいるが、どこか重苦しい雰囲気か漂っていた。

……それも当然か

今日は、大陸派兵の日。

帝国の誇る軍人達が、地獄と化した大陸へと赴く。

其の命を賭して、BETAの侵攻を食い止めるために。

もしかすると、これが今生の別れになるかもしれない。

送り出す側も送り出される側も、その予感があるのだろう。

だから、約束の言葉を交わす。

行つてきますと、行つてらっしゃいと。

ただいまを言うために、お帰りなさいを言うために。

彼らは約束を交わす。少しでもその軽い命を重くするために。

「……………」

俺、不破 衛士は群衆とは離れた場所からただ一人、その崇高な儀式にも似た遣り取りを無言で眺めていた。

彼らは他人で、俺は見送る側ですらない。

俺は、ただ両親の都合を自分の目的で利用して引っ付いてきた部外者。

だからだろうか。自分はおそこに混ざってはいけないと、そう思っってしまった。

しかし見ているだけでも、胸に込み上げてくるものは確かにある。自分が異常な存在であることは自覚しているが、それでもまだ何とか……人間らしい感情はあるみたいだ。

今はそれが解っただけで良しとしよう。

「行くか」

見送る家族と、大陸へと向かう兵士達から目を逸らし、周りを見渡す。

そもそも俺が今ここに居るのは、例のイレギュラーな戦術機を見に来たのだ。

F-16J、『彩雲』。コイツはまだ九州の方面には配備されていない。

最寄りの基地の見学に行ったときに確認したから間違いない。

それもそうだ、と思う。優先順位の問題だった。

最新鋭機は最も戦場に近い場所に送られる　つまり、大陸派兵の為に集められるのだ。

だから、首都に置かれる港から出航する大陸派兵軍の本体……今日、この場所に多数配備されている。

わざわざ首都くんだりまで来たのだ。

出来れば『彩雲』が動いている所を見ることが出来ればと思っていたのだが。

「……ぼ、母艦に積込みが完了してる……!?!?」

視界に飛び込んできたのは、多数の戦術機母艦から頭だけはみ出した状態の『彩雲』の頭だった。

確かに現実には、彩雲は存在している。俺はそれを肉眼で確認した。……こうして、俺の今回の旅行の目的は完了してしまった。

「いや、待て、ちょっと待ってくれ……な、何だこの不完全燃焼……」

ならば、もうこの際、陽炎でもいいんだ。

とにかく動いている第二世代戦術機を眼にしないと帰るに帰れない。

動いてる撃震は九州に帰っても見ることは出来る。

だから遠巻きでもいい、どこかに動いている二世世代戦術機は。

そこまで考えて戦術機がいそうな場所を探そうとした時、物凄い勢いで背後から何かがぶち当たって来た。

「　　　つッ!?!」

余りにも突然の衝撃によるめいて尻餅をついてしまう俺。

「つ、失敬。大丈夫かい？　ごめんね、今ちょっと急いでい……」

ぶつかって来たのは俺と同じぐらいの少年だった。

後ろで無造作に束ねられたボサボサの茶髪を揺らし、謝罪しながら転んだ俺に手を差し伸べてくる。

「いや、こちらこそ悪かった。道を塞いでたみたいで　　？」

謝罪を返し、手を握った俺の眼をじつと見つめてくる少年。  
その気怠そうな瞳の奥で、何かが揺らいた。

「何だ、僕の他にも呼ばれていたのか。警戒しすぎだったみたいだね……他の連中にも連絡を取って示し合わせて来るべきだったか……で、君はこんな所で何してるんだい？そろそろ時間だ、急ごう」

えっ。

誰だ、この人。

何故そんな、当たり前のように気さくに話しかけてくる。

「……えっと、すみません。どちら様でしょうか？俺には見覚えがないのですが……」

とりあえず当たり障りない言葉を選び、お前誰だよ人違いじゃね？と言ってみる。

きつと友達か兄弟と間違えてるんだろう。そくに違いない。

俺は人の顔と名前を覚えるのは割と得意なほうだ。今眼の前にいる少年は間違いなく初対面。

こんな口達者なガキが知り合いなら忘れようはずもない。

故に、フレンドリーに急ごう、と言われてはいそうですか、と返すわけにもいかなかった。

「……慎重だね、不破 衛士。好感が持てる。だけど大丈夫だ。僕は君と同じだよ」

正直、反応に困った。

初対面にも関わらず、知ってる訳もない名前を的中させられた。

これによって目の前の少年に対する警戒レベルが跳ね上がる。しかし、その一方で彼の余りの電波ぶりには目眩すら覚える。違うベクトルでヤバい存在だった。警戒レベルが揺れに揺れる。タダのキ　ガイなのか、それとも、どこぞの重役の子で俺のことを何がしかの形で知っていた？ 解らない。情報が少なすぎる。

「……ああ、確かに俺は不破　衛士って名前だ。だけど、悪い。君には本当に見覚えがないんだ」

「……礼を欠いたね。不躰だった。僕の名前は、霧山　霧斗だ。どうだい、これでイーブンだろ？」

「ただ、まだ目の前の人物は勘違いをしている。コチラが彼のことを知っているのを前提とした会話だ、これは。いきなり名前を的中させられて、警戒して見知らぬ振りをした訳じゃない。」

本当に、コチラには面識がないんだ。

どう対応すればいいんだ、この子。

「……っとお、こんなことしてる場合じゃない。集合時間に遅れてしまっ。ほら、早く立って」

「ちょ、おまー！」

少年　霧山　霧斗は俺の手を引いて立たせると、そのまま俺を連れて走り出した。

向かう先は　軍港区の一般人立ち入り禁止区域。

「お、おい！ちょっとまで馬鹿！それから先は一般人立ち入り禁止だ！！」

全力で踏ん張って引きとめようとする俺。

「は？」

「は？って……ちょっと……もうやだこの子。命を掛けたスパイごっこに興じる趣味は俺にはない、一人でやってくれ」

「いや……ほら、地図にはこっちって書いてるじゃないか……あまり僕を困らせないでくれ」

くおおおおお！

困ってんのはこっちだ！！

誰か通訳してくれ！

俺がコミュ障なのか、コイツがコミュ障なのか、それとも実はどちらもコミュ障なのか、それすら解らなくなってきた。

地図って何だ！？

ていうか、お前誰だ！？

「大丈夫だよ、いきなり撃たれる訳ないだろう？向こうさんは、僕らと話し合いをしたくて接触してきたんだから」

「そ、そういうことじゃなくてだな……あーもう……」

っ、疲れる……ッ。

この身体になって今まで、これほどまでに精神的に疲れたことがあっただろうか。



もういつそ、俺も電波をまき散らしてノツてみるか？

確かにガキを見つけていきなり射殺はないだろうしな……。

それぐらいの分別も余裕も、警備兵の人達にあるだろう……まだ日本は平和だしな。

ちよつと説教くらって開放区画まで連れ戻される程度だろう。

……少し、乗るか。

「そうだな。うん、話し合い、な……で、霧山だっけ。この先には誰が待つてるんだ……？」

「僕にも解らないよ」

……わけがわからないよ。

コイツは誰と戦って……いや、誰と待ち合わせしてるんだよ。

というか……気付けばもう、一般人立ち入り禁止区域へと踏み入ってる。

今ならまだ引き返せるが、あと何分か歩いたらヤバい所まで進んでしまうんじゃないのか？

しかし……何だ？違和感がある。

警備兵が、見当たらない？

「君は誰が待つていると思う？」

……くっ！考え事してる間に厳しい電波が飛んできやがった！

誰？誰ときたか？ か、考える、俺。ここから先は軍港区画、その先に待ち人。

「そ、そりゃー……お前……ぐ、軍の関係者以外にありえないだろ？この先は大陸派兵の今日でも一般開放されなくらいにはセキユリティが高いんだから」

ここは無難な選択で回答する。  
ガキのスパイごっこにしては使ってる単語が高度すぎる気がするが。

「……そうだね、僕も軍の関係者だと睨んでる。けど、それだけじゃ足りないんだ。僕らと同じ年というハンデがあるのに鎧衣さんと面識を持ち、『彩雲』なんてイレギュラーを帝国にもたらすに至った存在だからね」

待て。何を言っている。鎧衣だと？ 彩雲が……”イレギュラー”……？

「だから、僕は斯衛の上の方だと睨んでるよ。幾ら何でも個人がどうこう動いたところで正史に存在しなかった戦術機を誘致するのはやり過ぎだ。けどの幾度の口利きがあれば、不可能という訳でもないだろう。しかし、それだって横の繋がりと、例え飾りであったとしても相応の地位が必要になる」

ちよつと待て。コイツは。

「だから必然的に高い地位に都合よく転生した人間が動いてるんだと、僕は思う。割とイイ線行ってると思うんだけど 君はどう思うかな？」

……お前は、何だ？

「不破君？」

俺が間違ってたんじゃないか。コイツは電波なんかじゃなく。

そして、気が狂ってるわけでもない。霧山 霧斗は至って正常なんじゃないか？

コイツが狂っているというのなら……俺もきつと狂っている。

ただ俺の情報量が少ないせいで話に付いて行けていないだけで…。

だったら。

「すまん、霧山……今更なこと聞くけど、いいか？」

通告し、ワン・クッション置く。

これでスべれば、俺が馬鹿みたいに深読みしすぎだったというだけで終わる馬鹿話だ。

後はここからダツシュで一般解放区域まで逃げ戻ればいい。けど。。。

「……？ どうぞ」

これを肯定されれば。。。

「お前……転生者か？」

俺は、この奥に行かなければならぬだろう。

「初めに安心してくれと言っただろう。僕は君と同じ転生者だよ」

肯定。

何の迷いも振れもなく、霧山 霧斗はコチラの言葉を肯定した。  
その瞳には理性が色濃く反映されている。

本気だ。少なくとも彼の中では、それが確固たる事実として認識  
されている。

嘘だろ……俺と同じ存在が……他にも、いる？

なら……コイツが向かおうとしている先に待つのは 。

「……こんなところで、何をしているのですか？約束の時間は既に  
過ぎていきます」

肯定の返事を聞いた俺に動揺が走った、正にその次の瞬間だった。

建物の影から、子供用に繕った紅の斯衛服を纏う可憐な少女が姿を現し、霧山に苦言を申し立てた。

「霧山 霧斗……どうやら貴方は時間にルーズな人間のようなだ。鎧衣様から港に入ったと耳にしたので安心して待機していれば……まさか探しに行くことになるとは思いませんでしたよ」

彼女から俺は見えていない。

間に立つ霧山の影に隠れる形になっていた。

「申し訳ない。迷子を見かけたので一緒に連れて行こうと思ったら中々強情だね。こんな時間になってしまったんだよ」

少女に振り返りながら返答し、身体を横にずらす霧山。

「迷、子？ 貴方は……っ!？」

俺と視線が重なり、少女の顔に驚愕の相が浮かぶ。

「 何故、ここに居るのです。不破 衛士」

「 ただ……また、俺の知らない人間から当たり前のように名前を呼ばれた。」

「 この斯衛の紅の少女が、待ち人か？」

「 何故って……彼も僕と同じく呼び出されたんじゃないのかい？」

俺が口を出す前に、霧山が疑問を投げかける。  
有り難い……こっちは今、とんでもなく混乱してる。

「……いいえ、呼んでいません。我々は霧山 霧斗 貴方”だけ”と接触するはずでしたから」

そう言つて霧山と俺を交互に見ると、溜息を付いた。  
霧山はしばらく呆然としていて、こちらへ振り返る。  
紅い少女と同じく、その目には驚愕を宿していた。

「……つまり君は……『偶然』あそこにおいて、『偶然』僕とぶつかつて、『偶然』勘違いした僕に無理やりここまで連れて来られた、と。そういうことになるのかな」

その間に、俺は緊張で引きつらせた笑顔で答える。

「……どうやら、そういう事になるみたいだな……不破 衛士だ。あらためて宜しく」

その後、「お二人を集合場所までお連れします」、と少女が宣言し、先導し始めた。

俺達はそれから一言も言葉を交わすことなく、立ち入り禁止区域の更に奥へと進んでいる。

その間に俺も何とか落ち着きを取り戻してきていた。

この状況も……信じられないが、信じるしか無いだろう。

信じるに値するワードは既に耳にしまっている。

……だから今は少しでも情報を集めたいところだ。

先程から何か言いたそうな表情でチラチラ見てくる霧山の服を引っ張り、歩幅を緩めて先行する少女から距離を取る。

「なあ、霧山。少しいいか」

前に行く少女に聞こえないよう、小声で話しかける。

「……不破君、すまなかった。巻き込む形になってしまった……あらためて自己紹介するよ。僕は霧山 霧斗」

「謝罪はいいさ、むしろ感謝してるぐらいだ。蚊帳の外になるよりはよっぽどいい。それより、俺には事前情報が一切ないんだ。少しでも現状を把握したい。解る範囲で簡潔に説明してもらえるか」

自分なりに折り合いをつけながらここまで付いてきたが……。

結局のところ、今俺が何とか理解できているのは、俺と霧山と、それともしかしたら先に行く少女が……複数存在するらしい転生者の一人だなんていう荒唐無稽なことだけだ。

今は藁にでも縋りたい。

まだ霧山のひととなりは把握しきれしていないが、立場的には少なからず俺と同じ”被害者”であることは間違いないだろう。

今はコイツを善玉だと仮定して歩み寄るしかない。

「……順応性が高くて助かる。まず僕らみたいな存在だけど……僕君、先行する彼女、彼女が言った『我々』の最小数である1、そして彼女らからリークされた情報にあったその他16人……最低で、20人いるみたいだ」

「最低で、20人、だって?……いや、いい。続けてくれるか」

……俺達みたいな存在が、二桁の大台に乗ってる……?

確かに二人目が存在するなら、それ以上増えてきても……おかしくはない、のか?

どちらにしる、ゾツとする。この世界はどうなってるんだ。

霧山が俺のことを知っていたのはそのリークされたとかいう情報のおかげか。

顔と名前がバレていた……なら、プライバシーの保護は完全無視で丸裸にされたと思っておいたほうが気が楽だろう。

「最低で、って言ったのは調査される側に条件付けがされてるみたいなんだ。だから調査漏れもあるかもしれない」

「条件?」

「第一条件、生年月日……君が生まれた日を、8桁で言ってみてくれないか」

「1983 12 16、だな」

「僕もだよ」



「……………なっ」

「君も僕も、情報にあつた他の16人も……………恐らく先導してくれている彼女も、これから逢う人物も。同じ年、同じ月、同じ日に生まれ落ちてる……………そう、白銀 武と同じ瞬間に」

偶然、で片付けていい一致じゃない、か。

俺も奇跡的な一致だと思つてはいたが……………その他の連中も、だと？

「続けるよ。第二条件、高認……………君も合格しただろう。この資格、早期の人材発掘と低年齢における高等教育を受ける権利の授与を、なんていう名目で無茶苦茶な改革の後に実施されたらしいんだけど、要は大規模な釣りだったんだ。実験も兼ねてたらしい。転生者は世界の揺れ動きとチャンスに敏感かどうかっていうね 見事に相当な数が釣り上げられた訳だけど」

「……………それで、生年月日と合格者から俺達が炙り出された訳か」

完全に掌の上じゃないか……………。

確かに、伸し上がるチャンスだと思つて迷わず食いついたが……………。

「……………他には？」

「後は、僕が何かのお眼鏡にかなつて彼らに単身、呼び出されたこと。そして……………君が『偶然』あの場所で僕に出会い、ここまで連れて来られているって事。それぐらいかな、今のところ間違つてなさそうな情報は」

なるほど、思うところはまだあるみたいだが、それは推測にすぎ

ないから不確かな情報は渡せない……つてところか。

「じゃあ今度は質問だ。お前の姓なんだが、もしかしくなくても香月夕呼が世話になったっていう、帝大の量子物理学研究所の……」

霧山。

確か、そんな姓の教授がいたはずだ。

「ご名答。僕はその研究所の教授兼室長の孫だよ。割とマイナーな名前なんだけど……正史の知識に精通してるようで何よりだ」

「いや、たまたま覚えてただけだ……そういうお前はどうなんだよ」

「……現状がヤバいってことが理解出来る程度には、あると思ってるけどね」

「 T S F - T Y P E 8 8 / F - 1 6 J 彩雲、か」

I f だと思っていた。勝手にそう思い込んでいた。

だがそれは決してI f などではなく……有り得ないはずのアウトサイダーが何らかの目的で故意に引き寄せた、この世界の歪みの象徴となった戦術機。

「少なからず帝国の戦力は増強されたと思っただけ……もしかすると、最悪B E T A の日本上陸が後ろにずれ込んでくるかもしれない」

そう、それが問題なのだ。

コレから俺達が逢おうとしている存在が、初めからそれを目的として彩雲を帝国に呼び寄せたというのなら……。

「なあ、やっぱりお前を呼び出したヤツの目的は」

「すまない……今は、それ以上は言わないでくれないか……大丈夫、それも想定してる。後は……逢って確かめるだけだ」

青い顔をして胃のあたりを抑えながら霧山が呟いた。

お互い、まだガキの身分なのに早くも胃痛の種に苛まれてるなんてな。

……言っな、と言われたなら仕方ない。

その時まで自分の胸の中に閉まっておこう。

「お喋りはそれまでに……コチラです」

どうやら、目的地に到着したようだ。この徒広い格納庫が集合場所らしい。

中は照明が点いておらず、開け放たれた正面門から差し込む僅かな日光だけが唯一の光源となっていた。

「……アレは」

目に映るのは暗がりの中、巨大なトラック……いや、87式自走整備支援担架の前に佇む人影。

俺たちを先導する少女はその人影へと迷わず歩を進め、俺と霧山もそれに続く。

暗闇にも目が慣れ始め、距離も近づき、その人影の輪郭がゆっくりと浮かび上がってくる。

「申し訳ありません。お待たせしました」

「是非もない。マレビトは想定外だったからな。お前が探しに行っ

「その後、入れ違いで鎧衣さんから情報が入ってきた」

少女の報告に、振り返りながらそう答える人影。

マレビト……俺のことか。

芝居がかった口調が、嫌に鼻につく。

コイツが、霧山を誘き寄せ、彩雲を招き入れる元凶となった。

「お初にお目にかかる。齊御司 暁だ」

そして、遂に輪郭をはっきりと捉える。

青の斯衛服を纏った少年は 自らを齊御司 暁と名乗った。

その姓、その衣装……正しく五撰家に名を連ねる者ということを証明するに他ならない。

「月詠。お前も自己紹介がまだなんじゃないのか？」

「ハッ」

待て。月詠、だと？

じゃあコイツは 。

「初めまして……ではありませんね。申し遅れました、月詠 真央と申します。以後、お見知りおきを」

正史における月詠真那、月詠真耶と同じ『月詠』の家系の者だつていうのか……？

「……やはり、斯衛の青が出てくるか」

「聡明だな、と褒めるべきか。流石はその年で非公式ながら、あの研究所に踏み入っていることはある」

霧山が険しい表情を見せながら、予測が的中していたことを嘆く。だが、それを嬉しそうな顔で言葉を返す斉御司。

その余裕さ、そして彼我の持つ情報の圧倒的な格差にギシリと歯を鳴らし、霧山の顔が更に歪む。

「悔しいけど、コチラの自己紹介は一切不要のようだね……  
なら、早く要件に入ってもらえないか」

「此方としてはそれも吝かではない。しかし、巻き込む形になってしまった不破 衛士には説明を聞く権利があると思うが」

「……いや、経緯は道すがら耳にした。要件に入ってもらって構わない」

コチラに視線を向けながらそう提案してくる斉御司に、俺はそう返す。

確かにまだ色々情報が抜けてはいるが、自分の中ではもう折り合い済みで、対応できているつもりだ。

其れよりも何よりも、とっとと要件を述べろという霧山の気持ち  
がコチラにまで伝わってきた。

その意見には、俺も同調できる。

「それは有り難い、手間が省けた……では、単刀直入に」

そして。

「俺達と協力して 武と純夏を救わないか」

目の前の転生者は、そんなことを宣いやがった。

第九話      Encounter      中編

薄暗い格納庫に四つの子供の人影が伸びる。

背後の正面扉から差し込む僅かな光が、目の前に立つ紅と蒼の斯衛服を照らす。

齊御司    暁、月詠    真央。

一連の歴史改変……その元凶。

俺      不破    衛士は、そんな二人と向き合っている。

真横に並び立つ少年、霧山    霧斗と共に。

自分は招かれざる客で。

俺を除く三人もまた、異物である来訪者で。

そして……斯衛の二人は、世界の歪みの元凶で。

そういった余りにも規格外すぎる連中が、この場所に集っている。

御伽話が始まる前の……この瞬間に。

「俺達と協力して

武と純夏を救わないか」

「なッ

……」

齊御司が、力強くそう言い切った。

救う。

死にゆく運命の、少年と少女を。

その身を引き裂かれ、この星の未来の礎となることを否応無く決定づけられている二人を。

あの日憧れ、またその存在の消滅を嘆いたヒーローとヒロインを救済する。

彼の発した誘いの言葉が、残酷なほど甘美な響きに聞こえた。

差し伸べられた手を取り、ただ只管に武と純夏の救済に奔走する。そうすれば、転生などという荒唐無稽な過程を経てまでこの世界に、あの瞬間に再びの生を受けた異端極まりない自分の存在が……全肯定されるような気がした。

その手に縋りたい。一瞬、そう思ってしまった。



だが、理性がその判断を迅速に否定した。  
二人を……白銀 武と鑑 純夏を助ける。  
それは。

「悪いけど、断らせてもらおうよ」

意識が思考の海に沈み始めていた俺は、霧山の強い意志を持って返した拒絶の言葉に反応し、ゆっくりと現実へ引き戻される。

「理由を聞かせて頂いても、宜しいでしょうか」

「……………」

一步こちらに進み出た月詠が、拒絶の意を示した霧山に理由を問い質した。

その質疑を黙殺し、霧山が怒気を混じえて口を開き始める。

「……………質問に質問で返す無礼を承知で言わせてもらおうけどね……………君達こそ一体どういうつもりだ。武と純夏を救う……………それはつまり、オルタネイティヴ4の妨害を意味している事になる」

霧山の放った言葉と、つい先程まで俺の考えていたことは同じだ。

彼らの発言は、オルタネイティヴ4の妨害宣言に他ならない。

人道的だ、清廉潔白な正義だといった側からの観点を省き、ただオルタネイティヴ4の完遂という大義を行うに際して、その二人の犠牲は必要不可欠なのだ。

因果導体である”白銀 武”をこの世界に導き、数式を回収し、因果流入を発現させ、00ユニットを完成させる。

この一連の流れ全てに、この世界の武と純夏の『死』は密接に関係してくる。

故に、彼らの思惑は限定される。

俺や霧山には想像すら出来ないような、大団円を可能とする切り札があるか。

或いは。

「それとも……君達は初めから、オルタネイティヴ5の完遂を念頭に置いていたのかい？」

彼らが、地球の放棄を前提として行動しているかだ。

空気が張り詰めていくのを、肌で感じ取る事が出来る。

オルタネイティヴ4に同調し尤も近い場所に立っている者と、オルタネイティヴ4に牙を剥かんとする者達。

……霧山は最早、彼らと手を組むということは考えていないだろ

う。

これからどのような弁明が行われようと、だ。事実、既に『断る』とはっきり協力を拒んでいる……向こうの口上を聞く以前の段階でだ。

考えなしの拒絶ではないだろう。

状況を覆し、『大団円』を可能とするような切り札など、彼等にはない、と。

霧山は恐らく……いや、間違いなくそう踏んでいる。

大陸派兵の今日、この場所に誘き出される段階で、彼の中では此度の一連の流れと答えは出ていたのかもしれない。

「……俺達は武と純夏を救う。例えその過程に、君が望む形である第四計画に対する妨害があるとしても。全て承知の上で決めたことだ」

「ッ」

やはり……か。

だが何故だ。何故そんな簡単に まさか。

もしかして彼等はThe day after の情報を持っていない？

だから、00ユニットが無くとも『XM3』でもばら蒔いておけばG弾で押し切れると、そんな楽観視が出来るんじゃないか？

視線だけで霧山の方を見ると、彼も横目で此方を見ていた。

目と目が逢う。眉間にシワの寄った余裕のない霧山の表情を見るに、俺と同じくその可能性に辿り着いたのだろうか。

俺がここで流れを切って出しゃばる理由もない。霧山に後に続く言葉を任せる。

「……言っておくよ。例え『X M 3』が世界中に行き渡ったと仮定しても……バビロン作戦の先に未来はない。君の二人を救うという言葉……G弾の大量投下による結末を知った上でのモノなのかい？」

「ああ、知っているとも。ユーラシアの完全海没も、塩の大陸も、想像を絶する異常気象も……地球は地獄になるだろうな」

「ば……ッ」

馬鹿な。

知っているのか。無限の先、その後日譚。

アレに描かれていた激変した世界を知って尚、承知の上だと言いつ張るのか。

駄目だ。

彼等は全て解った上で、事を起こしている。

どのような結果が待っているか……それを理解した上で、これまでの介入を行って来ているのだ。

説き伏せ止める事は、出来ない。

「……成程。良しとすると。そういう未来へと行き着く可能性すらも良しとすると……そう言いたい訳だ」

「元より、その未来へと至る可能性はこの世界に内包されていたものだ。二人を救った先に、その未来に直面してしまうというのならば……致し方ない」

齊御司が霧山の間に、全ては理解の上での行いだと淡々と返す。  
霧山はその言葉を受け、覚悟を決めたような表情で地面へと視線を落とし、呟いた。

ここに、彼ら是对立した。

「……全く。そこまではつきり言われると罵る気にもならないよ。もとより、武と純夏の犠牲を前提としたオルタネイティヴ4を積極的に支持する僕に、君達を罵る権利が在るとも思っていないけどね……」

霧山の自嘲を含んだ思いの吐露に、俺は胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

彼の言うとおりだ。結局、オルタネイティヴ4もオルタネイティヴ5も、何かを切り捨て何かを手に入れる計画なのだ。

違いがあるとすれば、一体何を、どれほど切り捨て、何を拾い上げる事が出来るか……その項目に差異が在るだけ。

自分が心より求めるモノが手に入るのは、どちらか。  
突き詰めれば、個人がどちらかを支持する理由はその一点に集約される。

そして霧山は第四を、齊御司と月詠は第五を各々の価値観から選んだ。

俺も、この場で選ばないといけないのだろうか。

今この瞬間、目の前で出来上がった対立構造。

二者択一、二律背反である二つの派閥。

第四計画か、第五計画か　そのどちらか一方を。

……一つの方法として、優勢な側に付くという小狡いやり方もある。

そう言った所謂、日和見的に見れば　。

現状において霧山は不利だろう。流れは完全に斉御司達にある。

彼等はその無謀とも取れる行動力によって、既に正史では有り得ない帝国の戦力増強を確立させてしまっている。

大侵攻において、帝国が稼ぐことの出来る時間は増大し、其れに伴ってBETAの進撃は阻害されるだろう。

このアドバンテージ……もはや覆す事の出来ない絶対的な差となっているのではないか？

BETAは武と純夏に辿り着かず、故に二人は生き延び、第四計画は前提要素を欠き、失墜する。

この流れが、既に出来上がってしまったのではないか。

霧山は、ここからどう挽回する……？

「さて、どうする。このまま、君が些か不利な状況のまま対立するか。それとも、先の言葉を撤回して俺達と一緒に来るか」

「……確かに、それもいいかもね……早くも敗色濃厚だ。君達が真つ当な国防をすればするほどに、国土の半分と多数の人命を犠牲にすることによって成立する第四計画は不利となり……そして真つ当な国防を君達がやっているが故に、僕はその計画に対する満足な妨害行動を起こせない」

「霧山……ッ」

……認めた。

オルタネイティヴ4が封殺されているという状況を。

最善の未来を知り、オルタネイティヴ4に尤も近い場所に在る転生者が、認めてしまった。

そう。”真つ当”なのだ。齊御司と月詠がやっていることは。

迫り来る驚異に備え、軍備を整える。彼等がやっていることは、至極真つ当な『国防』なのだ。

批判すべき場所なんて、本来一つ足りとも無い。

ああ。未来の顛末さえ……これから先起こる世界の命運を掛けた二つの極秘計画の結末さえ知らなければ、だが。

彼等がやっていることを批判する。

その行為は、未来知識のない人間からすれば『真つ当な国防』の妨げに他ならない。

霧山が……既にオルタネイティヴ4に触れてしまっている人間が、そのような下手を打てば国家反逆罪で第四計画まで煽りを受けかねない。

だから彼は、齊御司達の『真つ当な国防による第五計画支持』という余りにも不条理な計略を止めることが出来ないのだ。

なんとという矛盾。

帝国が誘致し、支持すべきはずである『第四計画』は帝国が真つ当な国防をすればするほどに瓦解し、忌むべき『第五計画』の助力となる……。

これが矛盾じゃなければ、何だというのだ。

終わりだ……霧山は、オルタネイティヴ4は、封殺されてしまった。

この逆境を覆す切り札なんて。

「……とまあ、一見するとオルタネイティヴ4が君達に封殺されてしまっているこの状況……君達がここまでやって、漸くイーブンだよ」

「え……？」

霧山があっさりと言った。

その言葉は、苦し紛れで出た……という訳ではないようだ。

纏った空気は真剣味を帯びているものの、決して重くはなっていない。

「お前、何を言って……」

齊御司達がここまで手を打っておきながら……イーブン？

オルタネイティヴ4は……霧山は、既に封殺された形になっているはずじゃないのか？

今の時点で彼等は戦力増強を実現させている。そして現状からの



妨害は極めて困難。

故に霧山は手を出せず、後は強化された軍事力でBETAを迎撃されてしまえば……BETAの停滞が西へとずれ込んでしまう可能性は圧倒的に高くなるはずじゃないのか。

「不破君。そもそも、オカシイとは思わなかったのかい？ 武と純夏を救う。その目的の為、彼等がこんな早過ぎる時期から戦力増強と言う遠回しな手段を講じなければいけなかったことに」

「 待つてくれ。どういうことだ。戦力の増強が、遠回しな手段……？ 真っ当で順当なはずのそれが何故、遠回しになるんだ」

霧山その言葉に、思わず俺は疑問を口に出していた。

彼等のやっていることは、確りとその目的に沿った手段の筈だ。

武と純夏を救う。その為にはBETAを食い止めなければならぬ。

だからこそ、戦力の増強に努めたのだろうか？

それが……遠回し？

「……いいえ、霧山殿の言う通りです。確かに私共が行使した戦力増強は遠回しな手 により簡潔で、より迅速な……『近道』が存在します」

「近、道？」

その回答は思わぬ所から聞こえてきた。

正に渦中の人である月詠が、自分達の行動が遠回しな手であると認知している……？

それどころか、『近道』等という上等なモノすら存在していると言っている。

ならば何故、それを知っていながら遠回りだと理解している手段を。

「そう、近道だ……ただ二人を死なせたくないだけなら、柘町から他所へ移してしまえばいいのだからな」

「……………あ」

確かに。

確かに斉御司と月詠の言うとおりだ。

それは、とてもとても、簡単なことだった。

BETAが攻めて来ようが、そこに武と純夏がいなければ彼等の目的は達成される。

オーストラリアでもいい、アメリカでもいい。

そこへ守るべき対象を移してしまえばいいんだ。

イレギュラーな戦術機すら帝国に導いてみせた二人だ。

その気になれば、実現できるだろう。

彼等の有利が際立つ。

だというのなら、何故それを理解していながらやらないんだ。

彼等は何を躊躇しているんだ？

「不破君。思い出してごらん」

「思い出すって」

「正史にて、BETAの日本侵攻は第二帝都……東京直前で止まる。だけどBETAはね……軍に、力によって止められたんじゃない

『勝手』に、止まったんだ」

……そうだ。

俺の記憶でも、そうだ。BETAは軍に止められたんじゃない。米国は既に撤退し、帝国軍も損耗が酷く、立て直しが出来ないという状況にまで追い込まれていた。

あのタイミングでBETAが進撃を選択していれば……日本全土が蹂躪されていたであろうことは誰の眼にも明らかだった。

米国の撤退の判断は、それが極めて高確率で実現する未来であると断定し、日本陥落を皮切りに起こるであろう第五計画への移行を予期してのモノだった。

だが米国の予測は外れ、事実としてBETAの軍勢は第二帝都

東京を目前にして原因不明の撤退を行った。

そう、”横浜”に撤退したんだ。

何故？

「BETAは何故、止まったんだらうね」

そんな理由。BETAが停滞した理由が。

「もし、柊町に武と純夏がいなくても…… BETAは帝都前で止まったと思うかな」

まさか／戦力でも、時間でも、距離でも……偶然ですらもなく。

「BETAは1995年の段階で、既に人間に興味を抱いていた。歩兵級の生成に置ける人間の再利用がそれを顕著に物語っている。日本大侵攻において、研究対象である『サンプル』採集の優先度が高いとすれば？」

それは／ただ『欲しい物』があったからだとすれば　。

「不破君。彼等が二人の移住に踏み出せないのは他でもない。白銀 武と鑑 純夏は…… BETAの進撃を横浜で必ず停止させる、最終『絶対』防衛点と成り得るからだ」

横浜で死ぬのが……この世界の二人に課せられた『より良い未来の選択』……そういう因果に縛られているってことかよッ!?

「……BETAは柘町にて最高のサンプルを発見し、日本侵攻に置ける最優先事項を達成した。ならばそれ以上、無闇矢鱈に『未知の災害』である人類へと歩みを進めるのは愚策だと結論付けた……つてところか」

沈黙で支配された格納庫の中、口火を切ったのは斉御司だった。重苦しく息を吐きながら、霧山の推察に一切の否定をせず、同意を示す。

「先ずは、一つ目の不安の種は取り除けたよ。君達が利己的に保身を考えられる人間である事は不幸中の幸いだった。もし失敗した時”他の誰か”に後を任せられる可能性を残す程度には、先見の明があつたように何よりだよ」

「……お褒めに預かり光栄な事で。別に、ドウムズデー・カルトに嵌っている破壊主義者という訳でもないんでね。目的遂行が不可能という状況に陥っても、その尻拭いを他所へと丸投げ出来る……此方としては願ったり叶ったりだ」

その会話に、違和感を覚えた。

武と純夏がBETAの侵攻目的に見合った存在である可能性が高いということは理解できた。

だが、何で……どうして。何故、斉御司達は全ての手を尽くさない。

彼等は最初に『武と純夏を救う』と言った。  
ならば。

「斉御司……俺はまだ納得できていない。戦力の増強をし、尚且つ二人を横浜から離すという手もあるはずだ……何故それをしない」

そう。彼等の目的が徹頭徹尾、二人の救済ならば……BETAの停滞は、二の次の筈だ。

BETAを止める為の戦力は彼等が既に用意した。だが、それが力及ばず、無駄になってしまったときの事を考えていないのは何故だ。

俺が提案する形になった二重の策なら、”保険”が出来る事になる。

これならBETAを横浜より西で止めるための戦力を編成しつつ、それでも最悪止まらなかった場合、日本全土が陥落しようとも絶対に二人を逃がすことが出来るんだ。

その後にもオルタネイティブ5で宇宙へと逃がせば、彼等の目的は達成出来る。

彼等の目論見通り、白銀 武と鑑 純夏は救われる……この星の

未来という、大きすぎる犠牲を代償として。

「それは出来ない」

だが、俺の疑問は否定の言葉で返された。

「……何故だ」

「 仮に、だ。もし仮に、俺達が用意した補強戦力が無意味に終わり、BETAが止まらず、横浜から二人を離していた場合……絶対的なBETA停滞条件を欠く事になる。そうなってしまえば、米軍が予見していた通りにBETAは日本全土を蹂躪するだろう。それは即、オルタネイティブ5の台頭を許すことに繋がるからだ」

……そんな事は、解っている。

第四計画を誘致した国が陥落し、亡国となれば発言力の低下は免れない。

そうなれば強制的に第五計画へと移行してしまう可能性だって出てくる。

だが 。

「だが、どの道お前達は武と純夏を助けた後、第五計画で宇宙へと逃がすつもりなんだろう。 なら、地球の未来や環境なんて二の次の」

「違うな、間違っているぞ」

「……間違いだって？」

何を惚けたことを……。

武と純夏が生存した先にあるのは、オルタネイティヴ4の失墜とオルタネイティヴ5の台頭だ。

「抑々だ。俺は一度足りとも、積極的に地球を放棄します……等とは宣言していないはずなんだがな」

「……っ」

馬鹿げた事を……遠回しにそう言っているも同然じゃないか。

まさか……白銀 武と鑑 純夏をオルタネイティヴ4に利用せずとも、オルタネイティヴ5の発動を阻止し、地球上のBETAを駆逐する青写真が出来ていると言いたいのか。

無理だ、絶対に。そんな機械仕掛けの神めいた采配は不可能だ。

それが出来るのならば、正史で彼女がやっているんだよ

……ッ！

「お前は、香月夕呼にすら用意する事が出来なかった”最高の切り札”を持っているとでも言うのかよ……ッ？」

武と純夏の犠牲なくして、オルタネイティヴ4の完遂は有り得ない。

いや……その二人の犠牲が在ったというのにも関わらず、気の遠くなるほどのループを繰り返した末に漸く成功に至ったんだぞ。

それだけ勝ち目の薄い計画なんだ、オルタネイティヴ第四計画……

…この星に蔓延した絶望を払うのは……ッ！

その流れを覆す切り札なんて。

「在るんだよ、不破 衛士。君には与り知らぬ事だろうが……在るんだ、切り札が。それは未だ俺達の手の内にはなく……しかも未完成というお粗末な物だが、な。そうだろう？ 霧山 霧斗」



「……っ!?」

俺は驚愕を隠せず、隣に立つ少年へと振り返る。

どうして……何で、そこで霧山の名前が出る。

持っているのか。彼が、その切り札を。

「……ふむ。それは僕なら知っているだろう、と言いたいのかな。しかし”未完の切り札”、ね……僕には、やはり『X M 3』を指す言葉にしか聞こえないけど」

齊御司の言葉に、特に取り乱した様子もなくそう返す霧山。

確かに……『X M 3』の存在は人類の戦力の底上げに大きく貢献する。

齊御司達は、それを突破口に徐々に劣勢を覆していく事から、X M 3を切り札と称している……? そう、だよな。

もしもX M 3以上の切り札が存在しているのなら、霧山が彼等からの誘いを頑なに断る理由がない。

「X M 3、ね……まあいい。話が逸れてしまったな、謝罪する。不破 衛士……質問の回答だ。俺達は積極的な地球の放棄などは望んでいない……だが、二人を救いたくもある。それでいて、講じた手段の全てが無駄だったときの保険も欲しい……戦力の増強を行いなから、武と純夏をあの場合から動かさないのは矛盾ではない。挑戦と、抵抗と、妥協と、譲歩を……限界まで織り交ぜた俺達なりの折衷案だ」

「……ッ。つまり、お前等は」

齊御司達の求める未来……それを手に入れる為の勝利条件は。

「この世界の白銀 武と鑑 純夏を救い、二人を”未だ見ぬ未来”を切り開く為の……新たな『御伽話』の象徴にするとでも言いたいのか……ッ!？」

「 ああ。其の通りだ」

嘘だろ、と。

自分で問い質しておきながら思ってしまった。

今この世界を歪ませている異変の全てが、ただ武と純夏の二人を護るために起こされた……？

俺達が見た『御伽話』とは全く違う……”この世界の武と純夏”を中心とした、それでいて未知なる新たな『御伽話』を創造する為の、布石とする為に!？」

「そんな……ッ」

それがどういうことか、理解できているのか。

途轍もなく強大な存在に挑むということなんだぞ。

人が企てた作戦や、計画なんていう計り知れる存在じゃない。

BETAという計れずとも眼に見えている敵性存在でもない。

お前等が相手取るうとしているのは  
のモノだ。

それは世界の流れ其

『運命』と呼称していい存在なんだぞ。

そんな目にも見えない、絶対的なモノを相手取り、人類滅亡なんてリスクまで背負い込んで。

「無責任過ぎる……ッ。ループの起点を壊してまでやるべき事なのか？ 今までが思い通りに行ったから、この先も同様に事が運ぶとも思っているのか……ッ？ そんな、夢物語のような事が……ッ  
！」

「だが、香月夕呼が”別の世界の未来”で言っていただろう。そう、『ラプラスの悪魔はもう存在しない』。未来は不確定だ　お  
眺め向きに、俺達やお前達みたいなイレギュラーもいるしな……もしかすれば、そういう未来もあるかもしれんぞ」

「……………ッ！」

本気だ。

ハツタリなんかじゃない。直感でも理屈でも解る。

彼等は、本気で武と純夏をBETAから……いや、『運命』から護る心算でいる。

そして、死に至る運命から脱却した二人を、未だ見ぬ”新たな未来”を切り開く為の象徴とし、戦っていく気だ。

「……………不破君、無駄だよ。止せ、と言って聞届けるようなタマじゃ

ないんだ。いいさ、白銀 武と鑑 純夏を柊町に置き続ける……それさえ守るのならば、後は好きにすればいい」

「霧山、お前」

「……此処まで来てしまえば……後はもう天秤がどちらに傾くか。それ次第だよ」

「それは……」

例え彼等に封殺され、妨害すら出来ないこの状況でも……横浜にさえ二人が居ればいい。

そう言いたいのか、霧山。

つまりBETAが止まるか、進むか。全てはそこに掛かっている。と。

お前の言った『状況は”イーブン”だ』という言葉。その意味を、漸く理解出来た。

全ては運……どれだけ手を尽くそうとも、最後の最後で全てを決するのはBETA次第。

BETAのみぞ知る未来。

「ああ……だからこそ、これだけは改めて言うておくよ。僕は君達に絶対に協力はしない」

「……残念です。貴方には『X M 3』の早期提供を都合して頂きました。かったですか」

「悪いね月詠さん……敵に塩を送れる程、人生に余裕がないんだ。どれだけ政治的な圧力を掛けてきても無駄だよ。そもそも『無い物』を提供するなんて出来ないからね」

霧山への協力要請は、それが主な狙いか。

『X M 3』

搭載するだけで戦術機の性能を引き上げ、その真価を発揮させる……御伽話から零れ落ちた、魔法のような代物。

無量大数のループの先に、一人の若き英雄が聖母と共に創り上げた奇跡の産物。

霧山が『X M 3』の提供を断つたことにより、彼等は劇的な戦力の底上げを望めなくなった。

天秤はまだ、どちらにも傾かない。

その瞬間まで、未来は解らない。

ラプラスの悪魔はもういない。

「さて、誘いは断わられたが……これからどうする心算だ、霧山」  
「どうもごつも、当初の予定通りさ。」正史”通りのオルタネイテ  
イヴ4完遂に挺身するだけだよ 君達の失敗を心底渴望しながら、ね」

「……残念だが、その望みは叶いそうにない。BETAは止まるからな」

「いいや、止まらない。BETAは二人を求めて突き進むだけだよ」

齊御司と言葉を交わしながら、踵を返す霧山。

もうここに用はないと言わんばかりに俺達に背を向け、唯一の光源となつてゐる格納庫の出口へと歩みを進めて行く。

「齊御司君、月詠さん……どうか気張らずに事へと当たつて下さい。例え失敗してもお構い無く。その時は『正史』通り　オルタネイティヴ4が、全てに片をつけますから」

逆光の中、此方に振り返らずに手を掲げ、挑発とも取れる台詞を残し……霧山がこの”密会”から立ち去つた。

俺はただそれを黙つて見送る事しか出来なかつた。

「……………ま、こうなるか。あまり期待はしていなかったが」

「残念ですが、想定範囲内です。しかしこれで不知火により注視せざるを得なくなりました。ここで転べば、戦力の大幅な底上げは望めません。やはり斯衛に」

霧山が去るのを見届けた彼等は、暫しの静寂の後、今後についての予定を練り始めた。

俺が聞いているのもお構い無しなのは、俺に妨害行為が出来ないのを理解しているからだろう。

例えこれを聞いているのが霧山だとしても、彼等の『真つ当な国防』に口は出せない。

俺も、帰ろう。

此処にこれ以上いても、意味はない。

…………俺の存在そのものに、もはや影響力がない。

既に状況は政治的な遣り取りに移行していた。

俺に権力はない。干渉する術がない。

だから、もう過程に対して何も出来ない。

そして、最後の最後で全てに決着を付けるのはBETA次第

つまり計り知れない『運命』次第といってもいい。

俺は…………過程にも、結末へも、手を出せない。

だから　　ここでドロップアウトだ。

「……………邪魔して悪かった。俺も帰るよ」

この『密会』は本来、彼等と霧山だけのモノだったはずだ。

突然の乱入で場を混乱させた事を詫び、俺も踵を返した。

「……お待ち下さい。貴方への要件が、まだ済んでいない」

月詠のその言葉に、思わず足を止めて振り返った。

俺への、要件だと？

至って真面目な表情で、斉御司も月詠も此方を見ている。

冗談では……ないようだ。

だが、俺には霧山の様に彼等に差し出せるものはない。

斉御司達のように、帝国の上に食い込んでいるわけでもない。

放っておいても障害にすらならないような存在に……ただの一般人である俺に、何の用があるというんだ。

「いや何、要件というのは他でもない。遠路遙々、今日というこの日に此処へとやって来て俺達と巡り逢う……これも何かの縁だ。不破 衛士、俺達と一緒に来ないか」

「なッ」

斉御司から飛び出した言葉に、俺は驚愕を禁じ得なかった。

勧誘……？ まさか、それこそ冗談だろう。

俺は彼等にとって無価値も同然だ。

手助けなんて以ての外だ。

「……俺はお前等に何も提供できないんだぞ。そんな事ぐらい、解



っているだろう」

「確かに、其方から此方へは何も提供出来ない、かもしれない。今はな。だが　此方から其方へは出来る。不破　衛士……”保険”が欲しくはないか？」

何……？

”保険”、だと？

「BETAを止めることに成功し、武と純夏が生き延びた先に……敗北が待っている可能性もある。オルタネイティヴ5の発動を止めることが出来なかった……そんな時、両親と一緒に宇宙へ逃げたくはないか？」

「ッ　　それ、は」

「選りすぐられた10万と少し。脱出枠は、それだけしかない。だが、君の持つ『例の資格』は武器になるぞ。それを基点に俺達の元今の段階から相応の環境で、相応の努力を積み重ねれば……優秀な人間であるという証明が出来れば……俺達も君を『枠』に押し込みやすくなる」

「……ッ！！」

揺れる。

心が揺れる。

最悪のカードを、切られた。

正に悪魔の囁きだった。  
知ってるだろう、俺は。

これからこの国が、星が、地獄と化していくことを。  
其れを見越した上で、そこから逃げていいと。  
その為の道を用意すると。

目の前の悪魔は、天国への片道切符を呉れて遣ると言ったのだ。

「…………『契約』しないか。俺達と一緒に来てくれれば、運命に挑んだその先に敗北が待ってようと…………君と、御両親の脱出枠を、武や純夏と同じ優先度で確保すると誓う」

馬鹿な。所詮は、所詮は口約束だ。

守らなければいけない、なんていう絶対的な制約はない。  
そもそも大前提として、事が上手く運べばという想定の上での提案だ。

彼等の思い通りに行く保証なんて、現段階では、ない。

『契約』を蹴ったところで、彼等の思惑が外れてしまえば俺にデメリットはない。

だけど、それでも……………思ってもいなかった、望外の待遇には違いない。

彼等との共闘の先に、敗北が待っていれば……………ループによるやり直しは出来ない。

もしそうなった時……………逃げる事が出来る。地獄と化した地球から。

父さんと母さんと一緒に、遙かなる宇宙への旅路へと。

産んでもらった、育ててもらった義理もある。

一方で、あの人達の子供に、転生という形で”俺”のような異物が混じったという罪悪感もある。

そして何よりも……親愛を抱いている。

出来れば、平和な暮らしを送る事の出来る星へと送り込んであげたい。

それに俺自身……どこかで逃げたいと、思っているんじゃないか……？

理性は、「抵抗」を囁いている。

運命に抗え、と。そう言っている。

武と純夏がBETAに殺されるという運命に抗い、新たな未来を切り開く為に彼等と共に闘う。

だが、もしも力及ばず、その先に敗北が在り……宇宙へと上がることになってしまえば……その時は、共に逃避行へと身を寄せる。

挑んだ先に待っているのが勝利だろうと、敗北だろうと、俺の安全は確保される。

彼等と共に行く。それは……その選択は、決して間違っている訳じゃないんじゃないか……？

「俺は……」

彼等の手を取ってしまっても……いいのではないか。

そう思ったとき、斉御司の差し出した右手へと、ほとんど無意識

に俺の左手が伸びていった。

だが、その左手を、俺の右手が無意識に掴み止めた。

本能が、「享受」を叫んでいる。

運命に従え、と。そう言っている。

彼等の語る未来は、夢物語だ。同調する等以ての外だ。

既知の『御伽話』を……二人の死を肯定し、最小の犠牲を以って世界を救う。

219

徹底したりスク回避の先に、最善の未来を掴む……「享受」こそが真の「抵抗」に繋がるのだと。

不破 衛士は……彼等と共に行くべきでは無いと。

「俺は ……」

掴む右腕が。掴まれた左腕が。震えて軋んだ。

もう、自分を騙せそうにない。

死んでもいいなんて有り得ない。  
仕方ないなんて有り得ない。

オルタネイティヴ5の遂行によって取り残される人達は、『その他大勢』でも『有象無象』なんかでもない。

オルタネイティヴ4の遂行によって生贄となる白銀 武と鑑 純  
夏は、世界を救うための『舞台装置』なんかじゃない。

そんなことは解っていたのに……それでもBETAに殺されるなら仕方ないと、自分の無力を盾に自分を騙してきた。

だけでもう無理だ。

ああ、そうだ……俺は選んですらいなかった。

何かを切り捨てようとする事も、何かを救い上げようとする事も、ただ時間に流されていただけで。

けど、彼等は違った。

霧山は 悲劇のヒーローとヒロインを切り捨てて、大勢の人々と地球を救う『正史』に準ずるオルタネイティヴ4を完遂する道を選んだ。

斉御司と月詠は 悲劇のヒーローとヒロインを救い、ループの基点を壊し、『正史』を覆すためにオルタネイティヴ5へと抵触するリスクすら背負い、新たな未来を切り開く道を選んだ。

「……俺は ツ！」

俺は、どうしたいんだ。

駄目だツ……頭の中が滅茶苦茶で……考えが纏まらない。

俺みたいなのが、それを選べる立場にあること自体が、間違いないじゃないのか？

勝手に外から迷い込んだ俺が……そんな上から目線で、この世界の未来を選んでいいのか？

そもそも何で……何で、こんな事になった？

マブラヴが好きで、A3揃えて、外伝網羅して、雑誌掻き集めて、メカ本出たのを喜んで買って読んで悦に浸って……戦術機に乗る事が出来ればなんて馬鹿なこと考えてたのが……何で、こんな事になつて……ッ。

クソ……何で”前世”なんて思い出す。

過ぎた事なんて……どうせ戻れない世界の事なんて、思い返しても意味はない。

参ってる証拠か。頭ん中が、相当煮え滾ってる。

だけど、それでも選ばないといけないんだ。

今此処で決めなきゃ、また今感じてる焦燥を忘却して、時間に流されていくかもしれない。

こんな宙にぶら下がった状態で、何時迄もいられないなんて解つてんのに……ッ！

「あの、不破……君。まだ、世界は分岐点に差し掛かっています。不破君の御両親については今すぐには無理ですが、難民キャンプでのノウハウを蓄積してもらった後、東へ退避させるのは今の時点で決定しています。一先ず、落ち着いてください。まだ七年……七年あるんです。其れまでに、選んでくれればいいんですよ？」

「……………」

混乱してるのが気取られたのか。  
見兼ねた月詠が、心配そうな表情で此方に優しげな声を掛けてくる。

有り難い。

本当に、有り難かった。

今のその言葉で、かなり落ち着く事が出来た。

彼等は……そこまで先の事を企てているんだな。

霧山へのバトンタッチも考慮した上での選択だという訳か。

考えてみれば、それはとても理にかなっている。避難民を正史よりもより多く逃がす。

それに伴って、難民キャンプの運営に精通している人員もまた、より多く必要となる

偽善や自己満足ではなく、彼等にとっても求める結果への効率に直結しているから、その行動の信頼性の保証はされている。

足元に人々が大勢いる状況で、衛士達が全力で戦えるはずもない……そこにもメスを入れるのは、BETAを少しでも効率的に阻止したいのであれば必要不可欠な部分だ。

父さんや母さんが……難民対策局が、今年から実行に移す九州での難民キャンプ。

そこで培われた経験を、関東の方に持ち帰るのは初めから織り込み済みだった。

だったら、二人が大侵攻で逃げ遅れることはない。  
死んだりしない。

そう思ったとき、心が一気に軽くなった。

頭もクリアになっていくのが解る。

自分が思ったより、両親が心の中を占めてるということなんだろうか。

思わず熱くなってしまっていた自分を恥じる。

尤も、冷静になれたところで直ぐに考えが纏まるというものではない。

しかし……自分が二つの何方かを判然と選べない理由は、理解出来た。

決定打と成り得る”立脚点”が、俺にはないんだ。

奇しくも12・5事件……クーデターの時、白銀 武が苦悩することになった立脚点……それが俺にも、ない。

因果導体の白銀 武とはまた『違う外』から来た自分。

正史を、未来を知っている自分。

武とは違い、ここ以外に帰る場所のない自分。

一般市民という立場に生まれ落ちた……『不破 衛士』という存在。

霧山のように、オルタネイティヴ4の近くに寄り添うように生まれだ訳じゃない。

斯衛の二人のように、帝国の上に……『真つ当な国防』に干渉出来るような場所に生まれた訳でもない。

どちらからも、等しく離れている。

どちらへも、何某か思うところがある。

それ故にどちらにも偏らず、どちらにも手を伸ばすことを許され



ている。

自由意志によって其れを選ぶ事が、俺には出来る。

「ありがとう、月詠……さん。それと、ごめん……今は頭の中がこんがらがって……正式な返事を返せそうに、ない」

謝罪する。

差し伸べられた手を、握り返すことも、振り払う事もしない優柔不断さを。

「い、いえ！むしろ謝るのは此方です……内のバカ殿が、非道にも人質を取り、弱みから突き崩すような下衆な交渉をして申し訳ありません。よく言い聞かせておきます」

「うおい、バカ殿ってちょっと……月詠い……お前なあ……こういうのは交渉だと基本だろうが。何で俺が怒られる……」

青が紅に、尻に敷かれているのか。

俺もだけど、複雑なんだな……お前等も。

「……月詠さんの言葉に、甘えさせて貰っていいかな。時間が欲しい……一年でいいんだ。その間に、必ずどちらかを選ぶから」

七年とは言えない。それはタイムリミットに差し掛かっている。

だから、一年……されど一年。それでも、貰い過ぎなぐらいだ。

今すぐにも決めないといけない。そんな問題に、年単位の猶予期間を要求している。

情けない限りだが、自分にはこれぐらい必要だと思う。

自分の立場は、余りにも”普通”すぎるから。

「諒解しました。一年間、答えをお待ちします……私達の手を取るか、払うか。それは、貴方の自由です。自分で判断して、自分で決断してください」

「ごめん、ありがとう……斉御司も、それで納得してくれるか……？」

「ちょっと待て……何で月詠がさん付けで俺が呼び捨てだ。俺は五撰家だぞ。頭が高いぞ平民」

「……な、何？」

快く受け入れてくれた月詠さんに対し、渋い顔をしながら訳の解らない事を俺に向かって言うってくる斉御司。

凄くどうでもいいことで機嫌悪くなりやがった。

まさか身分や位を盾にしてくるとは……駄目だコイツ、器が小さい。

こんなヤツにさっきまで交渉で押されまくってたのか俺……。

「暁様……何ですかその、俺は親善大使なんだぞ、みたいな言い方は。底が知れるので、お願いですから自重してください」

「ぐぬぬ」

手も足もでないとはこう言う事か。

一言も言い返せずに、凹んでる。

……だが、それが酷く不自然に見えた。

さっきまで圧倒的に優位に立ち、俺を追い詰めていた斉御司。今、月詠さんに詰られている斉御司。

この乖離の激しい二面性……どちらが本当の彼だ。

彼は、彩雲を帝国に誘致した原動力のはずだ。

子供というハンデを背負って、現役の政治家や軍人と渡り合ってるはずなんだ。

横の繋がりがあるとは言え、並大抵のことじゃないんだぞ。

やはり、演技や道化か……？

油断は禁物か……霧山は、斉御司にギリギリまでやり込まれてるんだ。

気を許していい相手じゃない。

……いや、今はそこまで警戒しなくてもいいか。

”まだ”味方になるか敵になるかも解らないからな。

何れにせよ……これで一年の猶予期間が出来た。

その間に、逃げずに選び抜かないといけない。

「じゃあ、今度こそ戻ります。両親と来てるから、そろそろ心配して探してそうぞ」

「お待ちください、コレを」

そう言って丁寧に折り畳まれた紙を手渡された。

「私共の連絡先です。此度の返答や……よっぽどの緊急の用があれば、何時でもここに。信頼出来る人に通じるので、そこを一度通して頂きたい……色々と面倒事もあるので」

「解りました。何から何まで……助かります」

” 貴方の自由です ”

……月詠さんはそうだった。

そうだと、俺も思う。

俺は自由だ。俺だけじゃない。

白銀 武も、鑑 純夏も、自由なはずだ。

BETAという途轍もなく大きな脅威に狙われているかもしれない。  
い。

そんな残酷な因果に縛られていようとも……自由だ。

その前に何が立ちはだかるうとも。

立ちはだかった何かが、どれほど強大であろうとも。

関係ない。

例え、それが『運命』や『宿命』なんて代物だとしても。

それに従うか、抗うか……自由なんだ。

「俺は、貴女達と敵対することになるかもしれない。それも、自由  
？」

「……ええ、自由です。私共も何故、此処にいるかは解りませんが、此処に生きていく限り、自由です。本来死ぬべき者を救わんと……足掻くのもまた自由です」

「好きにするといい。確り考えたその上で自由に行動した結果、目的が擦れ違い対立したのなら仕方ない」

「……」

俺はその答を聞いて、彼等に背を向ける。  
今度は止められなかった。

降って湧いた、巡り逢い。

運命に抗うか、運命に従うか      それを突き付けられた。

今度こそ、目を背けられない。

一年だ。一年間……それを直視し続ける。

「……選んでくれ、不破 衛士」

「願わくは、共に歩む未来があらんことを」

背中を押すように、二人の声が響いてきた。

……ああ、言われなくても悩んで選ぶさ。

人類が必死で稼いでくれてる、貴重な時間の中で。

二人から離れて格納庫から外に出ると、強い日差しに目が眩んだ。  
まるで場違いな世界から解放され、元の場所に戻ってきたような  
安心感。

殆ど無意識で、来た道に戻る。

ただ今は、空と海の交わる青を、無性に眺めたかった。

時間感覚が馬鹿になっている。天を見上げれば、日が高い。どれほど歩いたのか……一般人が数多く目についた。

俺は知らぬ間に、立ち入り禁止区域から一般解放区まで戻ってきていた。

酷い倦怠感が纏わり付く。

備え付けのベンチを探し、揺ら揺らと足を引きずりながら辿り着き、倒れこむように体重を預ける。

「はぁー……」

深く、深く、溜息を付いた。

我慢してきた精神的疲労をゆっくりと抜いていくように。

力なく顔を伏せながら、横目で海のほうを見ると人がまだ群がっていた。

それは、俺がこの港に来た時と何ら変りない風景だった。

ただ、一点を除いて。

「……アレは……」

視線を上げる。

その先には、戦術機母艦の上に悠々と立つ、鉄の巨人がいた。

T S F - T Y P E 8 8 / F - 1 6 J 彩雲

頭部しか見えなかった時とは違い、母艦内のリフトが上がってその全身を日の下に晒していた。

中隊規模の彩雲が、群がる人々を見下ろしている。

「日本向けに、改修されてる」

遠目にも解った。

通常の F - 1 6 より、肩部装甲と下腿部が大きい。

日本で運用するに際し、耐久性の向上と稼働時間の延長の為、全長こそ変わらないが部分部分での大型化が施されている。

……この仕様、内装は発展途上だろうが、外装だけで言えば正史におけるブロック 5 2 / D に相当する。

イニシャルコストは若干高くなるが、後々改装を必要に迫られる事を考え、ランニングコストを重視したのだろう。

十中八九、斉御司達の入れ知恵だ。

「……本気、なんだな」

あれは象徴だ。

決して場当たりのな思いで引き入れたモノではない。

戦って、戦い続けて、その先に武と純夏を救う。

そして救った後も戦い続ける。

もし救えなくても……それでも戦い続ける。

そんな思いを物語るように、あくまで長期的な運用を考えて改修された機体だ。

不知火が配備された後も、最前線で運用され続けていくのだろう。

現状における斉御司達が重ねてきた行動……その集大成だと言っ  
ていい。

「俺にも……」

彼等のように、何かを成すことが出来るんだろうか。

例えば、視線の先に立つ異端の戦術機のように。

何かを形にすることが出来るだろうか。

俺に、出来る事　　。

そこまで考えたとき、頬にひんやりとした物が押し当てられた。

「つつつつめたっ!？」

みつともない悲鳴を上げて飛び上がり、ベンチから転がり落ちる。

だ、誰だ！　いきなり人の顔に冷たい物押し付けやがったのはッ！



驚いた心臓が、凄まじい勢いで血液をポンプしている。  
きつと心拍数は三桁の大台に乗っているだろう。  
受身を取りながら、犯人らしき人影を睨みつける。  
しかし、そこに立っていたのは。

「や」

犯人が缶ジュースを両手に持ち、当たり前のように挨拶をしていた。

「…………お前…………先に帰ったんじゃ」

思わぬ襲撃者は、俺よりも早くあの場から去ったはずの霧山 霧斗だった。



第九話    Encounter    中編（後書き）

これで本当に出来上がっている分は終了です。

arcadia 投稿分と完全に並びました。

これから先は、またひどく更新が滞ると思いますorz

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0459v/>

---

Muv-Luv Initiative

2011年7月28日18時00分発行